

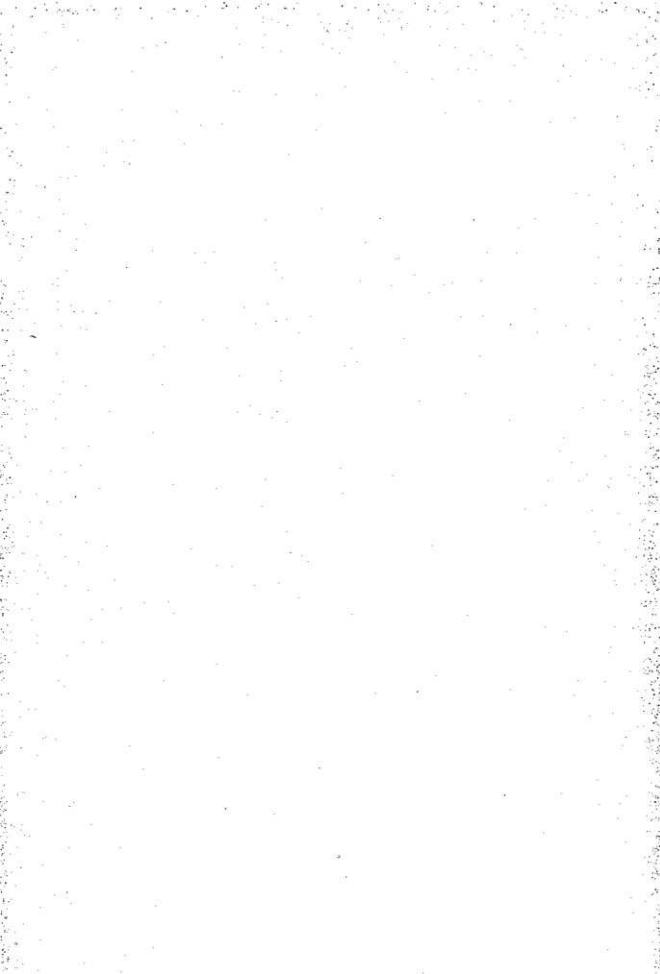
江別市

西野幌11遺跡
西野幌13遺跡
西野幌14遺跡
下学田遺跡

—道立野幌総合運動公園用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

昭和62年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



江別市

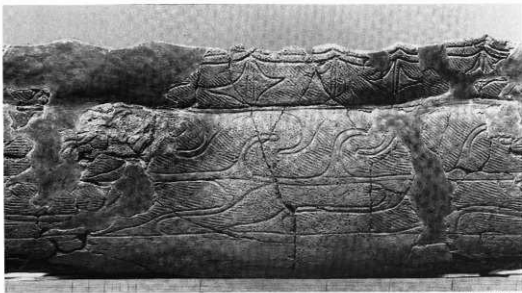
西野幌11遺跡
西野幌13遺跡
西野幌14遺跡
下学田遺跡

——道立野幌総合運動公園用地内埋蔵文化財発掘調査報告書——

昭和62年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





展開写真



西野幌11遺跡 P-1出土の土器

例 言

- 1 この報告書は北海道立野幌総合運動公園用地内における埋蔵文化財発掘調査のうち西野幌11遺跡・西野幌13遺跡・西野幌14遺跡・下学田遺跡に関するものである。
- 2 調査は、北海道教育委員会の指示により、北海道住宅都市部の委託を受けて、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した。
本書に記載の出土資料は北海道教育委員会が保管する。
- 3 本書の編集は調査部調査第二課が担当した。各章の執筆は以下のとおり分担し、それぞれ報文末尾に文責者を記載した。
Ⅰ 種市幸生(調査第二課課長)、Ⅱ 高橋和樹(調査第二課)、Ⅲ 高橋和樹・谷島由貴(調査第二課)、Ⅳ 高橋和樹・三浦正人(調査第二課)・佐川俊一(調査第一課)・佐藤和雄・森岡健治(調査第四課)、Ⅴ 高橋和樹・三浦正人(調査第二課)・森岡健治(調査第四課)、Ⅵ 高橋和樹・葛西智義・谷島由貴(調査第二課)・花岡正光(調査第一課)Ⅶ 佐藤和雄(調査第四課)。
- 4 遺構の実測は木下昭仁・中村芳子・南出洋子・和田千恵子・桂島キヨ子・田中(波川) 静江・須貝尚樹・佐々木直貴ほか、各担当調査員がおこなった。
- 5 遺物の写真は菊池慈人が担当した。遺構図などのトレースは三国谷雅子・村上明美、遺物の実測・トレースは園部亜佐子・山田真理子・木下昭仁・工藤綾子・藤内まゆみ・伊藤幸子・小林晴美、遺物復元・拓本・集計・図版作成は中嶋政子・小川順子・小島栄子・前川英子・島村和子・飯田静江・木村哲朗、石器材質の肉眼的鑑定は一部のものを北海道開拓記念館 赤松守雄氏に依頼し、他は調査第一課花岡正光が行った。
- 6 Ⅲ章3(図Ⅲ-4)の野幌丘陵の遺跡分布図および一覧表は調査第二課田才雅彦が作成した。
Ⅳ章2(図Ⅳ-5)西野幌11遺跡の焼土分布図の原因は寺崎康史(現 今金町教育委員会)の実測図によるものである。
- 7 口絵の空中写真は国土地理院発行のC HO-76-6 C10-35・36を使用した。また、土器の展開写真は、小川忠博氏の撮影によるものである。

- 8 遺構の表記については、以下に示す記号を用い、確認順に番号を付した。

竪穴住居跡：H 土壌：P Tピット：TP

- 9 実測図の縮尺は以下のとおりである。

竪穴住居跡 1：60

土壌 1：40 (VI章は1：20)

Tピット 1：40

礫群 1：20

家畜墓 1：30

土器実測図・拓影 1：3

石器・土製品・石製品 1：2

(図IV-10 P-9と図VI-11 礫群の礫石器は1：4)

- 10 一覧表中の石器石材については、次の略称を用いた。

And. 安山岩	Aga. めのう	Aga-sh. めのう質頁岩
Bl-Sch. 黒色片岩	Che. 珪岩	Che-Sh. 珪質頁岩
Gr-Mud. 緑色泥岩	Gr-Sch. 緑色片岩	Ha-Sh. 硬質頁岩
Mud. 泥岩	Obs. 黒曜石	Per. 橄欖岩
Sa. 砂岩	Sa-Mud. 砂質泥岩	Sch. 片岩
Ser. 蛇紋岩	Sh. 頁岩	Sl. 粘板岩
Tu. 凝灰岩		

- 11 調査にあたっては次の機関や人々の指導ならびに協力をいただいた。

(順不同・敬称略)

北海道教育委員会、江別市教育委員会、北海道開拓記念館、札幌市教育委員会、赤石慎三、赤松守雄、天野哲也、石川直章、石橋孝夫、石本省三、稲垣和幸、上野秀一、右代啓視、内山真澄、浦辻栄治、上屋真一、遠藤龍敏、大井晴男、大島直行、大谷敏三、大野 亨、加藤邦雄、金子浩昌、木村英明、北沢 爽、工藤研治、工藤 肇、久保 泰、後藤秀彦、古原敏弘、斎藤 傑、佐藤一夫、佐藤訓敏、佐藤隆広、澤 四郎、柴田信一、杉浦重信、瀬川拓郎、園部真幸、高橋正勝、田中源一、田村俊之、田部 淳、谷岡康幸、土屋周三、鶴丸俊明、手塚 薫、寺崎康史、百々幸雄、豊原照司、直井孝一、中村 斎、西 幸隆、西本豊弘、野村 崇、羽賀憲二、林 謙作、平川善祥、増川栄一、松下 亘、松田 猛、松野康弘、松谷純一、三浦幸一、三野紀雄、宮夫靖夫、森 広樹、山下和子、山田悟郎、矢吹俊男、横山英介、吉崎昌一、吉田玄一、渡辺秀一、渡辺俊一

目 次

例 言	
目 次	
I 調査の概要	1
1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査の経緯	2
II 発掘調査の方法	5
1 調査区の設定	5
2 基本層序	5
3 遺物の分類	6
III 遺跡の位置と環境	7
1 遺跡の位置と周辺の環境	7
2 野幌丘陵の地形・地質	9
3 野幌丘陵における遺跡の分布	12
IV 西野幌11遺跡	25
1 遺跡の概要	25
2 遺構	31
3 遺物	48
4 小括	64
V 西野幌13遺跡	83
1 遺跡の概要	83
2 遺構	88
3 遺物	94
4 小括	104
VI 西野幌14遺跡	115
1 遺跡の概要	115
2 遺構	119
3 遺物	131
4 小括	160
VII 下学田遺跡	179
1 遺跡の概要	179
2 遺物	181
3 小括	181
引用・参考文献	185

I 調査の概要

1. 調査要項

事業名 北海道立野幌総合運動公園用地内埋蔵文化財発掘調査

事業委託者 北海道住宅都市部

事業受託者 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

調査年度・遺跡・所在地・面積・調査期間

年度	遺跡名	道教委登録番号	所在地	面積	調査期間
58年度	西野幌11	A-02-82	江別市西野幌109番地ほか	1,718㎡	7月1日～10月31日
#	西野幌13	A-02-107	江別市西野幌472番地-1ほか	1,070㎡	#
59年度	西野幌11	A-02-82	江別市西野幌109番地ほか	4,405㎡	5月9日～10月31日
#	西野幌14	A-02-95	江別市西野幌947-1	30㎡	10月8日～10月13日
#	下学田	A-02-83	江別市西野幌929-1	227㎡	10月15日～10月31日
62年度	西野幌14	A-02-95	江別市西野幌947-1	1,214㎡	5月7日～9月30日

2. 調査体制

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

	昭和58年度	昭和59年度	昭和62年度
理事長	中村 龍一	中村 龍一	植村 敏 (昭和62年6月28日まで) 澤 宣彦 (昭和62年6月28日から)
専務理事	山本 慎一	山本 慎一	山本 慎一
常務理事	藤本 英夫	藤本 英夫	藤本 英夫 (昭和62年2月3日まで)
業務部長	横田 直成	横田 直成	間宮 道男
調査部長	竹田 輝雄	竹田 輝雄	中村 福彦
発掘担当者	高橋 和樹 (調査第三課文化財保護主事)	種市 幸生 (調査第三課長)	高橋 和樹 (調査第二課 文化財保護主事) 葛西 智義 (同上、文化財保護主事)
調査員	三浦 正人 (同上、文化財保護主事) 森岡 健治 (同上、嘱託)	高橋 和樹 (調査第三課 文化財保護主事) 佐藤 和雄 (同上、文化財保護主事) 佐川 俊一 (同上、文化財保護主事) 寺崎 康史 (同上、嘱託)	谷島 由貴 (同上、嘱託)

3. 調査の経緯

北海道住宅都市部は、昭和56年10月、北海道で昭和69年開催される予定の第44回国民体育大会に向けて、江別市西野幌に規模63.7ヘクタールの総合運動公園を建設する計画を策定した。公園は、全道のスポーツレクリエーションの拠点になるように位置づけられ、総合体育館、陸上競技場、硬式野球場、軟式野球場、テニスコート、ホッケー場、ラグビー場、多目的広場、憩いの森、プレイコーナー、調整池、その他に園路、駐車場、作業ヤード、ポンプ場などを合わせもったものである。この計画に伴い、住宅都市部は、昭和57年度から、公園の造成工事に着手する運びとなったため、昭和56年10月、北海道教育委員会（以下道教委と呼ぶ）に赴き、事前協議を行なった。

両者での協議の結果、道教委が工事計画にかかわる区域の所在確認調査（表面踏査）を実施することになった。その調査により、工事計画区域内に7ヶ所の包蔵地、（西野幌11遺跡、西野幌12遺跡、西野幌13遺跡、西野幌14遺跡、西野幌15遺跡、西野幌16遺跡、下学田遺跡）の分布することが確認された。

所在確認調査の結果にもとづき道教委はさらに、包蔵地の広がりをはっきりさせるために、範囲確認調査を実施した。調査は、包蔵地の範囲、包含層の状況、遺跡の性格などを把握するため、対象面積の約1%を掘開することを基本とし、必要に応じてトレンチ調査を併用して行なった。調査は昭和57年度だけではなく昭和58年度、昭和60年度にも行なっている。調査によって明確になった包蔵地の面積については後で詳述する。

範囲確認調査の結果をもとにして、再度、両者が協議を行ない、現状保存の困難なものについては、記録保存調査を昭和57年度から行なうに至った。

発掘調査は、道教委の指示により昭和57年度以降住宅都市部から委託を受け、財団法人北海道埋蔵文化財センターが行なうこととなった。以下、遺跡ごとにその調査の経緯を述べる。

西野幌11遺跡は、昭和57年度に7,635㎡の範囲を確認したうち、幹線園路工事にかかわる区域1,000㎡については、遺物が少なく、包含層が攪乱されているため、道教委が工事立会で対応、昭和58年度に市道代替道路、ポンプ場にかかわる区域1,718㎡、昭和59年度に同区域4,405㎡を発掘調査、合計7,123㎡が調査済である。

西野幌12遺跡は、昭和57年度3,540㎡、昭和58年度42,500㎡、昭和60年度5,125㎡、合計51,165㎡の範囲が確認され、そのうち、57年度に園路になる区域3,500㎡、58年度に同区域の継続6,213㎡、昭和59年度は硬式野球場の外野スタンドにかかわる区域5,064㎡、昭和60年度は軟式野球場の外野グラウンドにかかわる区域7,754㎡、昭和61年度は同球場の左翼スタンド継続4,550㎡、昭和62年度は同球場の外野スタンドにあたる区域2,287㎡合計、29,368㎡を発掘調査実施、さらに、昭和63年度に補助園路の部分943㎡を発掘調査する予定である。

西野幌13遺跡は、昭和57年度3,650㎡、昭和58年度17,150㎡、合計20,800㎡の範囲が確認され、そのうち、昭和58年度に市道の代替道路1,070㎡を発掘調査、昭和61年度に道教委がその地域120㎡を工事立会。合計、1,190㎡が調査済である。

西野視14遺跡は、昭和57年度に 2,470㎡、昭和58年度に 8,530㎡、合計11,000㎡の範囲が確認され、そのうち、昭和59年度ホッケー場Aにかかる区域、30㎡を発掘調査、昭和60年度に同区域 108㎡を道教委が工事立会、昭和62年度に西駐車場の一部 1,214㎡を発掘調査、合計 1,352㎡が調査済みである。

西野視15遺跡は、昭和57年度に 8,200㎡の範囲が確認され、昭和58年度に道教委が 1,050㎡を工事立会したのみで、発掘調査は行われていない。

西野視16遺跡は、昭和58年度に 1,320㎡の範囲が確認されて以降、工事立会、発掘調査とも行われていない。

下学田遺跡については、昭和58年度に 6,300㎡の範囲が確認され、昭和59年度に憩いの森の一面 227㎡を発掘調査したのみである。

これまでに発掘調査した遺跡については、道教委が工事立会で対応した部分を除き、調査概報を毎年刊行している。工事計画において一旦区切りを見た西野視11、西野視13、西野視14、下学田遺跡については、本報告書で、昭和57年度以来、毎年発掘調査を継続している西野視12遺跡については、来年度発掘調査予定分を含め、7年分をまとめて作成する計画である。

(種市 幸生)

北海道立西野視総合運動公園用地内遺跡別調査概要一覧

遺跡名	道教委登録番号	所在地	調査年度	調査内容	調査対象面積	調査主体
西野視11	A-02-82	江別市西野視109番地ほか	昭和57年度	工事立会	1,000㎡	道 教 委
"	"	"	昭和58年度	発掘調査	1,718㎡	埋文センター
"	"	"	昭和59年度	"	4,405㎡	"
西野視13	A-02-107	江別市西野視472-1番地ほか	昭和58年度	発掘調査	1,070㎡	"
"	"	"	昭和61年度	工事立会	120㎡	道 教 委
西野視14	A-02-95	江別市西野視947-1番地ほか	昭和59年度	発掘調査	30㎡	埋文センター
"	"	"	昭和60年度	工事立会	108㎡	道 教 委
"	"	"	昭和62年度	発掘調査	1,214㎡	埋文センター
西野視15	A-02-97	江別市西野視502番地ほか	昭和58年度	工事立会	1,050㎡	道 教 委
"	"	"	昭和62年度	"	124㎡	"
下学田	A-02-83	江別市西野視929-1番地	昭和59年度	発掘調査	227㎡	埋文センター
西野視12	A-02-106	江別市西野視497-1番地ほか	昭和57年度	発掘調査	3,500㎡	埋文センター
"	"	"	昭和58年度	"	6,213㎡	"
"	"	"	昭和59年度	"	5,064㎡	"
"	"	"	昭和60年度	"	7,754㎡	"
"	"	"	昭和61年度	"	4,550㎡	"
"	"	"	昭和62年度	"	2,287㎡	"
"	"	"	昭和62年度	工事立会	16㎡	道 教 委

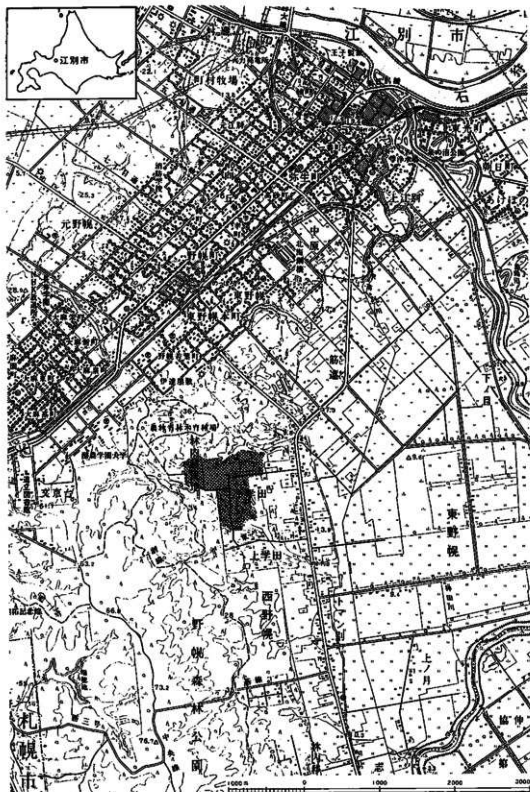


図1-1 道立野幌総合運動公園用地の位置図

(この図は国土地理院発行 5万分の1地形図「江別」を複製・加筆したものである)

II 発掘調査の方法

1. 調査区の設定

既に、昭和60年度の西野幌11遺跡の発掘調査報告書に説明があるように（北埋文1986）、野幌総合運動公園予定地には、道々江別一恵庭線と、道々野幌運動公園線の交点を基点とする直交座標が設定されており、これに基づいて、40m毎のメッシュをかけた、1:2,500地形図が発行され、これが事前協議の際の原因とされた。この座標系の南北方向の基軸は、真北に西偏すること6°15'である。発掘調査区もこの座標系を利用したもので、南北方向は、工事用のSP400を発掘区の0とし、西方に10m移動したSP410を1、20mのSP420を2と、順次読みかえることにした。東西方向は、工事用のR440を0とし、南方10mのR430を1、20m戻ったR420を2、センターラインは44、工事用のL10が45という具合に番号を付した。南北方向を先に、東西方向を後につづける方法で、グリッドを命名した。例えば、SP460、R320の交点が、発掘区の6-12杭となり、この杭を北東の一角とする10m区画が、すなわち6-12区となる。発掘区はさらに5×5m毎に4分割して調査を進めたが、北東部の小グリッドをa、順次逆時計まわりに、北西をb、南西をc、南東をdと細分した。

なお、江別市西野幌地区における磁針方位は、ほぼ西偏8°30'であり、本書に掲載した地形図等には、星印を付した真北と、磁針にMを付した磁北とを併せて表示している。

2. 基本層序

各遺跡における具体的な層堆積については、各章の冒頭部にそれぞれ断面実測図を掲げて、個々に説明するが、層堆積は場所によって若干の相違があり、必ずしも同一ではない。しかしながら、発掘調査を進めるうえで目安となる、基本的な層序は、野幌総合運動公園用地内では相互に本質的な一致が認められ、以下の大別した4つの層から成るものと理解できる。

- I層 表土
- II層 黒色土
- III層 褐色粘質土
- IV層 黄褐色粘土

I層は耕起されたケースが多く、自然の状態が保たれていたのは、雑木林のままに残されていた一部の土地だけである。II層の黒色土が主要な遺物包含層で、多くの場合、遺構の掘り込み面もこの層にあったと考えられる。傾斜地などでは、黒色土の下部に断続的に焼土層を介在させる例が少なくない。III層は、いわゆる漸移層で、実際上の遺構確認面は、この層から以下となる。IV層は基盤で、支笏軽石流堆積物起源の元野幌粘土層と呼ばれる地層の一部だが（矢野・山田1982）、砂の含有の度合いに差があり、より砂質がちな地点がみられる。

断面実測図に示す各層は、この基本的な土層をさらに細分したもので、断面では観察できても、発掘調査における平面的な掘り下げの時点では、認識できない場合が多かった。

(高橋 和樹)

3. 遺物の分類

土器

土器の分類については、基本的に、大麻1遺跡（北埋文1981）や吉井の沢の遺跡群（北埋文1982）など、江別市内の調査、報告例における分類基準を踏襲した。縄文時代草創期のO群土器および擦文時代に属するVII群土器は、本報告書に掲載した調査では検出されていない。

(I群) 縄文時代早期に属する土器群

a類 貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群

b類 縄文、悠承文、結糸体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文等のある土器群

本報告書に掲載した資料は、b-2類に細分されるコッタロ式に相当するものが主体である。

(II群) 縄文時代前期に属する土器群

a類 縄文尖底土器群

b類 円筒土器下層式、植苗式、大麻V遺跡出土資料などに相当するもの

(III群) 縄文時代中期に属する土器群

a類 円筒土器上層式に相当するものなど前半期のもの

b類 a類に後続する土器群で、b-1、b-2、b-3類に細分される。

b-1類 天神山式に相当するもの

b-2類 柏木川式およびそれに近似したもの

b-3類 北筒式に相当するもの

(IV群) 縄文時代後期に属する土器群

a類 余市式、手稲砂山式、入江式などに相当するもの

b類 ウサクマイC式、船泊上層式、手稲式、鮫濱式に相当するもの

c類 堂林式に相当するもの

(V群) 縄文時代晩期に属する土器群

a類 大洞B、BC式に相当するもの

b類 大洞C₁、C₂式に相当するもの

c類 大洞A式などに相当するもの、タンネットウL式に類するもの

(VI群) 続縄文時代の土器群

本報告書に掲載した資料は、後北式の前半期のものが主体である。

石器

石器は器種別の大分類にとどめ、記号による細分はおこなっていない。ただし、掲載遺物の説明に当たっては、各形態ごとに形式細分を意識し記述するように努めた。出土した石器の器種は、石鏃、やり先、石錐、ナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、砥石、石皿、台石である。また、このほかに、石核（コア）、剥片・石屑（フレイク・チップ）、礫や土製品・石製品が出土している。

なお、表中で使用した石質の略号については、例言に記してあるので参照ねがいたい。

III 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と周辺の環境

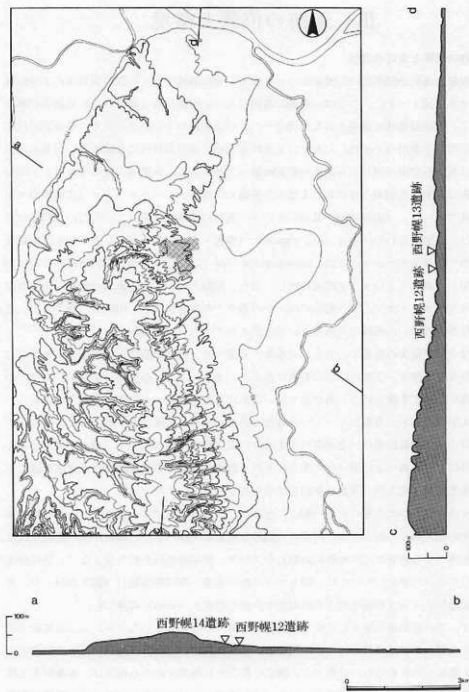
道立野幌総合運動公園用地内の遺跡群は、札幌市の東に隣接する、江別市西野幌の下学田地区に所在する(図I-1)。ここは、次節に説明のある、野幌丘陵と称される丘陵地帯の東北部の一角で、野幌原始林に涵養された小流の一つ、早苗別川の上流域にあたる。早苗別川は北流して江別川(千歳川の下流部)に至り、じきに江別川は本流石狩川に合流する。合流点は江別太と呼ばれ、石狩川の河口から南東へ約30km隔った所である。山田秀三氏によれば、「現在の江別市街は元来は江別太と呼ばれた土地から発達した処で、エベツ・ブトゥ(江別川の・川口)の意味であった」(山田1984, 41頁)という。既刊の報告書に寄せていただいた同氏の見解によれば、江別すなわちユベオツは、yupe-ot(蝶紋・多くいるところ)とする永田方正氏の説が妥当で、早苗別サノユベツは、sana-yupe-ot(otは下略)、[浜(石狩川畔)の方にある・江別川]であろうという(北理文1986)。また、野幌とは、『北海道駅名の起源』昭和29年版以降のヌブ・オル・オ・ベツ(野中の川)から出たとの説を採択し、nup-or(野の・中、処)のように呼称されていた名残りであろう、と説明されている(山田1984)。

石狩川は北海道最大の長流で、古来、日本海から潮って、内陸の空知、上川地方へと奥深くたどる主要な交通路で、江別太はその要所にあるが、また一方で、江別川(千歳川)を舟でのぼり、陸路によって千歳を越え、再び美々川、勇払川と舟を進めて太平洋に到達するという、日本海と太平洋を結ぶ、重要なルートの分岐点であり、まさに要衝の地であった。このルート沿いの石狩一宮小牧低地帯は、北海道の先史時代の文化圏を東西に大きく二分する境界となっており、特にこの東西の文化圏の北の接点にあたる野幌丘陵地帯の遺跡群には、道南西部の文化と、道東北部の文化との、複雑な交錯が認められる例が少なくない。

石狩川は往古このかた大量のサケの潮上に恵まれ、支流の千歳川は、現在でもサケの孵化事業の一大中心地である。かつては、川沿いに低湿な泥炭地がひろがり、開拓以前の野幌丘陵は、トド松を主体とする鬱蒼たる原始林におおわれていた。原始林が拓かれて畑となり、谷には水田が造られていった歴史については、関矢マリ子氏の名著『野幌部落史』(関矢1974)や、北海道開拓記念館による『野幌丘陵とその周辺の自然と歴史』(1981)に詳しい。

ところで、この原始林の姿が、必ずしも太古のままではないらしいことが、山田悟郎氏らの研究によって明らかにされてきている。例えば、運動公園内の遺跡群の北西約4kmに位置する、吉井の沢1遺跡での花粉分析の結果では、縄文中期末から後期中頃の古植生は、広葉樹を主体とするもので、縄文晩期頃からシラカバやトドマツが増えはじめて今日に至ること、縄文中期末頃には縄文人による森林の伐採・山火事等によって陽地性の草本群落もひろがり、これに伴って、多量の焼土が小谷に埋積したことなどが指摘されている(山田・北川1982)。焼土の形成、堆積については、北北東へ5km程離れた萩ヶ岡遺跡(山田1982)などでも追究されている。

(高橋 和樹)



図III-1 野幌丘陵の地形図

2. 野幌丘陵の地形・地質

ここでとりあげるのは、野幌丘陵のうち、野津幌川と裏の沢川を結び線以北の石狩川以南の丘陵地、狭義の「野幌丘陵」である。その地質について古くから種々の報告・論文が公表されているが、地層名および定義に混乱がみられる。本報告の地形・地質は北海道立地下資源調査所 5 万分の 1 地質図幅「江別」^{注1}・20 万分の 1 「札幌」^{注2} および北海道開拓記念館研究報告第 6 号・研究年報 10 号^{注3} によった。^{注4}

野幌丘陵は沖積平野の北側に向かって半島状に突き出す鮮新世から更新世に堆積した丘陵地である。南北に延びる頂部の平坦面を軸とした背斜構造をもつ。この背斜構造は西側で緩傾斜し、東側はやや急になる砂州のような形態を成す。この中央部は〔野幌上位面〕と呼ばれる平坦面で小野幌層からなる。標高は 40m から最高点の 98m、北側に緩く傾斜する。丘陵本体の縁辺部は低地帯に接して西・北・東の 3 方向に平坦面が広がる。

〔大麻一もみじ台〕丘陵の西側、大麻団地ともみじ台団地のある平坦面。下野幌層を不整合に覆うもみじ台層（海成層）と小野幌層（非海成層）からなる。標高は 30～50m、北西に緩く傾き明瞭な段丘崖は部分的である。

〔江別面〕丘陵の北側に広がる平坦面で元野幌粘土層（支笏軽石流起源の軽石片を多く含む粘土層）が表層を覆っている。標高は 10～30m、北東へ緩く傾き沖積平野に接し、北西は段丘崖になる。

〔下学田面〕丘陵の東側にあり運動公園用地がここに含まれる。多くの浅く短い小谷が西から東に平行状にあり分断されているが、南北に広がる平坦面。元野幌粘土層（江別面の元野幌粘土層より軽石片が少ない）に覆われている。標高は 20～30m、東側に緩く傾斜し、沖積平野に接する。

東側の沖積平野には支笏火山噴出物の上を泥炭層が覆っている。運動公園用地付近の表土は疑似グライ土からなる。これは重粘な母材が台地上の平坦面で乾・湿が不規則に繰り返された土壌である。模式的には A₁ 層（腐植層）・B₁ 層（漸移層）・B₂ 層（粘土層）となる。

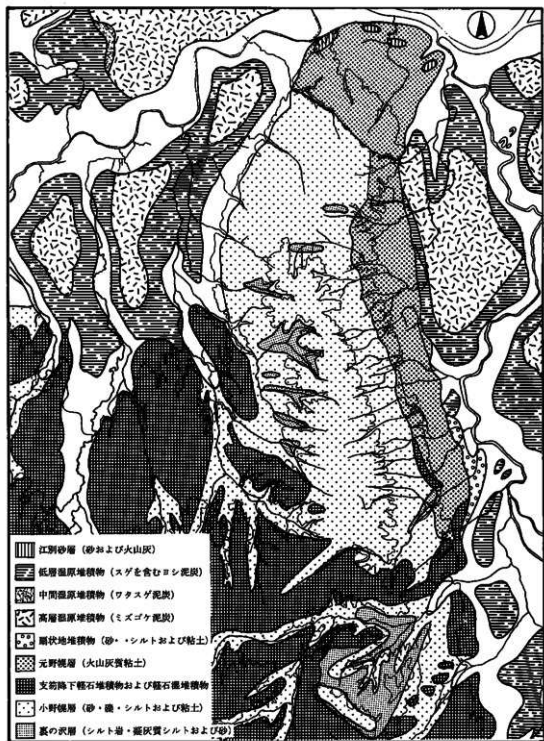
A₁ 層の上に O₁ 層（耕作土）の場合が多くみられる。B₂ 層は元野幌粘土層の中の上部に相当すると考えられる。また、この層の上面に、永久凍土が収縮して出来たくさび状の割れ目が埋められ平面が多角形になった氷模のみられるところがあった。元野幌粘土層は、火山灰質粘土層で、細かい軽石を含む茶褐色～黄褐色の粘土層とシルト、泥炭、泥炭質粘土層などの薄層が互層をなす。2m ほど掘下げたところでは約 1.5m の黄褐色粘土層、その下に約 0.2m のシルト層と約 0.2m の泥炭層がみられ、植物遺体・昆虫遺体が含まれていた。（谷島 由貴）

注1 松下勝秀：5 万分の 1 地質図幅「江別」および説明書（札幌一第 22 号）北海道立地下資源調査所 1971

注2 石田正夫・曾屋龍典：20 万分の 1 地質図幅「札幌」北海道立地下資源調査所 1980

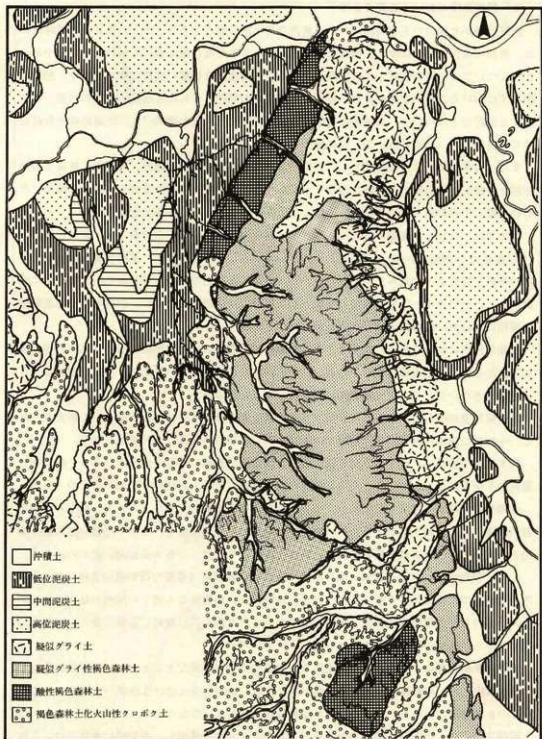
注3 北川芳男・赤松守雄・山田信郎・矢野牧夫：自然地理的特性 北海道開拓記念館研究報告 第 6 号 1981

注4 矢野牧夫・山田信郎：北海道野幌丘陵に分布する最終氷期堆積物の粘土層 北海道開拓記念館研究年報 第 10 号 1984



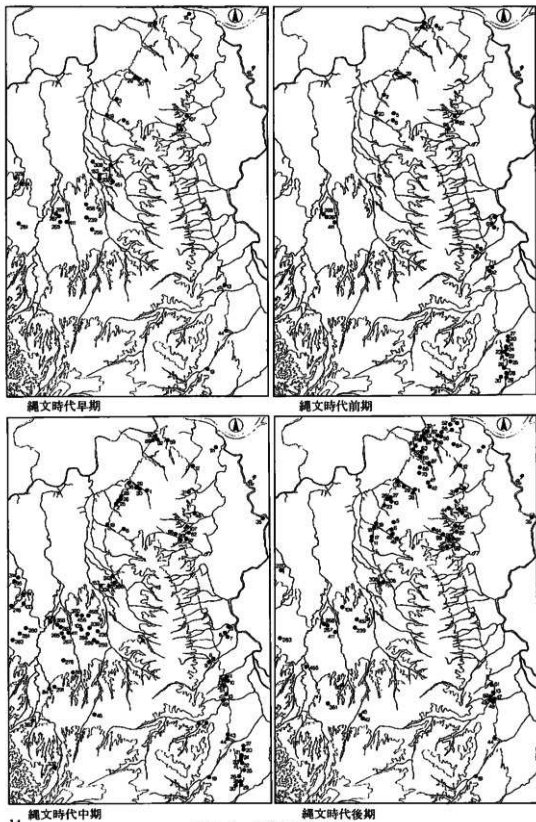
図三-2 野幌丘陵の地質図

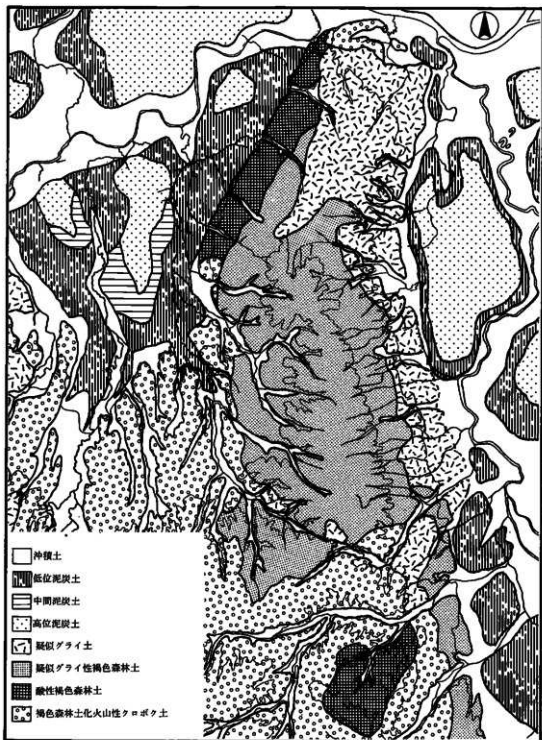
0 5km



図III-3 野幌丘陵の土壤図







図III-3 野幌丘陵の土壌図

3. 野幌丘陵における遺跡の分布

野幌丘陵が北海道の先史時代における東西の文化圏の接点であり、ここに残された遺跡群には、東西の文化の錯綜に伴う、複雑な様相がみられることは、第1節にも触れたところである。これについては、縄文前期末から中期末に至る、円筒土器文化圏の趨勢に絡む問題や、統縄文前期前半における、恵山文化の推移と後北文化圏成立の問題、さらに北海道式古墳の位置づけに関する問題などについて、具体的に考察を加えた、高橋正勝氏の論考「元江別遺跡群と野幌丘陵の先史時代」（高橋1981）が、既に提出されている。

また、日本海側から太平洋側まで、石狩一苫小牧低地帯全域の遺跡を、時期別に網羅する分布図を作成し、各時期の全般的な様相を示したうえで、野幌丘陵内の遺跡の在り方に論じた、野村 崇・中田幹雄・平川善祥の三氏による労作がある（北海道開拓記念館1981）。

ここでは、これらの業績に付け加えるべき、何らの新発見もないのであるが、野幌丘陵における遺跡の分布図・一覧表を作成し（図Ⅲ-4～6、表1～5）、運動公園用地内の遺跡群の特徴を捉えようと試みた。しかしながら、時間的な制約のため、各遺跡の内容を十分に検討することができず、活用は今後の課題とし、本節では、時期別にみた、公園用地内の遺跡群の様相について、簡単に述べるにとどめた。

公園用地内における最古の資料は、I群a類の貝殻文土器で、昭和62年度の調査で、西野幌12遺跡から破片が1点検出されている。江別市内における貝殻文の類例は、大麻15遺跡など5カ所に過ぎないらしく（岡部編1986）、貴重な例といえよう。

西野幌13遺跡からは、I群b-2類コッタロ式土器を伴出する堅穴住居跡が、1軒発見された。小規模な集落の例だが、用地内での縄文早期の住居跡の検出は、特筆されよう。

縄文前期の資料は、後半のII群b類土器で、西野幌11遺跡に若干の出土例があり、西野幌12遺跡にも少量見出されている。大麻V遺跡の出土資料（中村・君1970）に類するものである。

中期では、前半のIII群a類土器が、少量ずつながら各遺跡に万遍なくみられ、後半のb類土器の段階では、資料が急増する。特に西野幌12遺跡の出土量は多く、ここでは堅穴住居跡も検出されている。このIII群b類の類例は、野幌丘陵に広く、濃く分布する傾向が認められる。

つづく後期では、前葉のIV群a類に属する資料が、西野幌11遺跡や西野幌13遺跡など、用地内の北東部で、比較的多く検出されたほか、西野幌12、14遺跡にも若干の類例が見出されている。中葉のb類土器の段階では、墓塚が1基発見された西野幌11遺跡に資料が多く、西野幌13、14遺跡にも、若干の出土例がみられる。

晩期のV群土器は、末葉のc類が主体で、14基の土壌や礫群などとともに、西野幌14遺跡から多数検出され、西野幌12遺跡にも土壌がみられる。野幌丘陵における晩期の類例は、大部分がこのc類段階のもので、土壌の群在が認められるケースが少なくない。

統縄文期では、西野幌13遺跡で後北B式土器のグループが多出し、西野幌12遺跡では、これまでに100基を超える後北C₂式段階の土壌（墓）が検出されている。VI群土器は、西野幌13遺跡からも少量得られている。後北式につづく擦文時代の資料は、用地内では未見である。

（高橋 和樹）

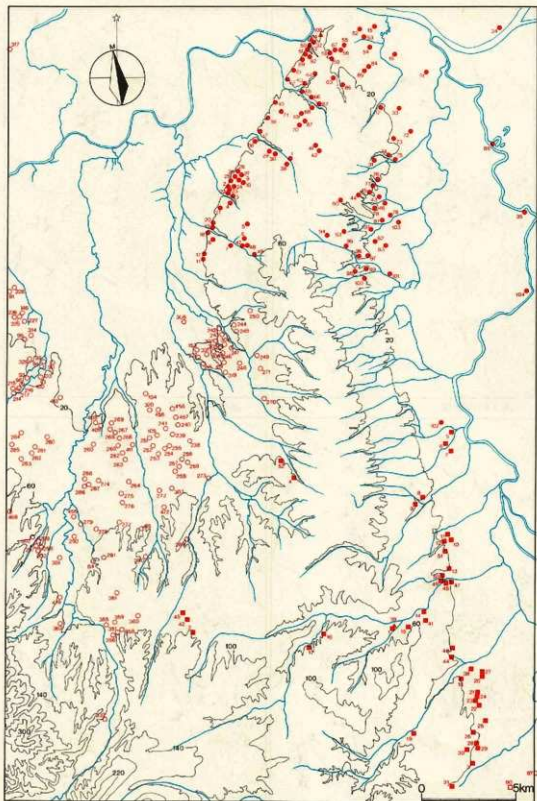
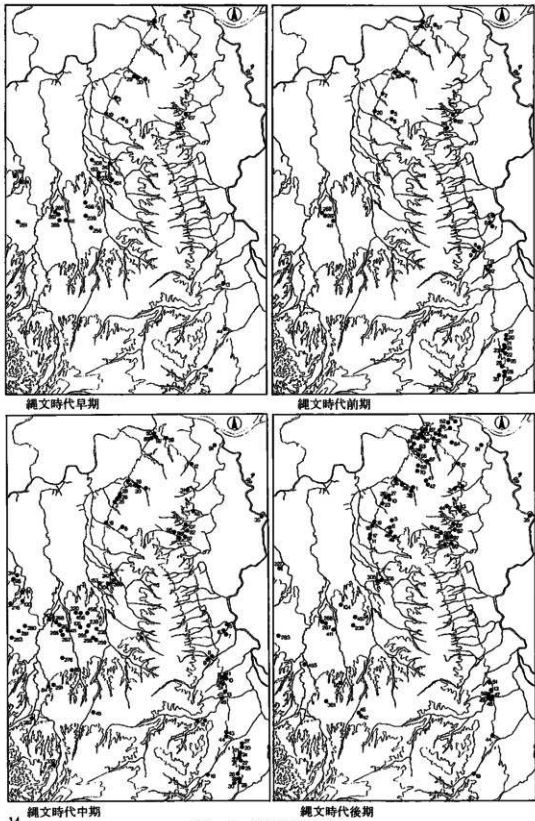
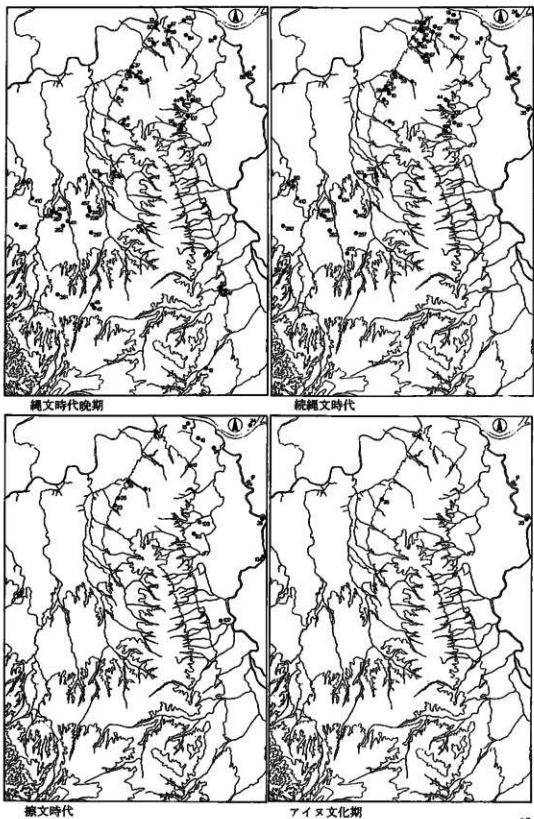


図 III-4 野幌丘陵の遺跡分布図





図III-6 時期別遺跡分布図(2)

江別市の遺跡

番号	遺跡名	時期	種別	調査	文献
1	大麻1	縄文時代早期～縄文時代	集落跡	昭和52・54・55年	1～3
2	大麻2	縄文時代前・中期	遺物包含地		
3	大麻3	縄文時代早・後期、統縄文時代	墓塚	昭和52・60・62年	4～6
4	大麻4	不詳	遺物包含地		
5	大麻5	縄文時代後期	集落跡	昭和40・45年	7
6	大麻6	縄文時代早期、統縄文時代	集落跡	昭和53・55～57年	8・9
7	大麻7	不詳	遺物包含地		
8	大麻8	不詳	遺物包含地		
9	大麻9	統縄文時代	遺物包含地	昭和62年	
10	大麻10	縄文時代後期、統縄文時代	遺物包含地		
11	大麻11	縄文時代後・晩期	遺物包含地	昭和57年	
12	高砂	縄文時代早期～縄文時代	集落跡	昭和39・41・50・59～62年	10～14
13	後藤	縄文時代前・後期～縄文時代	墳墓	昭和7・55・60・61年	15
14	江別チャシ	丘先式、環状一条壕	チャシ跡	昭和元・54・55年	16
15	坊主山	縄文時代早・後期、統縄文時代、縄文時代	墓塚	昭和元・30・35年	17・18
16	飛鳥山	縄文時代	集落跡	昭和10年	
17	大麻12	縄文時代後期	遺物包含地		
18	大麻13	縄文時代後期	遺物包含地		
19	大麻15	縄文時代早・中・後期	集落跡	昭和60年	19
20	大麻16	縄文時代前期	遺物包含地	昭和52・60年	
21	大麻17	縄文時代	遺物包含地	昭和55年	
22	大麻18	縄文時代	遺物包含地		
23	大麻19	縄文時代後期、縄文時代	遺物包含地		
24	大麻14	不詳	遺物包含地	昭和44年	
25	大麻20	縄文時代中期	遺物包含地		
26	大麻21	縄文時代中・後期、統縄文時代～アイヌ期	墓塚	昭和60・62年	20
27	大麻22	縄文時代後期、統縄文時代	遺物包含地		
28	大麻23	縄文時代中・晩期、統縄文時代	遺物包含地		
29	大麻24	縄文時代早期～統縄文時代	墓塚	昭和52・53・55・56・61年	21
30	大麻25	縄文時代早・中～晩期	墓塚	昭和52・56年	21
31	小島の沢	縄文時代後期	遺物包含地	昭和50年	22
32	旧豊平河原	縄文時代後期、統縄文時代	集落跡	昭和6・50・54・55・57～59年	9・16・23～26
33	上江別	不詳	遺物包含地		
34	奥原	統縄文時代、縄文時代	遺物包含地		
35	千歳川左岸河川敷	縄文時代中・後期、統縄文時代～アイヌ期	遺物包含地		
36	吉井の沢1	縄文時代前期～縄文時代	集落跡	昭和52・55・56年	21
37	吉井の沢2	縄文時代晩期	遺物包含地		
38	吉井の沢5	縄文時代後期	遺物包含地		
39	元野幌1	不詳	遺物包含地		
40	元野幌2	不詳	遺物包含地		
41	元野幌3	縄文時代後期	遺物包含地		
42	元野幌4	縄文時代後期	遺物包含地		
43	東野幌1	縄文時代後・晩期	遺物包含地	昭和52・54年	1
44	西野幌1	縄文時代後期～統縄文時代	遺物包含地	昭和52～54年	1
45	西野幌2	不詳	遺物包含地		
46	西野幌3	縄文時代中・後期	集落跡	昭和52・54・60・61年	1・27
47	西野幌4	縄文時代晩期	遺物包含地	昭和51年	28
48	西野幌5	縄文時代後期	遺物包含地	昭和51年	28
49	西野幌6	縄文時代後期	遺物包含地	昭和51年	28
50	元江別1	縄文時代早期～統縄文時代、アイヌ期	集落跡	昭和51・54・55・56・61・62年	15・23
51	元江別2	縄文時代後期、統縄文時代	墓塚	昭和51・54・61年	15・23
52	野幌	縄文時代後期	遺物包含地		
53	町村農場1	縄文時代後期～統縄文時代	遺物包含地	昭和57年	16
54	町村農場2	不詳	遺物包含地		
55	町村農場3	縄文時代後期	遺物包含地		

遺跡一覧表(1)

番号	遺跡名	時期	種別	調査	文献
56	町村農場4	縄文時代後期	遺物包含地		
57	元江別3	縄文時代前・後期～統縄文時代	集落跡	昭和53・55・56年	8・29
58	元江別4	不詳	遺物包含地	昭和53年	
59	元江別5	縄文時代中期～統縄文時代	遺物包含地	昭和53・55年	15
60	元江別6	縄文時代後・晩期	遺物包含地	昭和63年	
61	七丁目沢1	縄文時代後期、統縄文時代	遺物包含地		
62	七丁目沢2	縄文時代後期	遺物包含地		
63	七丁目沢3	縄文時代後期～統縄文時代	遺物包含地		
64	七丁目沢4	統縄文時代	遺物包含地		
65	七丁目沢5	縄文時代後期	遺物包含地		
66	七丁目沢6	縄文時代後期	遺物包含地	昭和56年	
67	涌川庭園	統縄文時代	遺物包含地		
68	七丁目沢7	縄文時代後期、統縄文時代	土壌	昭和57年	16・24
69	元野幌6	不詳	遺物包含地	昭和58年	
70	元野幌7	縄文時代後期	遺物包含地		
71	中原	不詳	遺物包含地		
72	上江別1	不詳	遺物包含地		
73	東野幌2	不詳	遺物包含地		
74	東野幌3	縄文時代後期	遺物包含地		
75	東野幌4	縄文時代中期、統縄文時代	集落跡	昭和53・55年	29・30
76	東野幌5	不詳	遺物包含地		
77	東野幌6	不詳	遺物包含地		
78	西野幌7	不詳	遺物包含地		
79	西野幌8	不詳	遺物包含地		
80	西野幌9	不詳	遺物包含地	昭和61年	
81	西野幌10	不詳	遺物包含地		
82	西野幌11	縄文時代前・中・後期、統縄文時代	墳墓	昭和57～60年	31・本報告書
83	下学田	縄文時代	遺物包含地	昭和57～59年	本報告書
84	元江別7	縄文時代後期～統縄文時代	遺物包含地		
85	元江別8	不詳	遺物包含地	昭和56年	
86	元江別9	不詳	遺物包含地	昭和57年	
87	元野幌8	不詳	遺物包含地		
88	江別太	縄文時代晩期、統縄文時代	低湿性遺跡	昭和53年	32
89	元江別11	縄文時代中・後期	集落跡	昭和54・55・61年	15・23
90	対馬番屋	江戸時代(本園堀外)	番屋跡	昭和54年	33
91	菝ヶ岡	縄文時代中・後期、統縄文時代、熊文時代	集落跡	昭和55～57年	34
92	元江別10	縄文時代中・後期、統縄文時代	遺物包含地	昭和55・61年	15
93	下学田2	熊文時代	遺物包含地		
94	下学田3	縄文時代後期	遺物包含地		
95	西野幌14	縄文時代中～晩期	土壌	昭和57～59・62年	本報告書
96	西野幌12	縄文時代早期～統縄文時代	集落跡	昭和57～62年	
97	西野幌15	縄文時代中・後期	遺物包含地	昭和57・58年	
98	下学田7	縄文時代後期	遺物包含地		
99	西野幌16	縄文時代後期	遺物包含地	昭和57・58年	
100	下学田9	不詳	遺物包含地		
101	下学田10	不詳	遺物包含地		
102	志文別	熊文時代	遺物包含地		
103	千古瀬	熊文時代	遺物包含地		
104	中の月	熊文時代	遺物包含地	昭和元年	
106	江別第2チャシ	丘先式、墓状二条壕	チャシ跡	昭和元年	
107	西野幌13	縄文時代早期～統縄文時代	集落跡	昭和57・58年	本報告書

札幌市の遺跡

番号	遺跡名	時期	種別	調査	文献
84	T84	縄文時代中期	遺物包含地		
85	T85	縄文時代中期	遺物包含地		
90	S90	統縄文時代	遺物包含地		

遺跡一覧表(2)

番号	遺跡名	時 期	種 別	調査	文 献
91	S 91	不詳	遺物包含地		
93	S 93	縄文時代	遺物包含地		
94	S 94	縄文時代早・中・後期～縄文時代	集落跡	昭和47年	35
96	S 96	縄文時代中期	遺物包含地		
96	S 96	不詳	遺物包含地		
99	T 99	不詳	遺物包含地		
100	S 100	縄文時代中期	遺物包含地		
103	S 103	不詳	遺物包含地		
104	S 104	縄文時代後期・縄文時代	遺物包含地		
106	S 106	縄文時代中期	遺物包含地		
146	S 146	縄文時代	遺物包含地		
153	S 153	縄文時代早・中期～統縄文時代	集落跡	昭和48・49・55年	36・37
214	S 214	縄文時代中期	遺物包含地		
215	S 215	縄文時代中期	遺物包含地		
216	S 216	縄文時代中期	遺物包含地		
217	S 217	縄文時代	遺物包含地		
226	S 226	縄文時代	遺物包含地		
226	S 226	不詳	遺物包含地		
227	S 227	縄文時代後期	遺物包含地		
228	S 228	縄文時代中期	遺物包含地		
237	S 237	縄文時代早期	遺物包含地	昭和48・56年	38
238	S 238	縄文時代中期	遺物包含地	昭和48年	39
239	S 239	縄文時代早・中～後期	集落跡	昭和49年	39
240	S 240	縄文時代後期、統縄文時代	遺物包含地		
241	S 241	縄文時代	遺物包含地	昭和48年	
242	S 242	縄文時代早・中期	遺物包含地	昭和48年	40
243	S 243	縄文時代	遺物包含地		
244	S 244	縄文時代	遺物包含地		
245	S 245	縄文時代	遺物包含地		
246	S 246	縄文時代	遺物包含地		
247	S 247	縄文時代	遺物包含地	昭和50・58年	
248	S 248	縄文時代	遺物包含地	昭和58年	
249	S 249	縄文時代	遺物包含地		
250	S 250	縄文時代	遺物包含地		
251	S 251	縄文時代	遺物包含地	昭和58年	
252	S 252	縄文時代	遺物包含地	昭和56年	
253	S 253	不詳	遺物包含地	昭和49年	41
254	S 254	縄文時代	遺物包含地	昭和56年	
255	S 255	縄文時代中期	集落跡	昭和53年	42
256	S 256	縄文時代早・中期	集落跡	昭和49年	41
257	S 257	縄文時代後期、統縄文時代	土壇	昭和49年	41
258	S 258	不詳	遺物包含地		
259	S 259	縄文時代中期	遺物包含地	昭和55年	
260	S 260	縄文時代	遺物包含地		
262	S 262	縄文時代中・後期	Tピット	昭和51年	43
263	S 263	縄文時代中期・統縄文時代	Tピット	昭和51年	43
264	T 264	不詳	遺物包含地		
265	S 265	縄文時代早・中期	集落跡	昭和51年	43
266	S 266	縄文時代	遺物包含地	昭和51年	43
267	S 267	縄文時代早期～統縄文時代	集落跡	昭和50年	44
268	S 268	縄文時代早期～統縄文時代	高塚	昭和50・51年	44
269	S 269	縄文時代	遺物包含地	昭和50年	43
270	S 270	縄文時代	遺物包含地	昭和60年	45
271	S 271	不詳	遺物包含地	昭和55年	
272	T 272	不詳	遺物包含地		
273	S 273	縄文時代	遺物包含地	昭和56年	
274	T 274	不詳	遺物包含地	昭和58年	

遺跡一覧表(3)

番号	遺跡名	時 期	種 別	調 査	文 献
275	T275	不詳	遺物包含地		
276	T276	縄文時代中期	遺物包含地		
277	T277	不詳	遺物包含地		
278	T278	不詳	遺物包含地	昭和54年	
279	T279	不詳	魚骨跡?		
280	T280	縄文時代中期	遺物包含地	昭和53年	
281	T281	縄文時代早・中・後期	Tビット	昭和53年	46
282	T282	縄文時代後期、続縄文時代	遺物包含地	昭和53年	46
283	T283	縄文時代中・後期	遺物包含地		
284	T284	不詳	遺物包含地		
285	T285	不詳	遺物包含地		
286	T286	不詳	遺物包含地		
287	T287	不詳	遺物包含地		
288	T288	不詳	遺物包含地	昭和54-58年	
289	T289	不詳	遺物包含地		
290	T290	縄文時代後期	遺物包含地		
291	T291	縄文時代中期	遺物包含地		
292	T292	縄文時代	遺物包含地		
297	T297	続縄文時代	遺物包含地	昭和49年	
298	T298	不詳	遺物包含地	昭和49年	
299	T299	不詳	遺物包含地	昭和49年	
300	T300	不詳	遺物包含地	昭和49年	
301	T301	縄文時代	遺物包含地	昭和51年	
302	T302	縄文時代	遺物包含地	昭和53年	
303	T303	縄文時代	遺物包含地	昭和55年	
304	S304	縄文時代中期	遺物包含地	昭和50年	
305	S305	縄文時代後期、続縄文時代	遺物包含地	昭和50年	
306	S306	縄文時代中～後期	遺物包含地		
307	S307	縄文時代	遺物包含地		
308	S308	縄文時代早期	遺物包含地	昭和56年	
314	S314	縄文時代中期	遺物包含地		
317	H317	縄文時代	遺物包含地		
318	S318	不詳	遺物包含地	昭和56年	
319	S319	縄文時代	遺物包含地		
320	S320	縄文時代中期	Tビット	昭和55年	47
329	S329	縄文時代早期	遺物包含地		
331	S331	不詳	遺物包含地		
332	T332	縄文時代中期	遺物包含地		
335	T335	縄文時代	遺物包含地		
336	T336	縄文時代	遺物包含地		
337	T337	縄文時代	遺物包含地		
338	T338	不詳	遺物包含地		
339	T339	不詳	遺物包含地		
360	T360	縄文時代	遺物包含地		
361	T361	縄文時代後～後期	遺物包含地	昭和60年	48
362	T362	縄文時代中期	遺物包含地		
406	S406	縄文時代中期	遺物包含地		
409	S409	縄文時代後期	遺物包含地		
410	S410	縄文時代後期～続縄文時代	遺物包含地		
411	S411	縄文時代早～後期	Tビット	昭和52年	49
451	S451	縄文時代早期	遺物包含地	昭和50年	
455	T455	縄文時代中期	遺物包含地	昭和56年	
456	S456	縄文時代後期	遺物包含地	昭和56年	47
457	S457	縄文時代後～後期	遺物包含地	昭和52年	
458	S458	縄文時代早・中期	遺物包含地	昭和54年	47
468	T468	縄文時代早～後期	墓墳	昭和57年	50
472	T472	続縄文時代	遺物包含地	昭和58年	

遺跡一覧表(4)

番号	遺跡名	時期	種別	調査	文献
479	T479	縄文時代	遺物包含地		

広島町の遺跡

番号	遺跡名	時期	種別	種別	文献
1	中の沢A	縄文時代中期	遺物包含地	昭和42年	51
2	大倉A	不詳	集落跡		
3	南の里1	縄文時代	集落跡		
4	西の里	不詳	遺物包含地		
5	北の里1	縄文時代前・中期	遺物包含地		
6	北の里2	縄文時代前・中期	遺物包含地		
7	北の里3	縄文時代前・中期	遺物包含地		
8	北の里4	縄文時代前・中期	遺物包含地		
9	北の里5	縄文時代前・後期	遺物包含地		
10	北の里6	不詳	礎石墓?		
11	北の里7	縄文時代前・中期	遺物包含地		
12	北の里8	縄文時代前・中期	遺物包含地		
13	共栄	縄文時代早・中・後期	遺物包含地	昭和59年	52
14	中の沢C	不詳	遺物包含地		
15	中の沢B	縄文時代中期	集落跡	昭和47年	53
16	中の沢D	不詳	遺物包含地		
17	中の沢E	縄文時代	遺物包含地		
18	宮ヶ岡A	不詳	遺物包含地		
19	宮ヶ岡B	縄文時代早・中～後期	遺物包含地	昭和49年	54
20	南の里2	縄文時代前・中期	集落跡		
21	南の里3	縄文時代前・中期	遺物包含地		
22	南の里4	縄文時代前・中期	遺物包含地		
23	南の里5	縄文時代前・中期	遺物包含地		
24	南の里6	縄文時代前・中期	遺物包含地		
25	南の里7	縄文時代前・中期	遺物包含地		
26	南の里8	縄文時代前・中期	遺物包含地		
27	南の里9	縄文時代前・中期	遺物包含地		
28	南の里10	縄文時代前・中期	遺物包含地		
29	南の里11	縄文時代前・中期	遺物包含地		
30	南の里12	縄文時代前・中期	遺物包含地		
31	南の里13	不詳	遺物包含地		
38	宮ヶ岡C	不詳	高塚		
39	中の沢チャシ	丘先式、環状一室墳	チャシ跡		
41	北広島	不詳	集落跡		
42	大倉B	縄文時代後・後期	Tビット	昭和52年	55
43	宮ヶ岡D	縄文時代中期	遺物包含地	昭和45年	56
44	宮ヶ岡E	縄文時代早・中・後期	遺物包含地	昭和45年	56
45	大倉C	縄文時代前・後期	高塚	昭和52年	55
47	共栄2	縄文時代後・後期	遺物包含地		
48	共栄3	縄文時代後期	遺物包含地		
49	共栄4	縄文時代中・後期	遺物包含地		
50	共栄5	縄文時代後・後期	遺物包含地		
51	共栄6	縄文時代中・後期	遺物包含地		
52	西の里2	縄文時代中・後期	Tビット	昭和57年	57

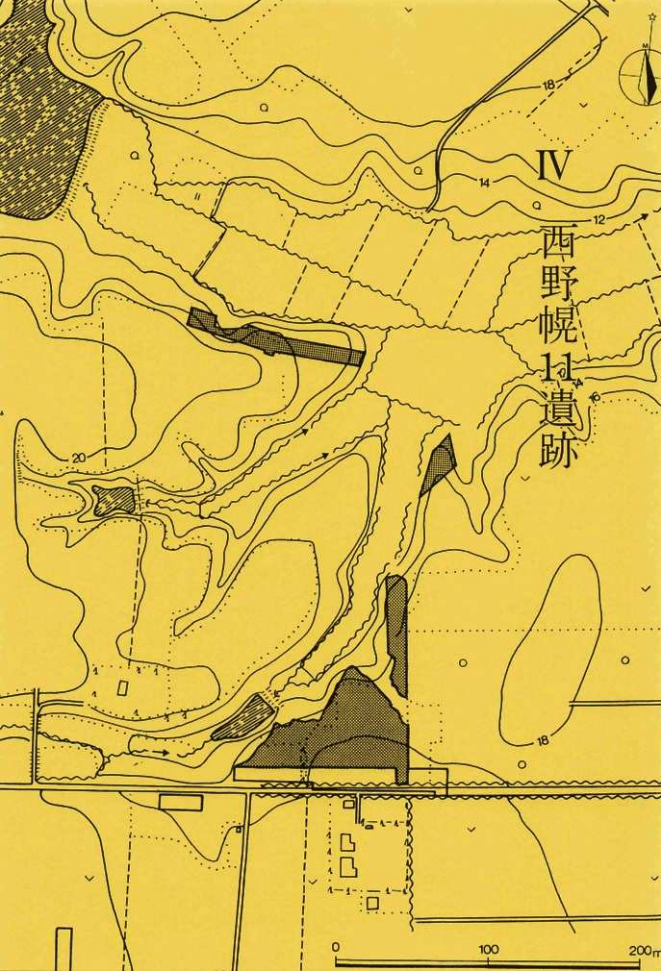
恵庭市の遺跡

番号	遺跡名	時期	種別	調査	文献
87	ルルマップ川12	縄文時代中期	遺物包含地		
90	ルルマップ川15	縄文時代早・中～後期	遺物包含地		

遺跡一覧表(5)

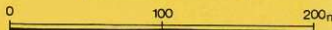
文 献

1	財) 北海道埋蔵文化財センター	1980	「大森1遺跡・西野幌1遺跡・西野幌3遺跡・東野幌1遺跡」
2	江別市教育委員会	1980	「大森I」
3	財) 北海道埋蔵文化財センター	1981	「大森1遺跡」
4	江別市教育委員会	1978	「大森第三遺跡」
5	江別市教育委員会	1983	「大森3遺跡」
6	江別市教育委員会	1986	「大森3遺跡」
7	江別市教育委員会	1970	「江別市大森第V遺跡発掘報告」
8	江別市教育委員会	1982	「元江別3 大森6」
9	江別市教育委員会	1983	「大森6 旧豊平河畔」
10	江別市教育委員会	1964	「江別市高砂第一次調査概要」
11	江別市教育委員会	1966	「江別市高砂遺跡第二次調査概要」
12	江別市教育委員会	1975	「高砂遺跡」
13	江別市教育委員会	1986	「高砂遺跡」
14	江別市教育委員会	1987	「高砂遺跡」
15	江別市教育委員会	1981	「元江別遺跡群」
16	江別市教育委員会	1983	「江別市文化財調査報告書XVII」
17	江別市教育委員会	1960	「江別市対屋坊主山遺跡の発掘略報1・2・3,ウタリ3-8・9・10」
18	江別市教育委員会	1960	「江別市対屋坊主山遺跡発掘調査略報4, AINU MOSHIRI 5・6」
19	江別市教育委員会	1986	「大森15遺跡」
20	江別市教育委員会	1987	「大森21遺跡」
21	財) 北海道埋蔵文化財センター	1981	「吉井の沢の遺跡」
22	江別市教育委員会	1976	「小島の沢遺跡」
23	江別市教育委員会	1980	「元江別遺跡群 概報」
24	江別市教育委員会	1984	「旧豊平河畔 七丁目沢7」
25	江別市教育委員会	1985	「旧豊平河畔」
26	江別市教育委員会	1986	「旧豊平河畔V」
27	財) 北海道埋蔵文化財センター	1986	「西野幌3遺跡」
28	江別市教育委員会	1976	「西野幌遺跡」
29	江別市教育委員会	1981	「東野幌4・元江別3」
30	石附喜三男	1981	「東野幌4」
31	財) 北海道埋蔵文化財センター	1987	「西野幌11遺跡」
32	江別市教育委員会	1979	「江別太遺跡」
33	江別市教育委員会	1977	「江別の文化財」
34	江別市教育委員会	1982	「萩ヶ岡遺跡」
35	札幌市教育委員会	1973	「札幌市文化財調査報告書I」
36	札幌市教育委員会	1976	「札幌市文化財調査報告書X」
37	札幌市教育委員会	1982	「札幌市文化財調査報告書XXVI」
38	羽賀賢二	1986	「道央部における縄文時代早期平砥土層群の様相について」北海道考古学12輯
39	札幌市教育委員会	1975	「札幌市文化財調査報告書IX」
40	直井孝一	1975	「KONOPORO」
41	札幌市教育委員会	1975	「札幌市文化財調査報告書XI」
42	札幌市教育委員会	1979	「札幌市文化財調査報告書XIX」
43	札幌市教育委員会	1977	「札幌市文化財調査報告書XV」
44	札幌市教育委員会	1977	「札幌市文化財調査報告書XIV」
45	札幌市教育委員会	1987	「札幌市文化財調査報告書XXXI」
46	札幌市教育委員会	1979	「札幌市文化財調査報告書XXI」
47	札幌市教育委員会	1982	「札幌市文化財調査報告書XXIII」
48	札幌市教育委員会	1987	「札幌市文化財調査報告書XXXIX」
49	札幌市教育委員会	1978	「札幌市文化財調査報告書XVIII」
50	札幌市教育委員会	1984	「札幌市文化財調査報告書XXVII」
51	田川賢三	1968	「中の沢遺跡、ひろしま3」
52	広島町教育委員会	1986	「共栄遺跡」
53	広島町教育委員会	1973	「北海道広島町中の沢240-11遺跡発掘調査報告書」
54	広島町教育委員会	1978	「富ヶ岡遺跡」
55	北海道教育委員会	1978	「北海道既貫自動車道(北広島〜札幌南)埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
56	高橋正勝	1971	「北広島団地第1遺跡」
57	高橋和樹ほか	1983	「西の里2遺跡」



IV

西野幌山遺跡



IV 西野幌11遺跡

1. 遺跡の概要

西野幌11遺跡は、江別市西野幌の下の学田地区に所在する。早苗別川に注ぐ小支流、桜沢沿いの右岸、標高12～18m程の野幌丘陵上に営まれたもので、昭和52年10月に江別市教育委員会が実施した遺跡分布調査によって発見、登載された(中村1978)。分布調査では、土器片、ポイント、フレークなどが採集され、包蔵地範囲は3万㎡に及ぶと推定されている。

一帯の丘陵地は、アスパラなどの野菜畑や、樹木の苗畑として耕作されており、周縁部分は山林のままに残された所が多く、一部に針葉樹の植林がみられた。下の沢地は、水田として整備され、桜沢貯水池に送られた用水によって灌漑されている。

昭和57年5月、道立野幌総合運動公園造成に伴い、掘開による遺跡範囲確認調査が、北海道教育委員会によって実施され、用地内の包蔵地範囲が決定、工事による破壊が見込まれる場合には、基本的に、事前の発掘調査が必要であると判断された。

昭和58年、運動公園用地の外周部をめぐる、工事用の付替道路の造成のため、西野幌11遺跡および西野幌13遺跡の一部が発掘調査されることになり、調査が(財)北海道埋蔵文化財センターに委託された。西野幌11遺跡の発掘は、翌59年にも、ポンプ場や東駐車場建設用地にかかる58年度調査区の隣接地を対象に、継続された。本章の報告は、この両年度にわたる調査結果を記録したものである。また、昭和60年度には、道々野幌運動公園線の造成に伴って、58・59年度調査区の南隣地が発掘調査されたが、この結果については、既に報告済である(北埋文1986)。

さて、昭和58年度の調査区は、付替道路にかかる幅の狭い範囲1,718㎡が対象で、図IV-1に示すように小沢によって3地区に隔てられており、北からA地区、B地区、C地区と仮称した。C地区のうち、58年度調査区の西隣り一帯4,405㎡が、昭和59年度の調査対象地である。

58・59両年度に検出された遺構は、土壇11基、Tピット5基で、特にC地区の北東部に集中する傾向が認められた。Tピットは、60年度調査区にも1基見出されており、59年度調査区では、近代の馬や豚の埋葬例もみられた(図IV-16)。土器・石器などの遺物は、縄文時代前期から縄文時代に至るまでのもので、特に縄文中期後半から後期中葉までの資料が多かった。

層堆積は、図IV-2～5に掲げた断面実測図に示すとおりで、以下に層名を列記する。主要な遺物包含層はII a層、とりわけII a-1層で、III a層もしくはIV a層が、遺構確認面となっている。

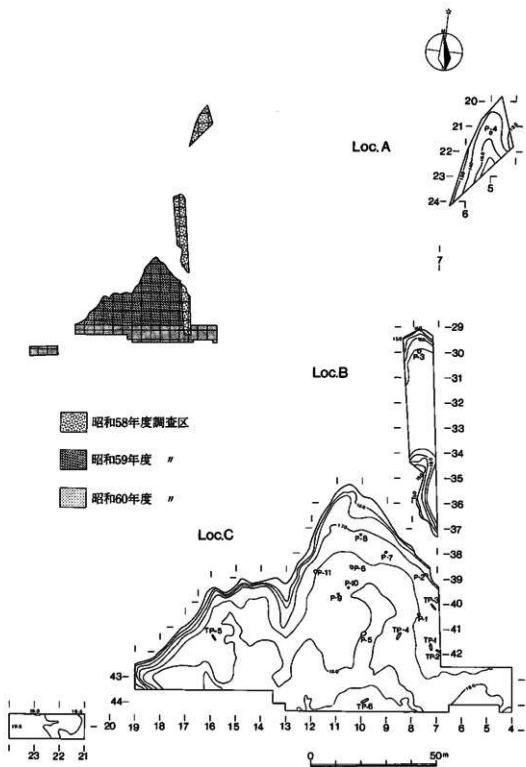
I a層 表土。木の根、笹の根などが密生した黒色腐植土。

I b層 耕作土。黒色のやわらかな土。

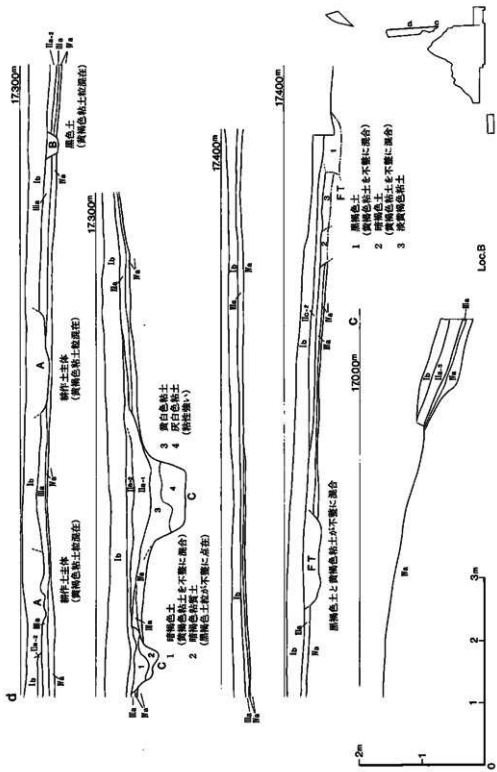
I d層 赤褐色焼土主体層。二次的な流れ込みによる堆積。

II a-1層 真黒色土。やややわらかい。

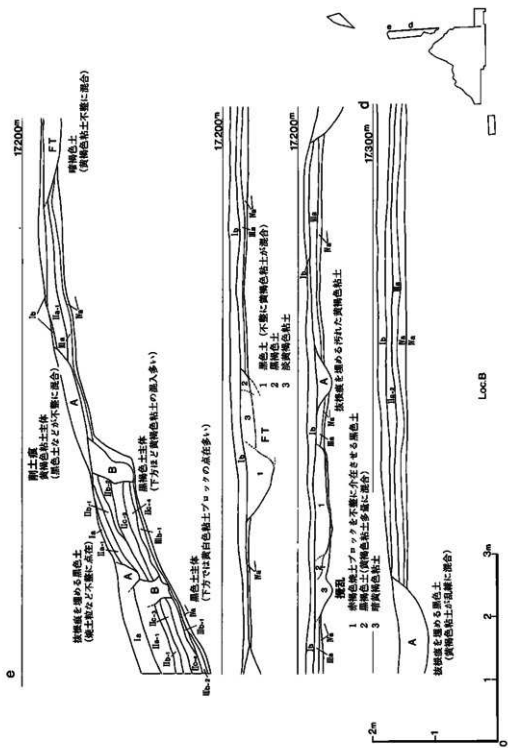
II a-2層 真黒色土。乾くと白茶褐色がちを呈し、小さな塊となってポロポロ崩れやすい。



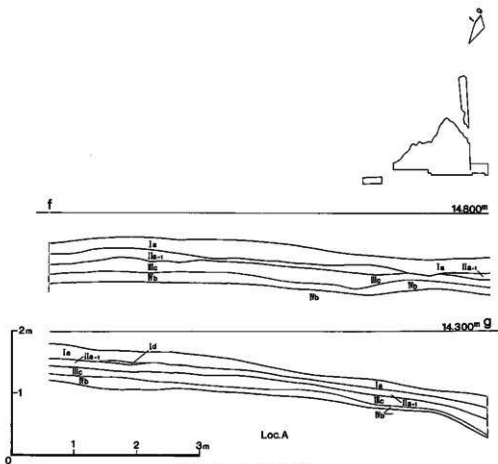
図IV-1 遺構位置図



図IV-3 土層断面図(2)



- II a-3層 黒褐色土。灰黄褐色粘土をやや多量に混在させる、やわらかな再堆積層。
- II b-1層 暗赤褐色土。黒色土に焼土が不整に混合。
- II b-2層 黒色土。部分的に少量の焼土を混合。
- II c-1層 黒色粘質土。色調は所によりかなり変化する。
- II c-2層 暗茶褐色粘質土。黒褐色粘質土の小ブロックなど点在。
- II c-3層 黒色土。部分的に赤褐色焼土ブロックを点在させる。
- II c-4層 暗茶褐色土。焼土の混合多く、所によっては赤褐色焼土ブロックに占められる。
- III a層 褐色粘質土。漸移層。
- III b-1層 暗灰褐色粘質土。黒色の腐植土の混合が多い泥炭的な層。白色火山灰砂点在。
- III b-2層 灰茶褐色粘質土。黒褐色の腐植土の混合が多い泥炭的な層。白色火山灰砂点在。
- III c層 暗褐色粘質砂土。小礫点在。やわらかく不安定な層。
- IV a層 黄褐色粘土。粘性強く堅くしまっているが、水分を含むとドロドロになる。
- IV b層 黄白色砂質粘土。小礫の点在やや多い。 (高橋 和樹)



図VI-5 土層断面図(4)

2 遺構

1) 土壌

P-1

位置 7-40-b

形態 平面形は、円形。

底面は中央が径約30cmにわたり浅くぼんでいる。

覆土1層と2層の間に、土器が一個体、横たわりつぶれた状態で出土した。

この土壌は墓の可能性があり、墓墳を掘った土を埋め戻して遺体を被覆し、その上部に土器が副葬された、という印象が強かった。

(三浦 正人)

土器(図IV-6:1)は、口縁の一部や底部の周縁などに欠損があるが、ほぼ完形の深鉢形土器に復元された。平底で、肩部にややふくらみがあり、頸部が鋭く屈曲して、やや大きく口縁部が外反する器形をなし、口径23.4cm、底径7.4cm、高さ24.1cm、器厚0.7～0.9cm程。口縁は全周で6頂のゆるやかな波状を呈し、口唇部は平坦に、裏面は平滑に調整されている。色調は黄灰褐色～黄茶褐色で、口縁部を除く内面には、黒色炭化物の付着が一面にみられる。胎土には砂が多く含まれ、焼成は堅緻である。

文様帯は横位の沈線文によって、大きく口縁部、胴上半部、そして胴下半部と3段に区画され、それぞれに三角状や銀杏葉形(逆にみると波頭状)の沈線文様が組み込まれている。地文は、やや不規則に施された斜行縄文で、口唇上にも縄文がみられる。

口縁部の文様帯は、口唇直下を波状口縁沿いにゆるやかにめぐる2本の沈線文と、突起下に配された、三角状の文様を向かい合わせた菱形の沈線文とから構成されているが、実測図正面では左右の対称が崩され、銀杏葉形の曲線文が加えられている。

胴上半部には、文様帯の上下を区画する2本単位の横位の沈線文と、交互に正立、倒立が組み合わされた、銀杏葉形の沈線文の繰り返しがみられる。胴下半部の銀杏葉形の沈線文は、上下が連結して、横に長くのびた形状を呈している(巻頭展開写真参照)。三角状や銀杏葉形の沈線文内部は、磨消される傾向が認められるが、磨消しは徹底してはいない。また、底部近くの器面も磨かれている。

型式的には、IV群b類土器のうち、船泊上層式に含まれる資料と判断される。

(高橋 和樹)

P-2

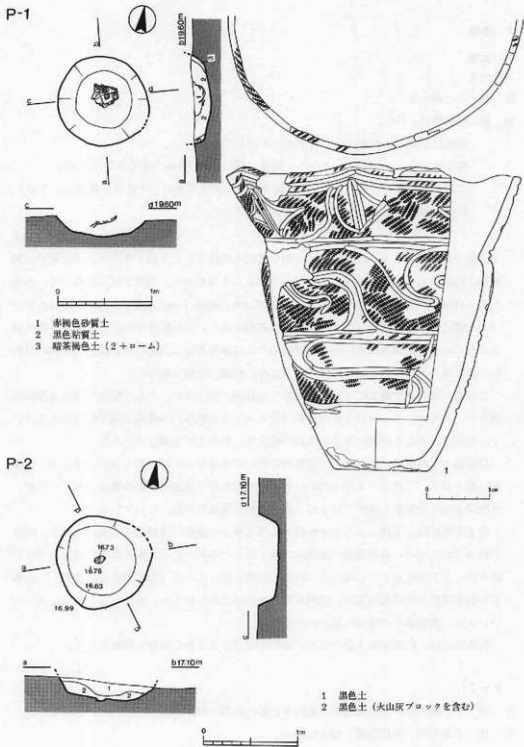
位置 7-38-d、小谷に落ちる北向き斜面の肩部にある。

形態 平面形は、不整円形。深さ0.20m。

底面は平坦だが、中心部に深さ5cmの小さなくぼみをもつ。

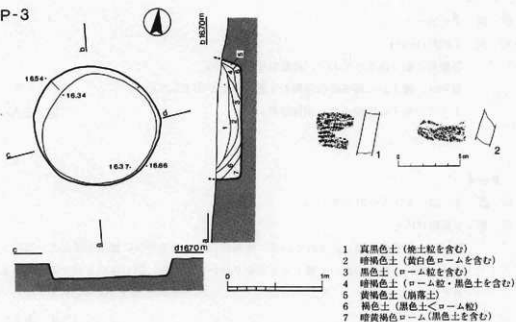
遺物はない。

(三浦 正人)

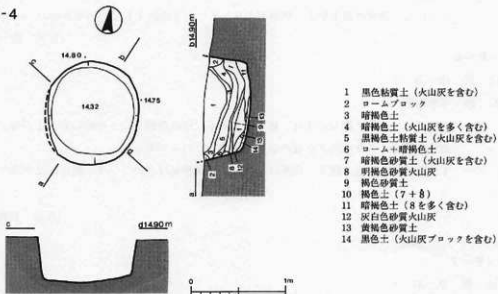


図IV-6 P-1・P-2

P-3



P-4



図IV-7 P-3・P-4

P-3

位置 7-29-c

形態 平面形は円形。

急傾斜で掘り込まれており、底面は平坦である。

遺物は、覆土から縄文時代後期の土器片6点が出土している。

1・2は胎土に砂粒を含む割部破片。

(三浦 正人)

P-4

位置 4-21-b・5-21-a

形態 平面形は円形。

IV層にはほぼ垂直に掘り込まれている。底面は、ごくゆるやかに皿状を呈している。

遺物はない。深さが他の土坑よりもかなり深いことから、別の性格を有する土坑とも考えられる。

(三浦 正人)

P-5

位置 9-41-b

形態 楕円形。

坑底は凹凸があり揺鉢状を呈している。壁は全周ともゆるく立ち上がる。覆土1層は赤褐色土で焼土もしくは火山灰である。2層上部より大きな炭化材の破片が2点出土している。遺物は覆土中より黒曜石のフレイクが2点出土したのみである。

(佐川 俊一)

P-6

位置 10-38-d

形態 不整形円形。

坑底はローム層に掘り込まれ、縮まりがある。壁は西側を除き明瞭に立ち上がる。

遺物は覆土から北海道式石冠の破片が出土したのみである。

1は北海道式石冠の破片。側面は敲打により調整がなされている。使用面は平滑である。

(佐藤 和雄)

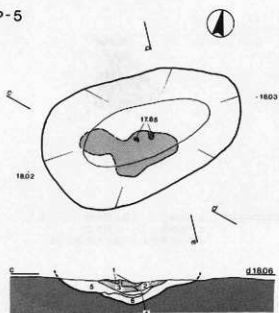
P-7

位置 9-37-a

形態 不整形円形。

坑底はほぼ平坦。壁は南東側をのぞき急に立ち上がる。

P-5

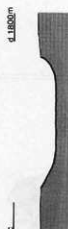
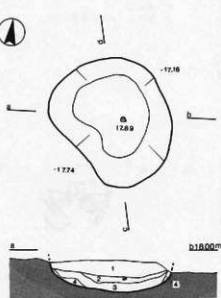


焼土

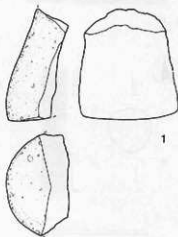


- 1 明赤褐色土 (焼土)
- 2 赤褐色砂質土 (焼土)
- 3 暗赤褐色土 (Iを多く含む)
- 4 黒色砂質土 (炭化物を含む)
- 5 暗茶褐色土 (ローム粒を含む)
- 6 暗褐色土

P-6

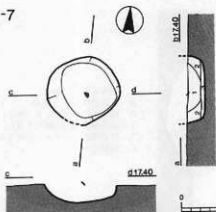


- 1 黒色土
- 2 暗灰褐色土 (黒色土>ローム粒)
- 3 暗黄灰褐色土 (ローム粒+III)
- 4 暗黄褐色土 (ローム>I)



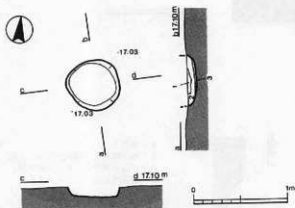
図IV-8 P-5・P-6

P-7



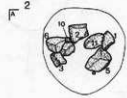
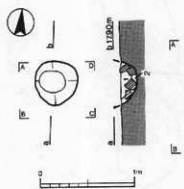
- 1 黒褐色土 (少量の炭化物とローム粒を含む)
- 2 黄褐色土 (ローム粒を含む)
- 3 暗黄褐色土 (少量の炭化物を含む)

P-8



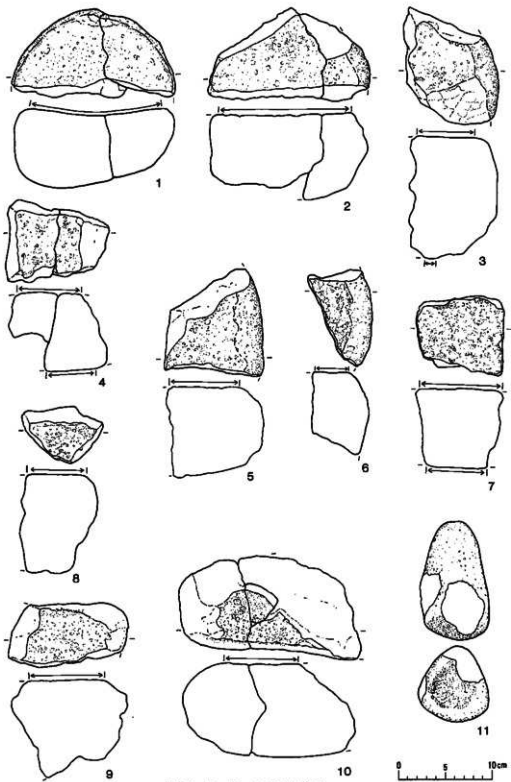
- 1 地土
- 2 褐色土
- 3 褐色土 (ロームを多く含む)

P-9



- 1 褐色土
- 2 黄褐色土 (ロームを含む)

図IV-9 P-7・P-8・P-9



図IV-10 P-9の出土遺物

覆土1層は黒色土で細かいローム粒が混入する。覆土3層は暗黄褐色土でロームの混入が多い。カーボンが覆土1層上部と第3層に少量混入する。遺物は覆土1層より土器片が1点出土したのみである。

1は縄文時代中期の土器の口縁部破片、地文と口唇部に無節の縄を施文。(佐川 俊一)

P-8

位置 10-37-a

形態 円形。

P-7の北西約10mのところであり。確認面では黒色土のプランの内側に厚さ4cmの焼土(覆土1層)が検出された。遺物はまったく出土していない。(佐川 俊一)

P-9

位置 19-39-c

形態 円形。壁は南東をのぞいて急に立ち上がる。

遺物は、すでに確認面より一部検出されていた安山岩の石皿片が11点・たたき石1点である。接合の結果、4個体以上の石皿が割り入れられたと考えられる。1~10はいずれも扁平な自然礫を用い、1面または2面に使用痕がみられる。11は棒状礫の端部に使用痕のみられるたたき石である。(佐川 俊一)

P-10

位置 10-39-b

形態 円形。

覆土は自然の堆積状態である。墳底はローム層に掘り込まれており、締まりがある。性格・構築時期は不明である。(佐藤 和雄)

P-11

位置 11-38-c

形態 不整円形。

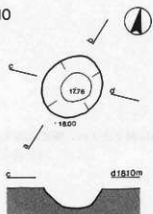
墳底は凹凸があり。壁は全周ともゆるく立ち上がる。

遺物は覆土中より土器片、フレイクチップが出土している。また墳底からはカーボンが多く検出されている。

1は押し引きの施された口縁部破片。2は胴部破片。縄文時代中期のものである。

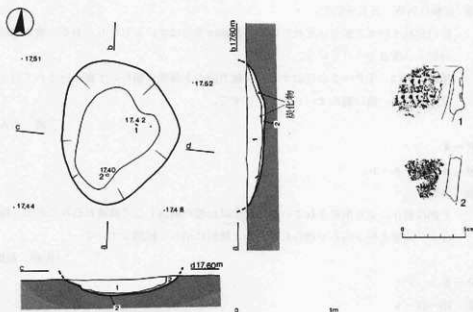
(佐川 俊一)

P-10



- 1 黒色土 (赤褐色スコリヤを含む)
- 2 暗黄褐色粘質土 (ロームを含む)
- 3 暗褐色土 (スコリヤとロームを多く含む)

P-11



- 1 黒色土
- 2 明褐色土 (多量の炭化物とロームブロックを含む)

図IV-11 P-10・P-11

2) Tピット

TP-1

位置 7-41-d

形態 狭長な溝形を呈する。長軸はN-Sを向く。

灰白色粘土層まで掘り込まれた底面は、固くしまっている。

横断面はV字形を呈すが、長軸方向では、ほぼ垂直に掘り込まれ、墳底北端は、より奥まで掘られている。 (三浦 正人)

TP-2

位置 6-41-c

形態 長軸はNW-SE方向。調査区外に $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{3}$ が存在する。灰白色粘土層まで掘り込まれ、底面は水分が多いが、しまっている。

横断面形は、上半部がV字形を呈し、下半部は垂直に掘り込まれ、底面は狭いながらも平坦である。北西端は、Tピットとしては、ゆるやかに掘り込まれている。

(三浦 正人)

TP-3

位置 7-43-a

形態 長軸はNW-SEを向く。

灰白色粘土層まで掘り込まれている。底部は水分は多いがしまりがある。墳口部は半分以上、攪乱をうけている。

横断面形は、TP-2に近似する。長軸方向の北西側に傾むいて掘り込まれており、北西側のみ、墳口部がオーバーハングする。

(三浦 正人)

TP-4

位置 8-41-a・b

形態 溝形。

上部は耕作により削平されている。覆土は自然の崩落もしくは流れ込みである。墳底はローム層を掘り込んで造られており、地形に沿って傾斜している。

(佐藤 和雄)

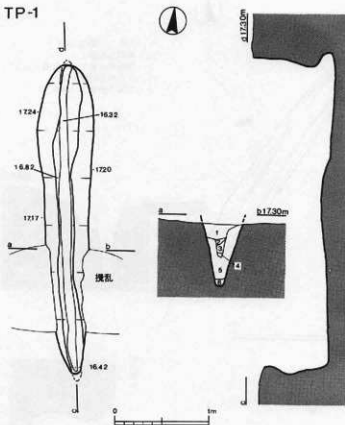
TP-5

位置 15-41-b

形態 溝形。

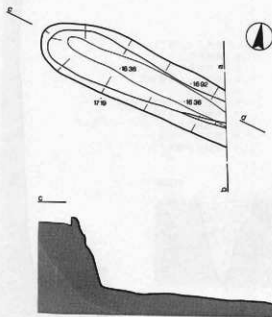
黄褐色のローム上面で確認された。墳底は灰白色粘土に掘り込まれ、固く締まっている。壁は短軸ではほぼ垂直に立ち上がるが、長軸では、内傾する。 (佐藤 和雄)

TP-1



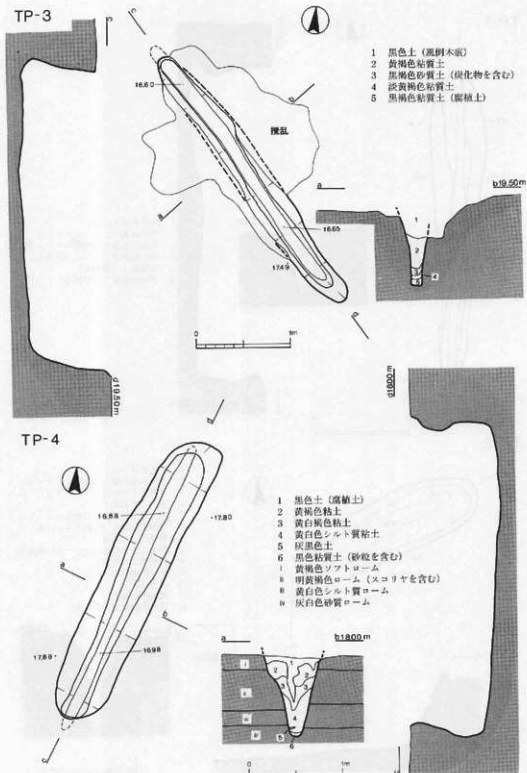
- 1 黒色粘質土
- 2 黒色粘質土 (ロームを含む)
- 3 黒褐色粘質土 (少量のロームを含む)
- 4 褐色粘質土 (ローム>黒色土)
- 5 黄褐色土 (崩落土)
- 6 黒褐色粘質土 (高植土)

TP-2



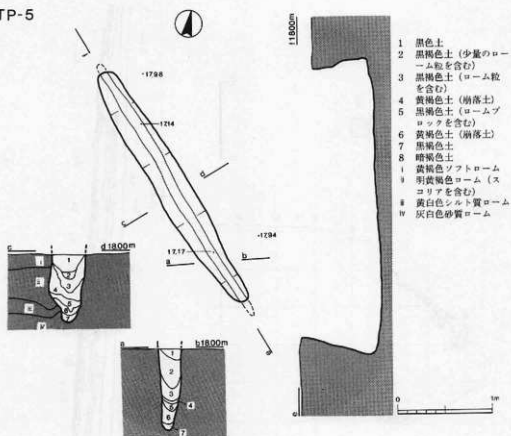
- 1 黒色砂質土
- 2 暗黒褐色砂質土 (黒色土+ローム)
- 3 黄褐色土 (崩落土)
- 4 褐色土 (崩落土)
- 5 暗茶褐色粘質土 (黒色土+ローム)
- 6 黒褐色粘質土 (黒色土+ローム)
- 7 黄褐色土 (崩落土)
- 8 茶褐色土 (黒色土>ローム、崩落土)
- 9 黄褐色土 (崩落土)
- 10 灰褐色粘質土 (崩落土)
- 11 黒色粘質土
- 12 灰褐色粘質土
- 13 淡灰色粘質土 (崩落土)

図IV-12 TP-1・TP-2



図IV-13 TP-3・TP-4

TP-5



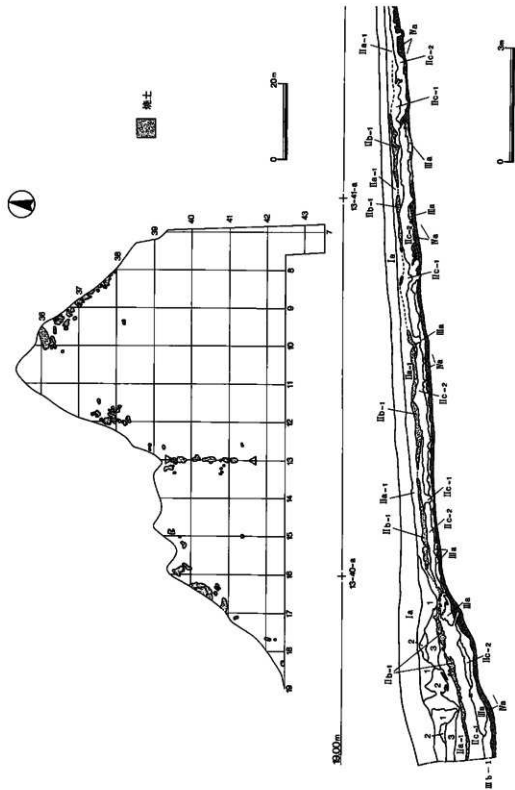
図IV-14 TP-5

(3) 焼土

C地区の丘陵縁部、および13ラインに沿った南北方向の小沢部分には、黒色土(II a-1層)直下に、断続的に続く赤褐色土(II b-1層)の分布がみられた(図IV-15)。これは、B地区や西野幌13遺跡の沢沿いの傾斜地などにも堆積する土層で、同様の赤褐色土の分布は、札幌市から江別市に至る野幌丘陵の各地で確認されており、成因や形成年代には不明な点も残されているが、一般に、沢沿いの低い部分に二次的に移動、集積した焼土層と認定されている。

C地区では、長径20cmから7mまで、大小さまざまな不整形を呈する焼土がみられ、その層厚は、15~20cm程度であるが、断面図に示すように、不整に波打って堆積しており、必ずしも一様ではない。III群b類からIV群a類にかけてのものと思われる土器の小片や、黒曜石の、焼けた痕跡のないフレイクなどの包含された例もあるが、焼土層との同時性を積極的に主張できるほど、一次的な伴出関係の明瞭な遺存例は、C地区では認められていない。

焼土層の堆積状況を示すため、図IV-15に13ラインにおける断面実測図を掲載し、以下に各層を説明する。なお、アラビア数字で表記した1~3層は、傾斜面における倒木現象など、自



圖IV-15 焼土分布と土層断面図

然の攪乱に起因した局所的な土層と思われる。

- I a 層 表土。粘性の乏しい黒色土で、乾くと崩れやすい。透明ガラス質の結晶を含む。
- II a-1 層 真黒色土で、主要な遺物包含層。
- II b-1 層 橙赤褐色土。火山ガラスを含み、斜面やくぼみなど低い所にみられる。
- II c-1 層 黒色土。II a-1 層との境界は不明瞭である。
- II c-2 層 暗褐色土。II a-1 層より色調が明るく、粘性がある。
- III a 層 褐色粘質土。漸移層。
- III b-1 層 暗褐色粘質土。含水量の多い、植物遺体を含む泥炭化した土層。
- IV a 層 黄褐色粘土。粒子が細かく、粘性の強い粘土層。
 - 1 層 暗茶褐色土。I a 層に似るが、暗茶褐色土ブロックと黒色土ブロックがまだらに混入し、白色火山灰 (T a-a?) も混在させている。
 - 2 層 黒色土主体。木の根による攪乱層らしい。
 - 3 層 暗褐色土。橙赤褐色土をブロック状に含む。

(4) 家畜の埋葬

図IV-16に示すように、馬を埋葬した墓が2基、豚の墓が1基検出された。

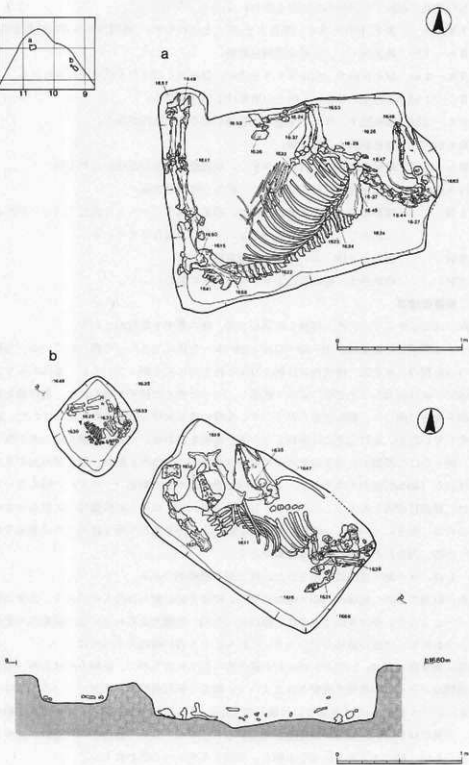
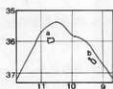
16-a に図示した馬墓は、10-35-C区と10-36-b区にまたがって掘られている。当初は、2.0×1.4m程の、東北東-西西南に長軸を有する長方形に穴を掘っているが、遺体が入りきらず、頭部や後肢部分などを必要に応じて拡張し、やっと納めた様子が窺われる。馬は頭を東方に、顔を北方に向けて、横臥させられており、全身の骨が欠けることなく揃っていた。遺骸は骨化していたが、未だ完全には腐朽しきらず、腐臭を漂わせ、一部には毛や皮などが残っていた。掘りあげて洗滌した骨を陽光の下で乾燥させた際、骨はヒビ割れ、髄が滲み出てきた。馬は体高が140cm程度のものであり、ドサンコと思われる。「繫部(ツナギ)の短く立っているのは、球節に疲労を与えることを少なくし、蹄(ひづめ)が平らに位置せずに目立って立っているのは、歩きにくい険しい地形の所でも、細かく場所を選んで歩を進めるのに重宝である」(八戸1979, 24頁)とされる特徴も看取できる。

16-b は、9-36-d区に見出された、豚と馬の埋葬例である。

北西に位置する豚の墓は、65×60cm程度の、ほぼ方形に掘られたものである。全身の骨が揃っているようで、やはり頭は東方に、顔は北方を向いて横たえられている。関節部の骨化は進んでおらず、若獣の遺体と思われる。これも、そう古い時代のものではない。

南東に並ぶ馬の墓は、1.75×1.05m程の長方形に掘られたもので、長軸方向は北西-南東。馬の遺骸はバラバラの状態に埋葬されたようで、椎骨や四肢骨の多くを欠いている。頭は一応顔を北に向けて安置し、その西隣りには腰の骨を添え、さらに第一から第六までの頸椎を納めている。中央には肋骨が、東部には肢骨がまとめられている。よそで解体された遺骸が埋められたものらしい。16-a よりも、やや小柄な、やはりドサンコと思われる。

(高橋 和樹)



图IV—16 家畜墓实例图

遺構名	位 置	平面形	長軸方向	確認面(m) 長径×短径	埋底部(m) 長径×短径	深さ(m)
P-1	7-40-b	円形	N-39°-W	1.00×0.98	0.62×0.58	0.18
P-2	7-38-d	不整円形	N-28°-W	1.00×0.98	0.77×0.70	0.20
P-3	7-29-c	円形	N-15°-W	1.32×1.26	1.20×1.17	0.26
P-4	$\frac{4}{7}$ - $\frac{21}{21}$ -b	円形	N-16°-W	1.10×0.96	0.96×0.88	0.49
P-5	9-41-b	楕円形	N-45°-E	2.16×1.24	1.39×0.56	0.28
P-6	10-38-d	不整円形	N-73°-W	1.39×1.16	0.82×0.64	0.32
P-7	9-37-d	不整円形	N-10°-E	0.78×0.56	0.63×0.52	0.20
P-8	10-37-a	円形	N-38°-E	0.58×0.54	0.50×0.42	0.09
P-9	10-39-c	円形	N-29°-W	0.48×0.44	0.28×0.24	0.18
P-10	10-39-b	円形	N-22°-E	0.68×0.58	0.34×0.29	0.24
P-11	11-38-c	不整円形	N-21°-W	1.52×1.22	1.08×0.85	0.20
TP-1	7-41-d	溝状	N-10°-W	3.24×0.46	3.30×0.16	0.65
TP-2	6-41-c	溝状	N-73°-W	(2.00)×0.62		1.00
TP-3	7-43-a	溝状	N-33°-W	3.18×0.73	3.10×0.12	0.93
TP-4	8-41-a・b	溝状	N-61°-W	3.24×0.63	3.35×0.14	0.84
TP-5	15-41-b	溝状	N-34°-W	2.82×0.34	3.12×0.10	0.86

遺構名	図番号	名称	分類	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	数量
P-1	1・2	土器	IVb	覆土						1
P-3	1・2	土器	IV	覆土						2
P-3		土器	IV	覆土						4
P-5		フレイク		覆土				0.1以下	Obs.	2
P-6	1	石 瓦		覆土	(5.99)	(5.24)	(2.48)	(95.3)	And.	1
P-7	1	土器	IIIb-1	覆土						1
P-9	1	石 瓦		覆土	(17.20)	(9.04)	(8.52)	(1570)	And.	1
P-9	2	石 瓦		覆土	(17.00)	(9.29)	(9.18)	(1570)	And.	1
P-9	3	石 瓦		覆土	(11.30)	(8.54)	(14.50)	(1800)	And.	1
P-9	4	石 瓦		覆土	(8.51)	(9.39)	(7.99)	(800)	And.	1
P-9	5	石 瓦		覆土	(11.17)	(10.98)	(9.31)	(1290)	And.	1
P-9	6	石 瓦		覆土	(9.84)	(4.82)	(5.67)	(550)	And.	1
P-9	7	石 瓦		覆土	(9.18)	(7.89)	(8.38)	(955)	And.	1
P-9	8	石 瓦		覆土	(8.54)	(4.44)	(10.71)	(375)	And.	1
P-9	9	石 瓦		覆土	(6.77)	(12.98)	(9.98)	(950)	And.	1
P-9	10	石 瓦		覆土	(11.50)	(19.00)	(6.78)	(2115)	And.	1
P-9	11	たたき石		覆土	12.72	7.15	(7.87)	(840)	And.	1
P-9		石 瓦		覆土				(300)	And.	1
P-11	1・2	土器	IIIb	覆土						2
P-11		土器	IIIb	覆土						1
P-11		フレイク		覆土				0.7	Obs.	6

表IV-1 遺構規模と出土遺物一覧表

3. 遺物

(1) 土器

昭和58・59年度出土の土器片は約2,600点を数え、その43%程がⅢ群土器、54%程がⅣ群土器で、その他にⅡ群、Ⅵ群土器がそれぞれ少量検出されている。各土器群の分布域については、昭和60年度の調査区におけるデータも含めて説明を加えたい。

Ⅱ群土器（図Ⅳ-17：1～6）

Ⅱ群土器の分布は、10～11-36～39区を中心とするC地区北端部、および対岸のB地区7-34～36区に認められた。いずれも胎土にやや多量の繊維を含む土器片で、表裏に羽状縄文の施される例が多く、口唇部にも縄文が加えられる。1～3には、1～2条の縄線文がめぐり、6の円筒状を呈する深鉢形土器の口唇部は、外側に張り出している。

Ⅲ群土器（図Ⅳ-17：7～22、図Ⅳ-18：23～48、図Ⅳ-19：49）

Ⅲ群土器の大半は後半期のb類に含まれるもので、B地区、C地区に広く分布するが、特に7-31～35区、8-11-36-39区、8-11-41～42区、18-42区などに集中が認められた。

7～14はⅢ群a類土器で、裏面が丁寧に調整されている。結束第一種のある羽状縄文を地文とし、8～10には、擦糸圧痕や縄文の施された貼付文が付加されている。

15はb-1類に含まれる波状口縁片で、口唇部や貼付文には絡糸条による刻みが加えられ、半載竹管の内面を引いた平行沈線文もみられる。

16～22は、b-2類に含めうる資料である。丸みのある口唇部の直下に、16では半載竹管による連続刺突文を加えた貼付帯が、17では2条の縄線文が配されている。18は表裏に縄文のある小型の土器で、21の地文は、結束第二種のある原体によるもの。

23～49にはb-3類、北筒式に含まれる土器をまとめた。口唇上や口縁部肥厚帯に半載竹管を押し引いた連続刺突文列をめぐらせ、肥厚帯の直下に円形刺突文を加えた例が多い。地文は、結束第一種のある羽状縄文や斜行縄文で、綾絡文の重ねられる場合が多く、口縁部内面にも縄文の施されるのが通例である。25・27の波頂部には、細く鋭い工具を上から下へ突き刺した、小孔が穿たれている。30の縄文は、附加条によるものらしい。34には、連続刺突文列がみられない。35～37は、口縁部が肥厚しないもの。39～42は口頸部にも押し引き文が展開される例で、39には円形刺突文も加えられている。無文小型の44、地文のみの49は、器形や胎土、焼成などの印象から、b-3類に含めたものである。

Ⅳ群土器（図Ⅳ-19：50～67、図Ⅳ-20：68～89、図Ⅳ-21：90～127、図Ⅳ-22：128～143）

Ⅳ群土器は前葉のa類から中葉のb類までがあり、a類はC地区の北部8-12-37～39区および南部7-11-42～44区で特に多く、b類はB地区の7-31～34区にかけての一番と、対岸のC地区北端8-10-36～37区において、分布の集中が認められた。

50～71はa類のうち、初頭の糸市式系のグループに属するものである。胎土には砂礫が多量に含まれ、口唇上や内面にも縄文の施された例が多い。50は横走がちな縄文のみられる口頸部の破片で、51の縄文は複節によるもの。摩耗のため不明瞭だが、52の地文には羽状に重ねられ

た部分がみられる。54はやや小型、薄手の土器で、円形刺突文の一部が残されている。55は肥厚帯がめぐる口縁片。56・57の斜め下方からの刺突文は、縄端によるものらしい。58～60には縄線文が、61～63には貼付帯の横帯があり、61の貼付帯には縄線文が加えられている。61～67は、太めの原体による縄文が施されたもの。68・69は同一個体で、整形がやや粗く、不整に横走する縄文がみられる。70は底面にも縄文のある例で、71では、貼付帯の付加後も、複節の原体による縄文を重ねて施文している。

72～100は、縄文地に横位や弧状、あるいは蛇行する沈線文などを展開させるもので、手稲砂山式、涌元式、入江式などに類例が求められる。胎土には多量の砂が含まれ、触れるとザラつきを覚える例が少なくない。72・73はやや薄手の同一個体で、半截竹管の内面を利用した弧状の並行沈線文が、74では楕円を描く、2本の並行沈線文がみられる。75・76の口唇部には、連続して押圧が加えられている。77～86はやや太めの沈線による文様があるもので、鱗状に重なる連弧文や、2本単位の横位および縦位の沈線文がみられ、80には連続して押圧の加えられた貼付帯が付加されている。89～91、92～94はそれぞれ同一個体で、S字状に蛇行を繰り返して垂下する沈線文が配されている。97～99は、平行沈線を長楕円状に連結させた文様をもち、100には、磨消しを伴う曲線文がみられる。

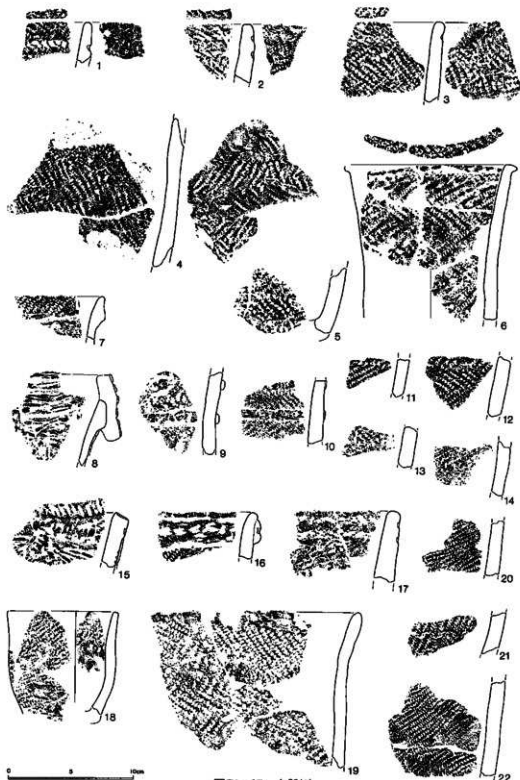
101～143は、IV群b類に属する土器である。b類には、ウサクマイC式から船泊上層式にかけての段階のものと、手稲式に比定される資料とがある。

101～108は前者で、101～104は口唇部にも縄文が施され、菱形状、山形状に重ねられた文様をもち、平行沈線によって区画された頸部には磨消帯があるもの。105～108には、平行沈線文、長楕円状や斜位の沈線文が配されている。109～127は、地文の縄文のみが施文された土器で、109～111と117と118、そして115・116・124・126は、それぞれ同一個体と思われる。薄手、小型なものの中には、手稲式に含まれる土器も包括されている。

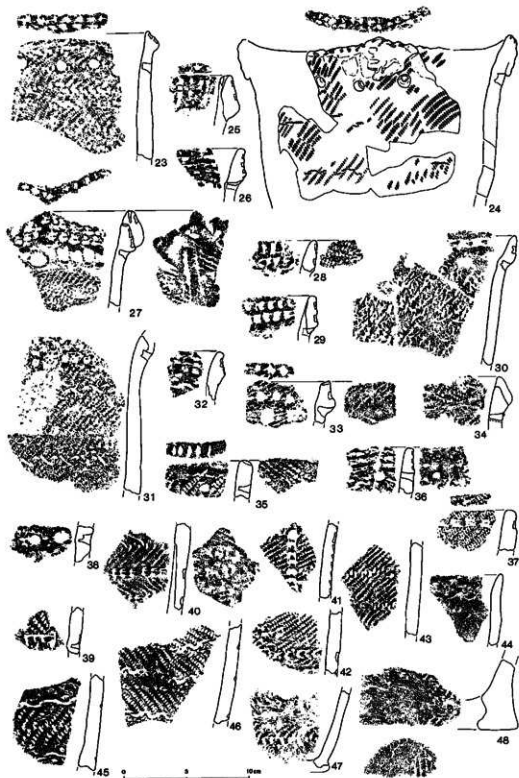
128～143は手稲式に属する資料で、口唇を含む口縁部の内外が、滑沢に磨かれたものが多い。128・129および134・135は、それぞれ同一個体で、口縁が大きく外反する精製の深鉢形土器。口頸部文様帯は平行沈線文と、これを区画して垂下する連続S字状文とによって構成されている。同じ文様は、浅鉢形の136にもみられる。130は口唇部が丸く厚めで、2段の長楕円状に描かれた沈線文がある。131～133、137は頸部に口縁部無文帯を区画する1本の沈線がめぐるもの。138は上半部の多くを欠失する深鉢形土器で、残存する口縁部は平滑に磨かれており、頸部に加えられた2本単位の縦の沈線文間にも、磨消しが認められる。143は、小さめの深鉢形土器で、口縁部が垂直に近く立ち、底部付近の器面が磨かれている。これらは、138にも共通してみられる特徴である。

VI群土器（図IV—22：144・145）

VI群土器は、A地区の4～5—20～21区を中心に見出されたもので、数は僅かだが、後北式の古い段階のものが主体である。144は小さく外反する口縁片で、口唇部は細く、密に配された並列刻文と横帯縄文とがみられる。145には、縦走する帯縄文が施されている。



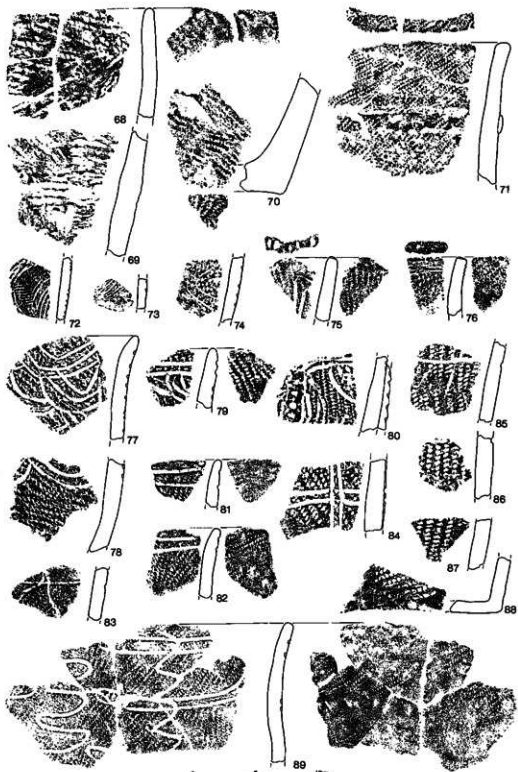
圖IV-17 土器(1)



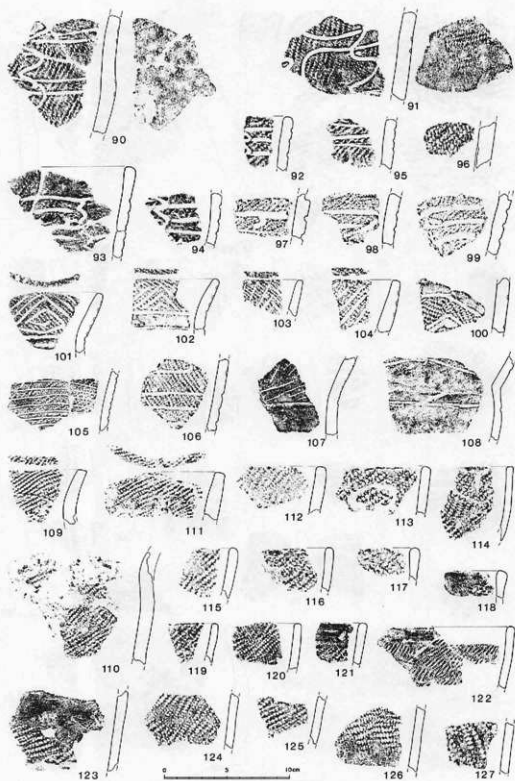
圖IV-18 土器(2)



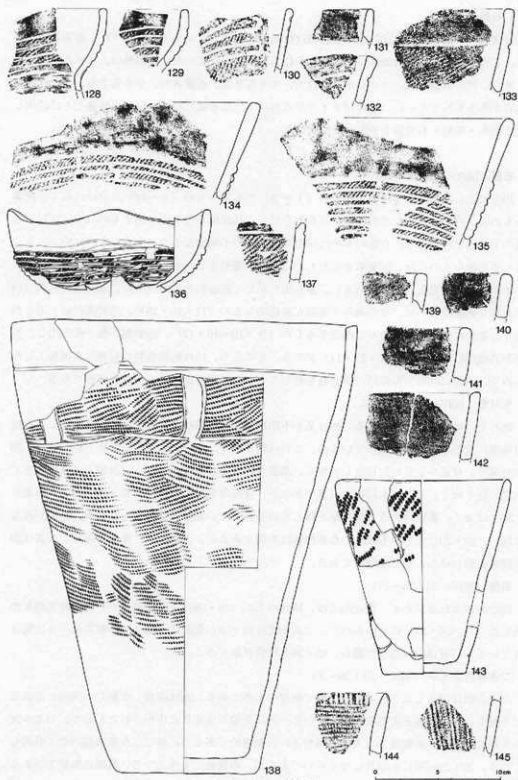
圖IV-19 土器(3)



圖IV—20 土器(4)



圖IV-21 土器(5)



图IV—22 土器(6)

2) 石器

包含層からは、総数 1,071点の石器、石核、剥片・石屑（フレイク・チップ）、礫等が出土した。このうち、石器は 139点で、全体の約12%しか得られていない。器種は、石斧が36%と最も多く、次に石鏃14%、スクレイパー11%、すり石9%、石錐8%、やり先7%、たたき石と砥石が各々6%となり、つまみ付ナイフや石皿は1%にも満たない。以下、器種ごとに説明し、出土地点・規格・石質等を表IV-2に掲げる。

石鏃（図IV-23：1~18）

19点出土した。大きくは無茎のもの（1~3）と有茎のもの（4~18）に分けられる。無茎のものは3点しか出土しておらず、三角形を呈し、基底部が若干張り出すもの（1・3）と平基のもの（2）がある。有茎のものは16点あり、茎の不明瞭なものと明瞭なものに分かれる。茎の不明瞭なものには、柳葉形をしたもの（4）、菱形をしたもの（5）、中央部のやや下にわずかな狭入が見られるもの（6）、張り出しがなく直線的なもの（7）、五角形のもの（18）がある。明瞭なものは、やや細みで茎部が直線的なもの（11・12・15）、逆刺部の張り出しが弱く、茎部に至るまで緩やかに内湾するもの（9・10・16・17）、逆刺部が強く張り出し、茎部が直線的になるもの（8・13・14）がある。このうち、15は粘板岩製の石斧片を再加工したもので、表面には石斧製作時の研磨痕を残している。石質は15以外、全て黒曜石である。

やり先（図IV-23：19~23）

破片を含め10点出土している。19は茎が不明瞭で、先端部は欠損している。二次加工は裏面の身部に大きな素材面を残しているが、これは剥片がコンケーブしているためと思われる。20は有茎で、身部が全長の $\frac{1}{2}$ 程度しかなく、基部は幅広で、先端が尖る。二次加工は裏裏面とも入念に施されている。21も同様に有茎であるが、身部は全長の $\frac{2}{3}$ を占める。二次加工はあまり丁寧ではなく、裏面は大きく素材面を残している。また、基部は装着痕のためか、光沢が非常に鈍い。22・23はどちらも破片のため形状は不明であるが、大型のやり先片である。石質は22が硬質頁岩のほか、全て黒曜石である。

石錐（図IV-23：24~27）

出土点数は11点である。型的には、棒状のもの（24・25）と縦長剥片の一端に刺突部を作出したもの（26・27）に分けられる。二次加工は24・25が全面に、26・27が刺突部のみに施されている。石質は24・27が黒曜石、25・26が珪質頁岩である。

つまみ付ナイフ（図IV-23：28~30）

出土点数は図示した3点のみで、全て縦型のものである。28は湾曲した剥片の周囲に二次加工を施し、つまみ部と刃部を作出している。29は先端が尖頭状に作出されたもので、つまみ部を欠損している。右側縁部は入念に調整され、直線的であるのに対し、左側縁部は若干外湾している。30も29同様に尖頭状になるものであるが、両側縁とも外湾する。裏面は無加工である。石質は28が黒曜石、29・30が硬質頁岩である。

スクレイパー (図IV-23:31~37)

15点出土した。31は両面加工のものである。刃部は入念に調整され、カーブしている。32は裏面の調整が粗く、刃部は側縁部から先端にかけて作出されている。33は湾曲した剝片の右側縁部のみ刃部が作出されている。34は尖頭状になるもので、二次加工は表面の刃部のみ丁寧に作出されている。35~37は、剝片の一端に刃角の大きい刃部が作出されている。二次加工は35・37が刃部のみ、36は刃部のほか両面に比較的粗い調整が施されている。石質は34が硬質頁岩で、他は全て黒曜石である。

石核 (図IV-24:38~42)

7点出土したうち、5点を図示した。いずれも、小型のものである。石質は全例黒曜石。

石斧 (図IV-24:25:43~57)

破片を含めて、49点出土した。これらは、擦り切り痕を残しているもの(43)、剝離調整と全面研磨が施されているもの(44~55)、ベッキングによるもの(56)、石のみと称されているもの(57)に分けられる。43は右側縁部に表裏からの擦り切り痕と全面にわずかな研磨痕を残しているが、刃部は作出されていない。未製品である。47は全面にわたり、研磨による整形が施され、刃部は直刃となる。48も47同様の形状で整形されているが、刃部は円刃である。51も全面にわたり研磨されているが、断面は肉厚となる。56は刃部を欠損しているが、中央部の横断面は楕円形で、厚さ4.1cm、重量474.4gを測り、他と異なるものである。57は中央部の横断面が三角形で刃部の幅は1cm程である。石質は、43・45・47・50・52が泥岩、49が砂質泥岩、44・46・48・51・53~57が片岩である。

たたき石 (図IV-26:58~61)

破片を含めて、9点出土している。58は楕円礫の周辺と腹面にたたき痕が残されたものである。59は棒状礫を素材とし、その両端にたたき痕を残しているが、形状が変化するほど使い込まれていない。60は一部欠損しているが、扁平楕円礫を素材としており、腹背面に凹状の使用痕が見られる。61は棒状礫の4面に凹みを顕著に残している。石質は58が安山岩、他は砂岩である。

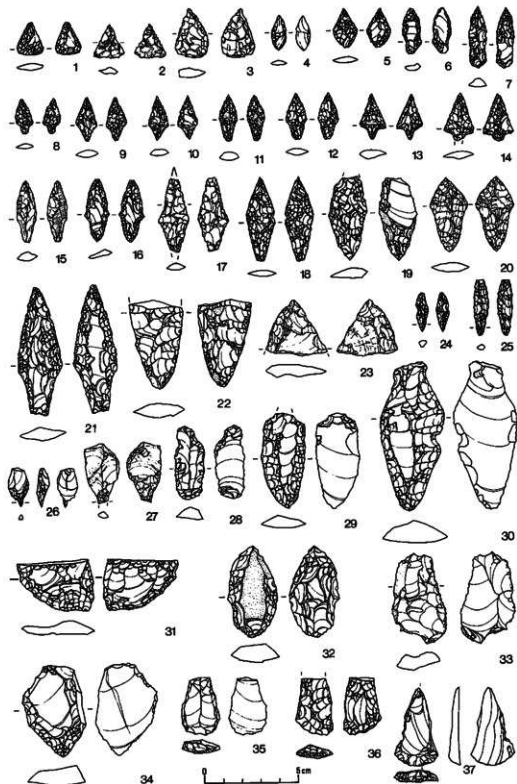
すり石 (図IV-26:27:62~65)

扁平礫の側縁に使用痕が見られるもの(62)、北海道式石冠と称されるもの(63・64)、未製品(65)がある。62は自然礫の形状を変えることなく、使用されたものである。65は素材となる礫の周辺をベッキングにより成形したもので、北海道式石冠と同形態のものであるが、すり面が使用されていないことにより未製品とした。石質は62が砂岩、他は安山岩である。

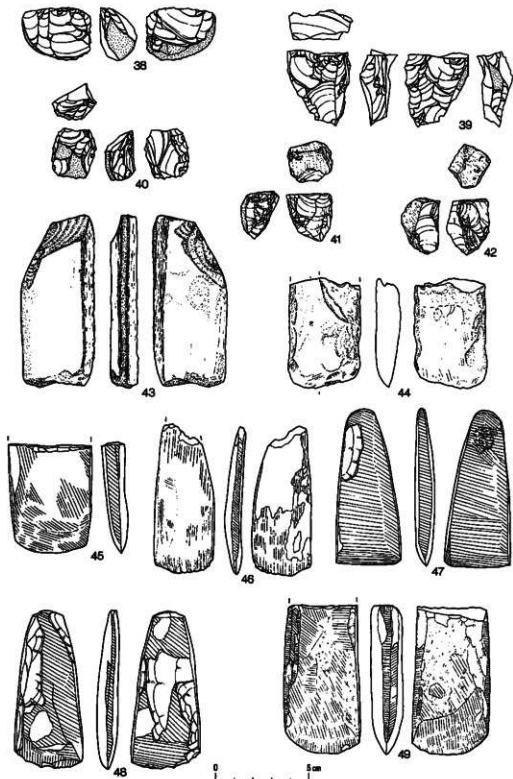
砥石 (図IV-27:66・67)

破片が8点出土したのみである。どちらも砂岩性の砥石で、砥面は一面である。

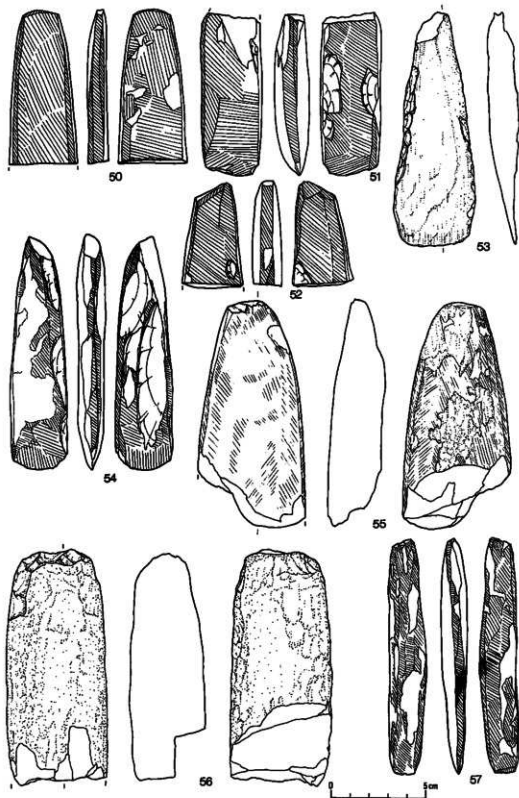
(森岡 健治)



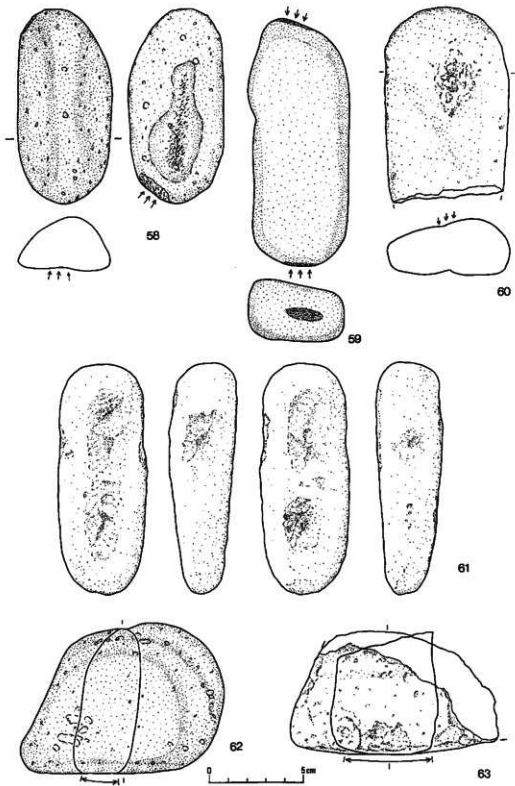
圖IV-23 石鏃(1)



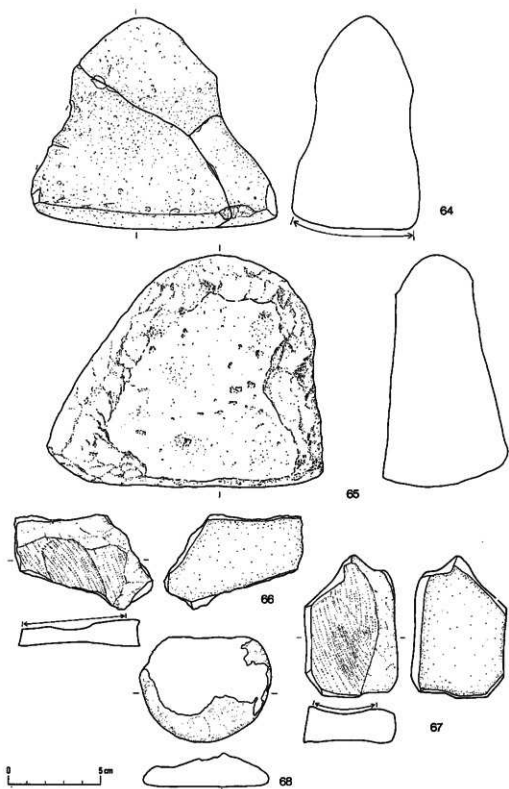
圖IV—24 石器(2)



圖IV—25 石器(3)



圖IV-26 石器(4)



图IV-27 石器等

図番号	グリッド	層位	名称	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
1	11-40	I	石 鏃	1.7	1.4	0.3	0.5	Obs.	
2	4-21	I	石 鏃	1.8	1.7	0.4	0.7	Obs.	
3	7-36	I	石 鏃	2.6	1.7	0.5	2.0	Obs.	
4	9-38	I	石 鏃	1.8	0.8	0.2	0.2	Obs.	
5	12-41	I	石 鏃	2.0	1.3	0.3	0.6	Obs.	
6	8-41	I	石 鏃	2.4	1.0	0.4	0.8	Obs.	
7	9-38	I	石 鏃	3.2	1.0	0.4	1.0	Obs.	
8	10-40	I	石 鏃	1.9	0.9	0.3	0.3	Obs.	
9	8-37	I	石 鏃	2.3	1.1	0.4	0.7	Obs.	
10	13-40	I	石 鏃	2.3	1.1	0.3	0.7	Obs.	
11	11-37	I	石 鏃	2.5	1.0	0.5	1.0	Obs.	
12	11-37	I	石 鏃	2.5	1.1	0.3	0.7	Obs.	
13	11-42	I	石 鏃	2.4	1.4	0.4	0.9	Obs.	
14	9-36	I	石 鏃	(2.5)	1.6	0.4	(1.0)	Obs.	基部欠損
15	10-36	I	石 鏃	3.2	1.1	0.5	1.6	S.l.	石片再加工
16	10-41	I	石 鏃	3.2	1.3	0.3	1.1	Obs.	
17	7-31	I	石 鏃	(3.9)	1.6	0.5	(1.9)	Obs.	先端部、基部欠損
18	10-41	I	石 鏃	4.4	1.6	0.4	1.9	Obs.	
19	10-38	I	やり先	(4.4)	2.1	0.7	(5.2)	Obs.	先端部欠損
20	7-43	II	やり先	3.9	2.0	0.5	3.0	Obs.	
21	15-59	I	やり先	6.8	2.4	0.7	10.3	Obs.	
22	11-36	I	やり先	(4.7)	(2.9)	1.0	(11.4)	Che-Sh.	身部欠損
23	7-31	II	やり先	(3.0)	(3.3)	(0.7)	(5.4)	Obs.	基部欠損
24	14-39	I	石 鏃	2.0	0.7	0.4	0.4	Obs.	
25	11-40	I	石 鏃	2.9	0.8	0.5	0.8	Che-Sh.	
26	10-38	I	石 鏃	2.0	1.1	0.6	1.1	Che-Sh.	
27	7-31	I	石 鏃	(3.0)	1.8	1.0	(4.9)	Obs.	先端部欠損
28	7-34	II	つまみ付ナイフ	3.9	1.6	0.7	3.9	Obs.	
29	9-38	I	つまみ付ナイフ	(5.0)	2.4	0.6	(8.2)	Ha-Sh.	つまみ部欠損
30	11-37	I	つまみ付ナイフ	7.8	3.5	1.1	30.0	Ha-Sh.	
31	9-42	I	スクレイパー	2.7	4.1	0.7	7.9	Obs.	
32	14-39	I	スクレイパー	4.8	2.8	1.2	14.5	Obs.	
33	7-32	I	スクレイパー	4.9	2.9	0.9	10.7	Obs.	
34	12-42	I	スクレイパー	5.0	3.3	1.0	16.1	Ha-Sh.	
35	10-38	I	スクレイパー	3.0	2.0	0.6	3.5	Obs.	
36	10-37	II	スクレイパー	(3.1)	2.0	0.6	(3.8)	Obs.	上部欠損
37	7-34	II	スクレイパー	4.1	2.3	0.6	4.0	Obs.	
38	9-38	I	石 核	3.0	3.7	1.8	20.0	Obs.	
39	10-39	I	石 核	4.1	3.4	1.5	18.5	Obs.	
40	7-38	I	石 核	2.6	2.3	1.5	9.2	Obs.	
41	7-33	I	石 核	2.8	2.4	2.1	12.3	Obs.	
42	7-30	II	石 核	3.0	2.4	2.2	13.5	Obs.	
43	7-31	I	石 斧	8.9	3.8	1.4	98.8	Gr-Mud.	未製品
44	7-32	I	石 斧	(5.8)	3.8	1.3	(46.9)	Sch.	基部欠損
45	9-42	I	石 斧	(5.7)	4.4	1.1	(61.3)	Gr-Mud.	基部欠損
46	15-42	I	石 斧	(7.9)	3.2	1.0	(40.1)	Sch.	基部欠損
47	9-39	I	石 斧	8.3	3.6	1.0	50.2	Gr-Mud.	
48	9-39	I	石 斧	8.5	3.7	1.0	46.4	S.l.	
49	9-38	I	石 斧	(8.0)	4.1	1.5	(106.1)	Sa-Mud.	基部欠損
50	11-37	I	石 斧	(8.0)	3.6	1.0	(59.1)	Mud.	刃部欠損

表IV-2 掲載石器一覧表(1)

図番号	グリッド	層位	名称	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	石質	備考
51	11-38	I	石 斧	8.6	3.4	1.9	(101.6)	Sch.	基部欠損
52	11-38	I	石 斧	(5.6)	(3.3)	(1.6)	(46.1)	Mud.	刃部欠損
53	7-33	I	石 斧	12.1	4.2	1.7	95.7	Sch.	
54	10-38	I	石 斧	12.3	3.1	1.5	88.5	Sch.	
55	15-15	I	石 斧	(12.0)	(5.4)	2.8	(268.3)	Sch.	刃部欠損
56	7-34	II	石 斧	(12.6)	5.3	4.1	(474.4)	Sen.	刃部欠損
57	11-34	I	石のみ	12.5	2.0	1.3	53.3	Sch.	
58	13-40	I	たたき石	10.3	4.9	3.1	197.6	And.	
59	15-42	I	たたき石	13.0	5.3	3.6	398.6	Sa.	
60	7-31	II	たたき石	(9.9)	6.6	3.0	(325.0)	Sa.	下半分欠損
61	7-33	II	たたき石	12.3	4.7	3.3	278.2	Sa.	
62	9-36	I	ナリ石	8.0	10.2	3.8	427.6	Sa.	
63	7-34	II	ナリ石	(6.3)	(11.0)	5.3	559.0	And.	上部欠損
64	15-40 16-40	II	ナリ石	11.0	13.0	6.4	1082.0	And.	
65	7-42	II	ナリ石	12.5	14.4	6.6	1841.0	And.	未製品
66	12-39	II	砥 石	(5.0)	(7.4)	(1.5)	(50.9)	Sa.	破片
67	13-40	II	砥 石	(7.6)	(4.8)	(2.7)	90.1	Sa.	破片
68	13-40	-	土製品	(6.9)	(5.5)	(1.9)	(50.6)		

表IV-3 石器一覧表(2)

4. 小 括

西野槻11遺跡の昭和58・59年度調査区からは、土壌11基、Tピット5基、焼土や近代の家畜の埋骨例などが検出された。昭和60年度分も加えると、Tピットは6基となる。

土壌のうち、時期を確定できたものは、P-1だけである。伴出土器はIV群b類のうち船泊上層式に含まれるもので、器形的には頸部の屈曲がきつく、やや新しい段階に位置づけられる可能性がある。近隣における、船泊上層式から手掘式にかけての土壌の類例は、江別市吉井の沢1遺跡P-253、P-257(北埋文1982)、高砂遺跡P-187(國部編1987)、札幌市T468遺跡第1号ピット(加藤ほか1984)、T361遺跡第1号、2号、9号ピット(田部ほか1987)などを挙げる事ができる。T468遺跡例のように、土器が墳底に見出されたものもあるが、覆土中や墳口部から検出された例も少なくない。P-1に伴出した土器が、墓墳の上部に副葬されたものであった可能性は、十分考えられよう。

Tピットは溝状の細長い形状のもので、調査区内では、特別な配列は指摘できない。

焼土については、今のところ成因や形成時期を明言できないが、今後とも検討を進めたい。

近代の家畜の埋骨についても、開拓農家などの民俗学的な側面に迫る資料として、考古学的な記録を残す価値がある。馬墓の報告例には、枝幸町ホロナイ遺跡(佐藤1980)、松前町札前遺跡(久保ほか1985)、七飯町七飯本町1遺跡(石本1986)などがある。

出土した土器は、縄文時代前期から統縄文時代までのもので、特に縄文中期、後期の資料が多かった。石皿の類は、P-9以外ではみられない。図IV-27:68の土製品は、径7.0cm程の底面が平坦なもので、茎部が欠損したものらしい。江別市荻ヶ岡遺跡で呪具とされた、スタンブ状土製品(高橋編1982)の一種と思われる。(高橋 和樹)



昭和58年度の調査

Loc. C調査風景 N→S	Loc. C完 掘 N→S
Loc. B完 掘 S→N	Loc. A完 掘 W→E

昭和59年度の調査



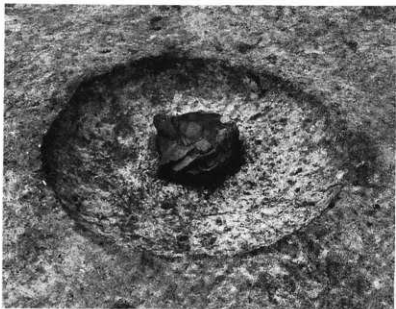
調査前



調査風景

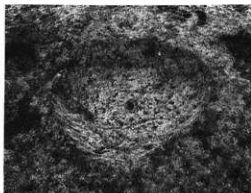


完掘



P-1

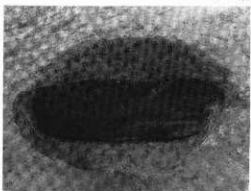
P-1の土器



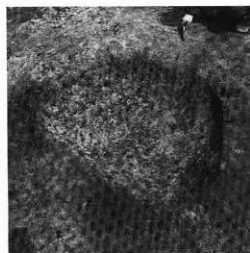
P-2



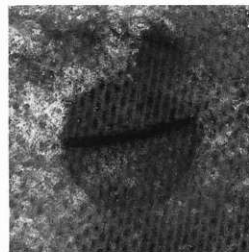
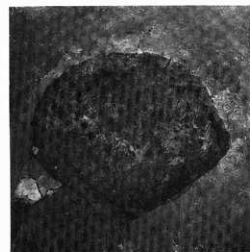
P-3

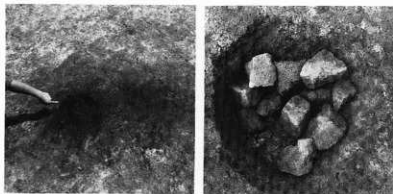


P-4



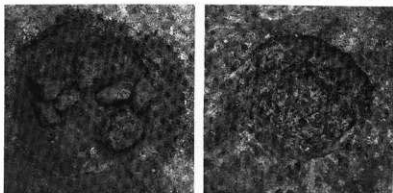
P-5	P-5 焼土の土層断面
P-6	
P-7	P-8





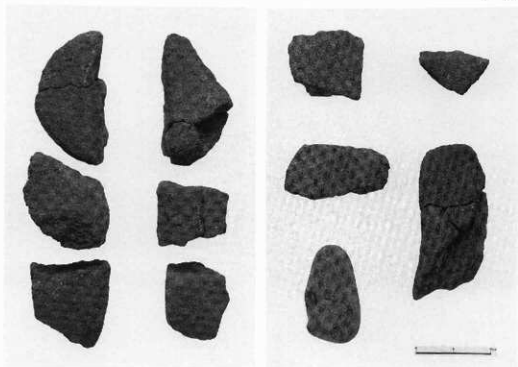
礫・石器出土状況①

P-9 確認

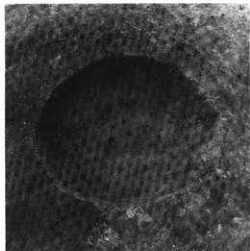


礫・石器出土状況②

完掘



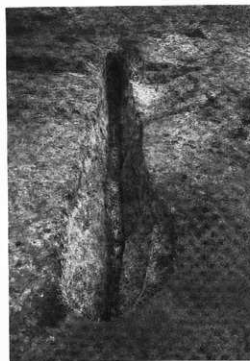
P-9の礫石器



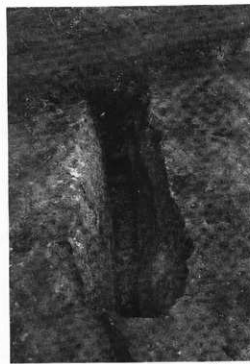
P-10



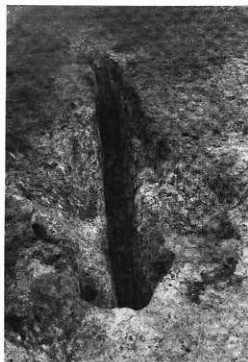
P-11



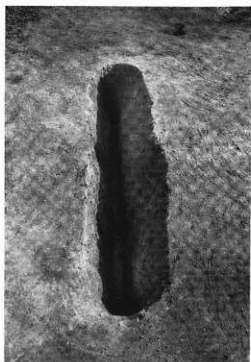
TP-1



TP-2



TP-3



TP-4



TP-5 確認



TP-5



焼土の土層断面



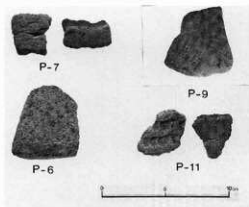
馬墓(a)



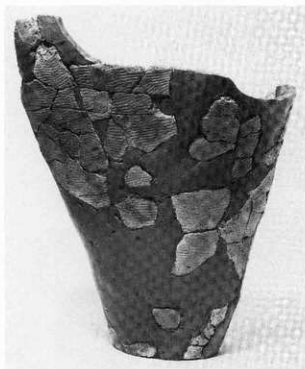
豚墓



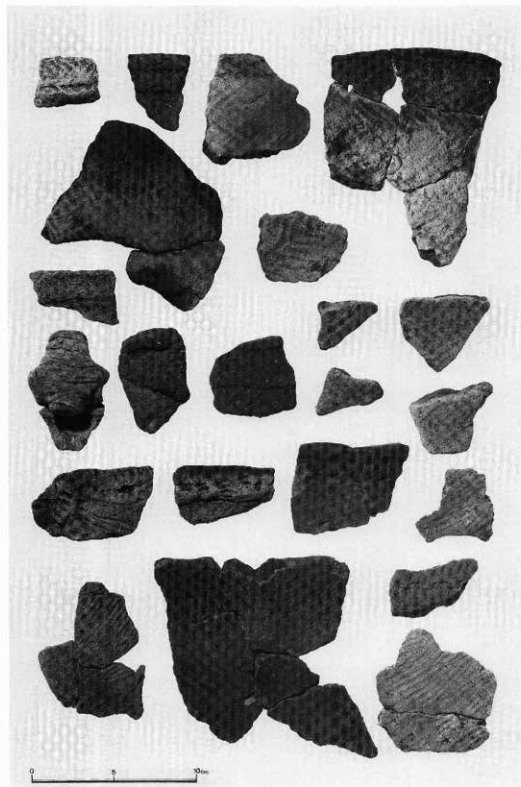
馬墓(b)



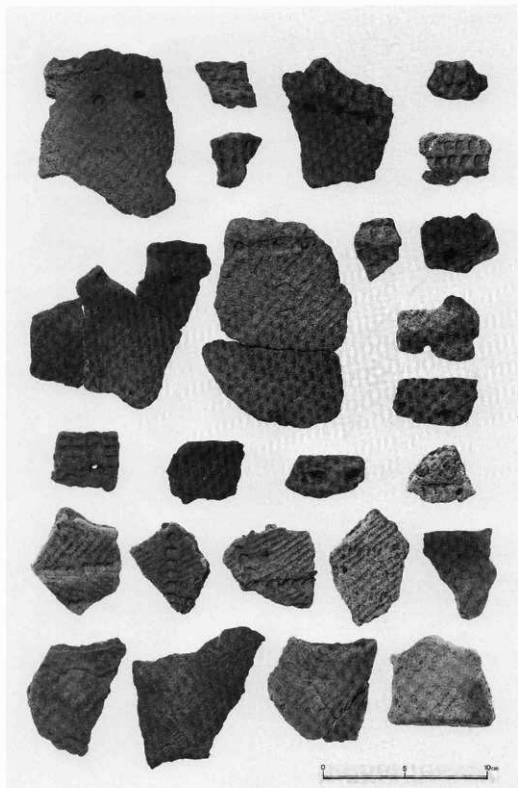
ピットの遺物



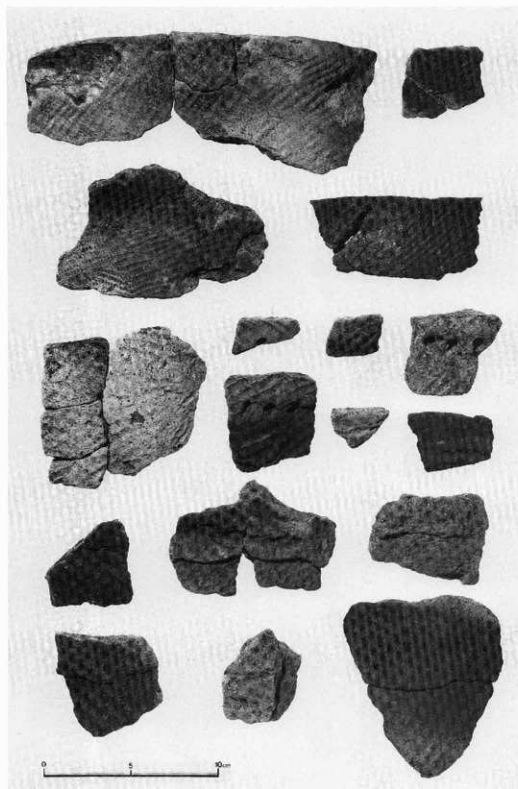
復元土器



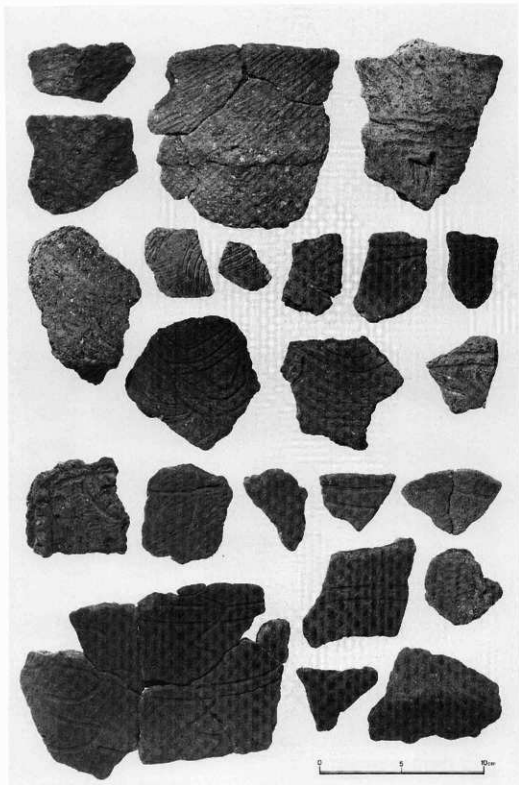
土器(1)



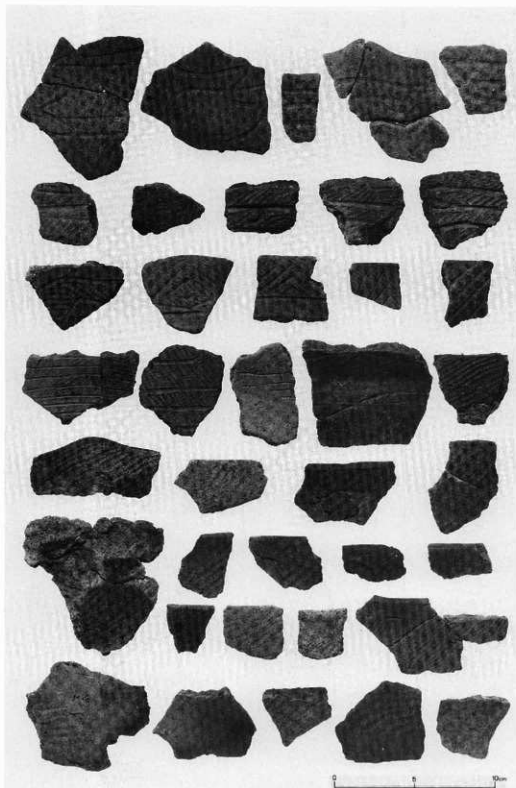
土器(2)



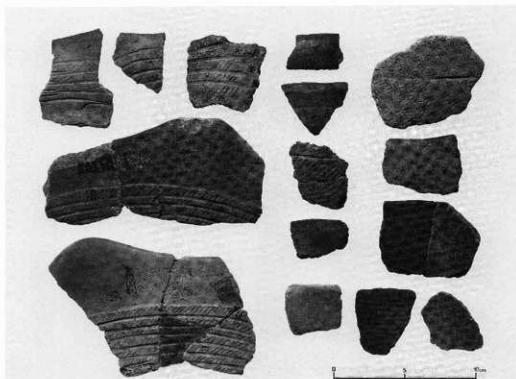
土器(3)



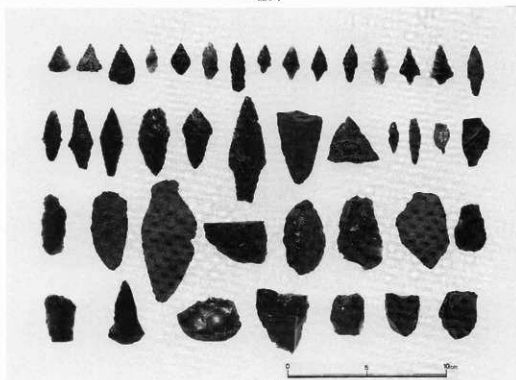
土器(4)



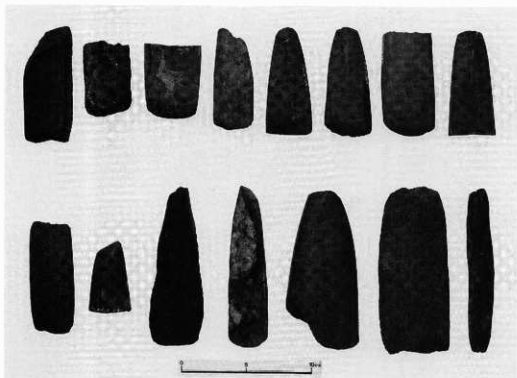
土器(5)



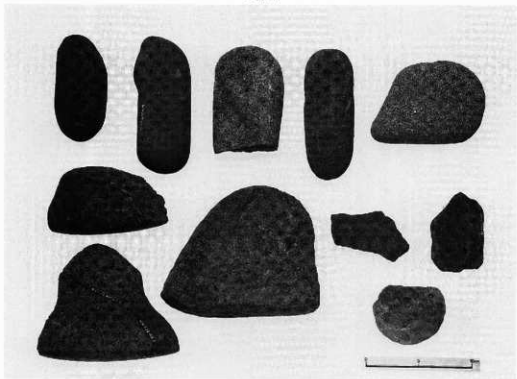
土器(6)



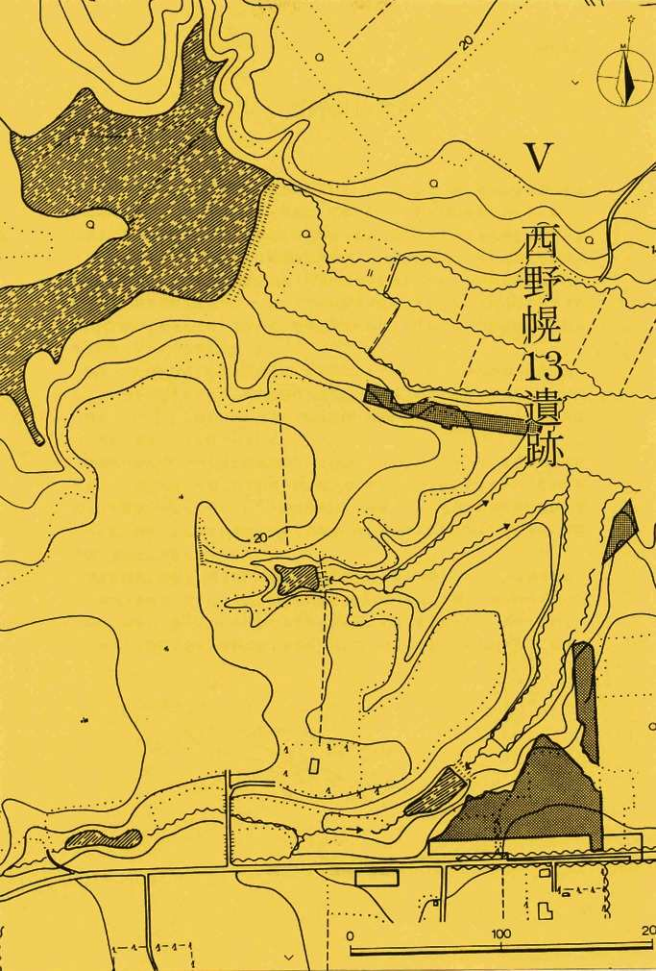
石器(1)



石器(2)

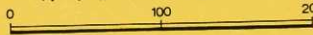


石器等



V

西野幌13遺跡



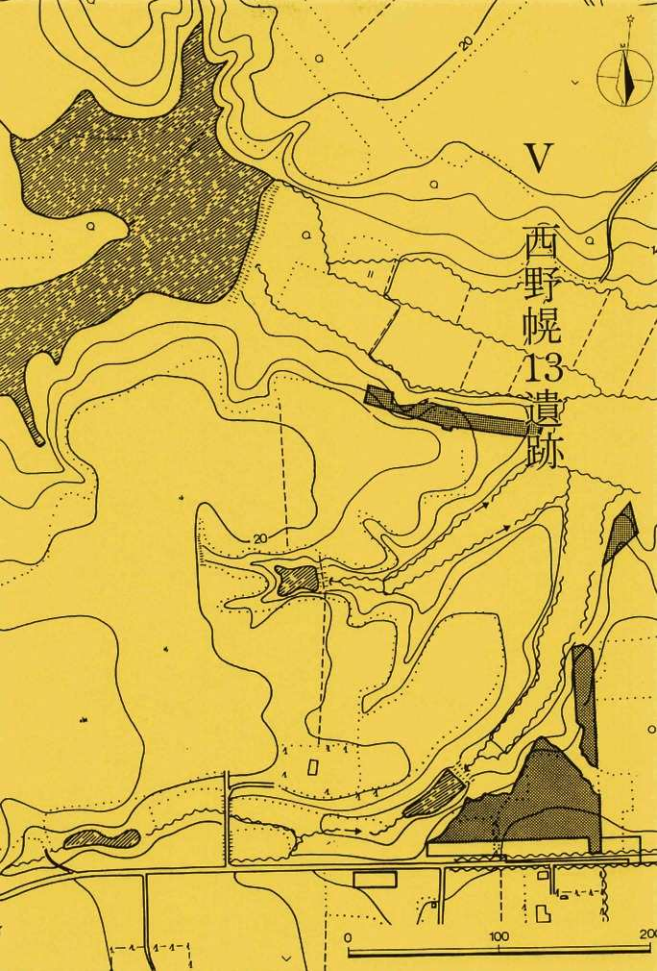
資料となる。この堅穴と周辺部には、縄文時代早期の土器の分布がみられることは、興味深い。全体では、前期を除く縄文土器と、続縄文時代後北式土器が出土しているが、特に堅穴住居のある平坦面を中心に、縄文時代中期（21%）、後期（43%）と続縄文後北式（33%）が多く分布する。3基のピットは、土器全体の97%を占めるこの3期のいずれかの時期に営まれた可能性が高い。剥片・礫（449点）を除くと、剥片石器35点、礫石器78点の計113点の石器が出土している。石器等の分布も、土器の分布と重なっているが、时期的には把えにくい。

いずれにしても、道路幅内の細長い範囲の調査で、遺跡の全貌を掌握することはできなかったが、野幌丘陵や周辺の遺跡との関連でとらえていくと、貴重な資料を提供してくれた遺跡であるといえる。（三浦 正人）

調査区内における層堆積は、図V-2～4に示すとおりである。以下に層名を列記するが、主要な遺物包含層はⅡa-1層で、I b層からの遺物の採集も多かった。遺構の存在は、Ⅲa層ないしはⅣa層に至ってから、確認されている。

- I a層 表土、木の根、笹の根などが密生した暗褐～黒褐色土。
- I b層 耕作土。厚く盛られて整地された所もある。
- I c層 暗灰褐色土。白色火山灰（T a-a'）が流れ込み、暗褐色土に混合。
- I d層 暗赤褐色土。暗褐色土にやや多量の焼土が混合。黒色土も不整に点在。
- I e層 赤褐色焼土ブロック。少量の黒色土を不整に混合する。
- I f層 黒色土ブロック。焼土や黄褐色粘土の小ブロックを不整に点在させる。
- Ⅱa-1層 真黒色土。溶脱のためか、部分的に色調の淡いところがある。
- Ⅱb-1層 橙赤褐色焼土主体層。
- Ⅱb-2層 黒色土。部分的に少量の焼土を混合させる。
- Ⅱb-3層 赤褐色焼土主体層。
- Ⅱc-1層 黒褐色粘質土。色調淡く暗褐色がちな所もある。
- Ⅱc-2層 暗褐色粘質土。黒色がちな部分と黄褐色粘土がちな部分が不整につづく。
- Ⅲa層 褐色粘質土。漸移層。
- Ⅳa層 黄褐色粘土。やや砂質がち。

（高橋 和樹）



V

西野幌13遺跡

0 100 200

V 西野幌13遺跡

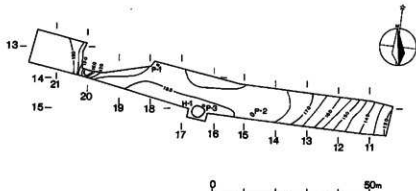
1. 遺跡の概要

西野幌13遺跡は、野幌総合運動公園が建設されている、江別市西野幌の野幌丘陵下学田地区の北辺に所在する。この遺跡の発見・登載は、昭和56年10月、野幌総合運動公園造成に伴って北海道教育委員会が実施した、遺跡所在確認調査（表面踏査）による確認が契機となっている。さらに昭和57年と58年の掘開による範囲確認調査で、20,800㎡におよぶ遺跡の広がりが確認された。昭和58年、この運動公園造成に伴う市道の代替道路建設のため、発掘調査を委託された財団法人北海道埋蔵文化財センターは、1,070㎡の記録保存調査を行った。昭和61年には、道教委が、120㎡の工事立会を行っているが、遺構・遺物は確認されていない。本章は、この昭和58年度調査に関わる報告である。

遺跡は、北側を桜沢、南東を桜沢に注ぐ小支流によって区画された、標高約20mの平坦面をもった台地上に営まれている。調査範囲はこのうち、北側縁辺部と、ゆるく傾斜する東側斜面（標高15～19m）の、幅約11m、長さ約105m、面積1,070㎡である。ほぼ一直線であるが、西側の一部が、湧水によって抉られている。

調査前の状況は、台地全体が採草地になっており、東側斜面はトドマツ林、北斜面は雑木林であった。桜沢流域は水田として利用され、沢上流（遺跡北西方）は、せき止められ桜沢貯水池となり農業用水にあてられていた。遺跡中央部から遠望すると、南西には西野幌11遺跡の広がる台地、南西には西野幌12遺跡の広がる台地を、ほぼ同一標高に見渡すことができ、野幌丘陵下学田面全体をとらえられる。

調査の結果、遺構は、縄文時代早期後半の竪穴住居跡1軒と時期不詳のピット3基を確認した。遺物は表採分も含めて、土器1,487点、石器等562点の計2,049点を得た。縄文時代早期の住居跡は、南側の未調査部分にも所在するものと思われ、小集落を形成していたものと推定される。詳しくは後述するが、野幌丘陵下学田面では、現在のところ唯一の調査例であり、貴重な



図V-1 遺構位置図

資料となる。この堅穴と周辺部にのみ、縄文時代早期の土器の分布がみられることは、興味深い。全体では、前期を除く縄文土器と、続縄文時代後北式土器が出土しているが、特に堅穴住居のある平坦面を中心に、縄文時代中期(21%)、後期(43%)と続縄文後北式(33%)が多く分布する。3基のピットは、土器全体の97%を占めるこの3期のいずれかの時期に営まれた可能性が高い。剥片・礫(449点)を除くと、剥片石器35点、礫石器78点の計113点の石器が出土している。石器等の分布も、土器の分布と重なっているが、時期的には把えにくい。

いずれにしても、道路幅内の細長い範囲の調査で、遺跡の全貌を掌握することはできなかったが、野幌丘陵や周辺の遺跡との関連でとらえていくと、貴重な資料を提供してくれた遺跡であるといえる。(三浦 正人)

調査区内における層堆積は、図V-2~4に示すとおりである。以下に層名を列記するが、主要な遺物包含層はⅡa-1層で、I b層からの遺物の採集も多かった。遺構の存在は、Ⅲa層ないしはⅣa層に至ってから、確認されている。

- I a層 表土、木の根、笹の根などが密生した暗褐～黒褐色土。
- I b層 耕作土。厚く盛られて整地された所もある。
- I c層 暗灰褐色土。白色火山灰(T a-a?)が流れ込み、暗褐色土に混合。
- I d層 暗赤褐色土。暗褐色土にやや多量の焼土が混合。黒色土も不整に点在。
- I e層 赤褐色焼土ブロック。少量の黒色土を不整に混合する。
- I f層 黒色土ブロック。焼土や黄褐色粘土の小ブロックを不整に点在させる。
- Ⅱa-1層 真黒色土。溶脱のためか、部分的に色調の淡いところがある。
- Ⅱb-1層 橙赤褐色焼土主体層。
- Ⅱb-2層 黒色土。部分的に少量の焼土を混合させる。
- Ⅱb-3層 赤褐色焼土主体層。
- Ⅱc-1層 黒褐色粘質土。色調淡く暗褐色がちな所もある。
- Ⅱc-2層 暗褐色粘質土。黒色がちな部分と黄褐色粘土がちな部分が不整につづく。
- Ⅲa層 褐色粘質土。漸移層。
- Ⅳa層 黄褐色粘土。やや砂質がち。

(高橋 和樹)

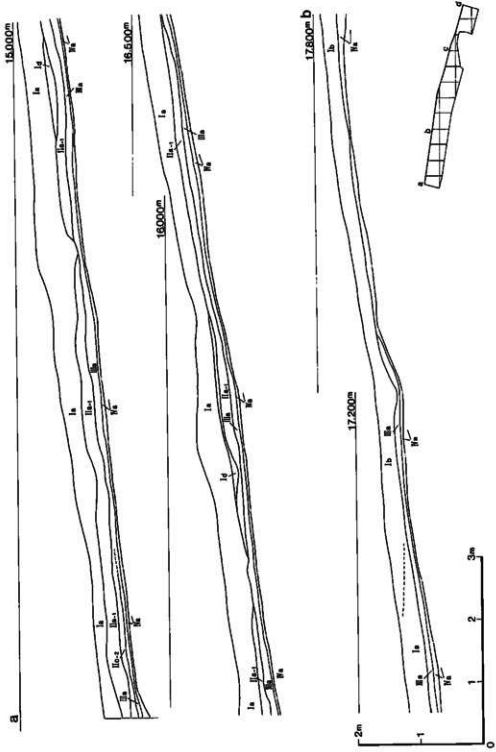


图 V-2 土层断面图(1)

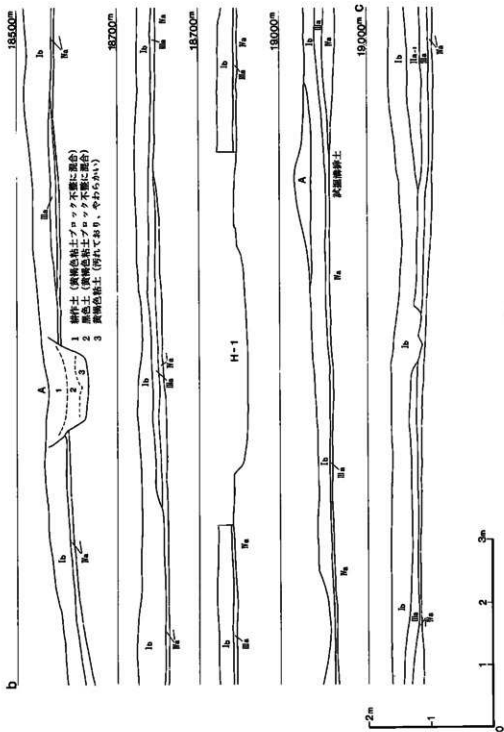
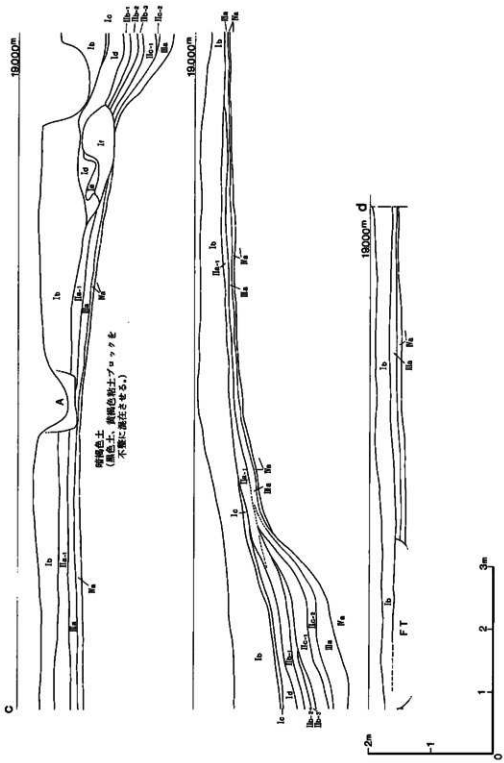


図 V-3 土層断面図(2)



図V-4 土層断面図(3)

2. 遺構

H-1

位置 16-14-c・d、16-15-a・b

規模 4.43/4.18×3.28/3.18×0.18m、面積約11.2m²（有効面積約10.3m²）

特徴 平面形は、長軸を北東に向けた不整な卵形。

IV層に浅いが明瞭に掘り込まれている。床面は、周囲よりやや固くしまっている。西壁辺には、平坦なベンチ状の段を有しており、ここの壁面のみ、ゆるい傾斜で、住居外へ移行する。

北壁側の卵形ピットは、底面が固くしまっている。壁面はやわらかく、確定しにくかった。ピット内から検出される土器片と床面の土器が接合することなどから、このピットは住居に伴うものである。

炉は、付属ピットの西側、住居中央から北寄りの、若干赤変した床面部分が、それであろう。

柱穴は、住居内にPH-1～7の7本、外周にPH-8～19の12本を確認した。口径や深さにばらつきはあるが、PH-1・7・5の3本とPH-2・3・4の3本、計6本が形態や配置から支柱穴と考えられる。PH-6や17・18・19は入口施設と考えることもできよう。柱穴の計測値は表V-2に示してある。

（三浦 正人）

遺物 図V-5に示すように、遺物は、住居跡の北東部に偏在する傾向が認められ、空間利用の一端が窺われる。

土器は、同一個体に属する破片が、床面およびピット内、そして覆土中と分れて検出された例も少なくないが、確実に床面やピット内から得られた資料から、構築時期を決定できる。

図V-6：1～18は、焼成の堅緻な、薄手のI群b-2類土器である。器形は、口縁部が僅かに外反し、平底の底部がやや外側に張り出す深鉢形で、撚りの異なる2本の原体を回転押捺させた羽状縄文を地文としている。

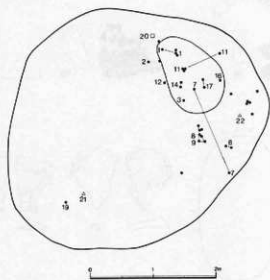
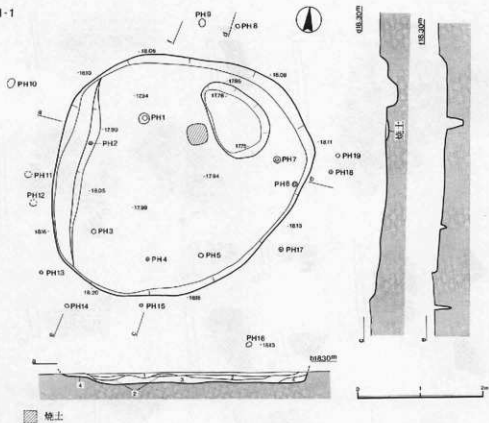
1～6は、同一個体と判断されるもので、口唇部にも縄文が加えられ、底部の縁辺には、約3cm間隔で削り取られた刻みがみられる。色調は黄赤褐色から赤茶褐色を呈し、表裏ともに黒色炭化物の付着した部分が多い。

7～10も同一個体で、口唇部はほぼ平坦につくられ、口唇直下および胴半部、胴下部にそれぞれ地文を重ねて付加された、2本単位の貼付文がみられる。貼付文には、丸棒状工具の側面による刻みが連続して加えられている。表裏ともに黒色炭化物が付着し、黒灰褐色がち。

11～14は同一の、やや小型の土器。口唇部はほぼ平らで、色調は黄赤褐色を呈する。裏面には、一面に黒色炭化物が付着している。

15・16は、横環させた貼付文の上下に、縄端部による刻みを、噛み合うように連続して押圧した例である。表裏ともに黒灰褐色を呈する。

H-1



- 1 黒色土
- 2 暗褐色粘質土 (ローム粒を含む)
- 3 褐色土 (ロームブロックを含む)
- 4 黄褐色土 (崩壊土)

- 土器
- △ フレイク
- たたき石
- 接合関係

図V-5 H-1と遺物出土位置図



图V-6 H-1の出土遺物

17・18は同一個体の底部片で、色調は灰黄褐色がら。底部縁辺には刺り込みがみられる。

19は覆土中に見出されたⅢ群b-1類土器で、口縁部肥厚帯上には、半截竹管による2段の刺突文列が並んでいる。暗赤茶褐色を呈し、内面は滑沢に調整されている。(高橋 和樹)
時期 床面やピット内出土の土器から、縄文時代早期後半に営まれたものといえる。

(三浦 正人)

P-1

位置 17-13-c

形態 平面形は卵形で、長軸方向はN-Sである。

IV層にほぼ垂直に掘り込まれている。底面は平坦である。

遺物はない。

(三浦 正人)

P-2

位置 14-14-c

形態 平面形は、長卵形を呈す。長軸はS E-NWを向く。

IV層にほぼ垂直に掘り込まれている。底面は、きわめてゆるやかな皿状を呈する。

遺物は覆土から土器片と石器が検出された。

遺物 1は縄文早期の底部破片。2・3は後期の胴部破片。4は尖頭部をもつ片面加工のスクレイパー。メノウを素材にしている。5は黒曜石のフレイクチップ。使用痕はない。

(三浦 正人)

P-3

位置 16-14-d、H-1の北西に隣接する。

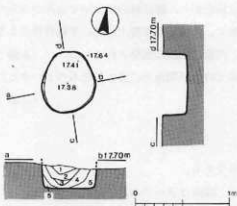
形態 平面形は、卵形。長軸は、W-Eを向いている。

IV層に皿状に浅く掘り込まれた土坑である。

遺物はない。H-1とは近接しすぎており、関係がないものと判断した。

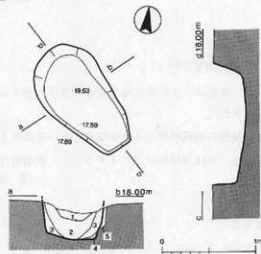
(三浦 正人)

P-1

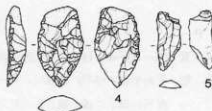


- 1 赤褐色粘質土 (焼土)
- 2 黒色砂質土
- 3 茶褐色土 (ロームを含む)
- 4 黒褐色粘質土 (少量のロームを含む)
- 5 暗茶褐色砂質土 (崩落土)

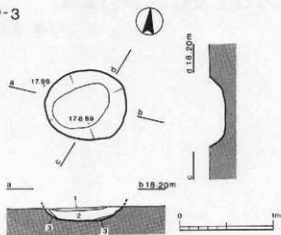
P-2



- 1 黒色砂質土
- 2 暗茶褐色砂質土 (少量のロームを含む)
- 3 茶褐色土 (崩落土)
- 4 黄褐色粘質土 (少量の1を含む)
- 5 暗黄褐色土 (攪乱)



P-3



- 1 黒色土
- 2 暗褐色粘質土 (ローム粒を含む)
- 3 褐色土 (ロームブロックを含む)

図V-7 P-1・P-2・P-3

遺構名	位 置	平面形	長軸方向	確認面(m) 長径×短径	溝底部(m) 長径×短径	深さ(m)
H-1	$\frac{16-14-a}{16-14-b} : \frac{a}{b}$	不整卵形	N-50°-E	4.43×3.28	4.18×3.18	0.18
P-1	17-13-c	卵形	N-18°-E	0.67×0.56	0.65×0.52	0.26
P-2	14-14-c	長卵形	N-31°-W	1.28×0.68	1.11×0.48	0.34
P-3	16-14-d	卵形	N-45°-E	0.86×0.74	0.64×0.43	0.14

遺構名	図番号	名称	分類	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	数量
H-1	1・2	土器	I b-2	床						1
H-1	3~6	土器	I b-2	Pit内						4
H-1	7~9	土器	I b-2	床						3
H-1	10	土器	I b-2	Pit内						2
H-1	11・12	土器	I b-2	床						2
H-1	13	土器	I b-2	Pit内						1
H-1	14	土器	I b-2	覆土						1
H-1	15・16	土器	I b-2	床						2
H-1	17	土器	I b-2	Pit内						1
H-1	18	土器	I b-2	覆土						1
H-1	19	土器	III b	覆土						1
H-1		土器	I b-2	覆土						19
H-1		土器	IV	覆土						1
H-1		土器	VI	覆土						3
H-1		土器	不明	覆土						6
H-1	20	たたき石		覆土	8.9	8.1	4.4	450	And.	1
H-1	21	フレイク		覆土				3.4	Obs.	1
H-1	22	フレイク		覆土				1.6	Sh.	1
H-1		フレイク		覆土				0.2	Sh.	1
P-2	1	土器	I b-2	覆土						1
P-2	2・3	土器	IV a	覆土						2
P-2		土器	IV a	覆土						10
P-2	4	スライマー		覆土	4.4	2.4	1.1	9.6	Aga.	1
P-2	5	フレイク		覆土				1.6	Obs.	1
P-2		フレイク		覆土				3.8	Obs.	9

表V-1 遺構規模と出土遺物一覧表

名称	確認面(cm) 長径×短径	溝底部(cm) 長径×短径	深さ (cm)	備 考	名称	確認面(cm) 長径×短径	溝底部(cm) 長径×短径	深さ (cm)	備 考
付属ビット	135×89	128×70	17		PH-10	15×7		17	住居側にやや傾斜
PH-1	20×18	9×8	31	直立	PH-11	12×9		16	住居側に傾斜
PH-2	8×6	2×2	10	直立	PH-12	11×10		-	
PH-3	9×8		11	直立	PH-13	6×5		12	
PH-4	6×6	2×2	21	直立	PH-14	7×5		26	直立
PH-5	9×7		19	直立	PH-15	6×5		-	
PH-6	9×7	5×4	29	直立	PH-16	11×8		7	住居側にやや傾斜
PH-7	13×9	5×4	35	直立	PH-17	8×7	2×2	-	
PH-8	7×7		28	直立	PH-18	6×6	2×2	30	
PH-9	13×11		-	住居側に傾斜	PH-19	8×6		-	

表V-2 付属ビット・柱穴一覧表

3. 遺物

(1) 土器

発掘区から得られた土器片は約1,500点で、内訳はⅠ群土器が3%弱、Ⅲ群土器が約21%、Ⅳ群土器が43%程、そしてⅥ群土器が約33%であった。

Ⅰ群土器 (図V-8: 1~7)

Ⅰ群土器はその大部分がⅠ群b-2類土器を伴出した住居跡(H-1)の周辺、すなわち16~17-14~15区から検出されており、本来的にはH-1に関連した遺物が四散したものと思われる。いずれもやや薄手で、焼成は堅緻、黄灰褐色から黄茶褐色がちな色調を呈する。

1は口唇部に縄文による押圧があるもので、口唇直下に横位の貼付文が剥落したらしい痕跡が残されている。2には丸棒状工具の側面を押した刻みのある、やや太めの貼付文がみられる。3はH-1出土の図V-6: 7~10と、4・5は同図15・16とそれぞれ同一個体と思われる。6は、撚りの異なる2本の原体による羽状縄文の施された胴部片。

Ⅲ群土器 (図V-8: 8~30)

Ⅲ群土器はその大半がb類に属するもので、調査区の中央16-13~14区一帯に濃密な分布が認められ、東西の両端、10-14~15区、21-14区付近でも多出した。

8は赤茶褐色を呈する、やや小型の口縁の肥厚した土器で、Ⅲ群a類に含まれよう。

9~14は口縁部肥厚帯に加えられた、竹管を利用した刺突列などが特徴的なb-1類土器で、波状口縁を呈するものが多く、裏面は比較的丁寧に調整されている。口縁突起部は一段と厚くつくられ、連続刺突文列の刻まれた貼付帯が付加されている。10の肥厚帯上には、縦位に粘土瘤を貼付し、左右に2列ずつ、横方向の刺突を加えている。11には縦に引かれた2本の沈線文がみられ、14には円形の刺突文が並んでいる。15~17はやや後出する可能性のあるもので、15は口縁部に肥厚帯がなく、半截竹管の内面を長めに押し引いた沈線文様を有し、裏面にも縄文がみられる。16に加えられた刺突は縄端によるもので、17のそれは径の小さな竹管状工具によるものである。18には半截竹管の内面による平行沈線文が引かれている。

竹管や縄によって刻みの加えられた貼付帯がみられる19~21は、b-2類に含めうる資料と思われる。22~24、26はⅢ群土器の胴部片で、23はa類に、26はb-3類に属する可能性が高い。25の底部は、b-1類のものであろう。

27~30は円形刺突文の記されたb-3類土器の口縁片で、口唇部の丸いものと、断面三角状の肥厚帯が顕著にみられるもの二者がある。28は内面にも、小さな平篋状工具によるらしい、ややぞんざいな押し引き列が加えられている。

Ⅳ群土器 (図V-8: 31~35、図V-9: 36~45、図V-10: 46~55)

Ⅳ群土器は前葉のa類に含まれるものが圧倒的に多く、それらは調査区の中央16-14区一帯に分布が濃く、東端の10~11-14~15区、西端の20~21-12~13区がこれに次ぐという、Ⅲ群土器の分布にも共通する傾向が認められる。b類土器は少なく、20-13区など西方に偏在した。

31~44はa類のうち糸市式系のもので、平縁の口縁部には肥厚帯がめぐり、胴部にも貼付帯

を横擦させるのが通例である。色調は黄灰褐色がちで、堅く焼かれ、胎土には多量の砂礫が含まれている。31には円形刺突文の一部が残存している。36の肥厚帯には、斜格子状に重ねられた縄文がみられる。44は底面にも縄文の施されている例である。

45・46は手稲砂山式に含まれるもの。45は頸部が僅かにくびれて口縁部がやや大きく外反する深鉢形土器で、底部は外側にやや張り出している。口縁には山形の小突起がみられ、その頂部に楕円状の押圧が加えられている。地文の縄文は、施文後の器面調整のため潰れがちで、縄文は口縁部内面にもみられる。46は縄線文の付された貼付帯と、半截竹管の内面を引いた弧状の沈線文とがみられるものである。47～53は入江式までのIV群a類に属するもので、47・48はやや太めの沈線によって文様が描かれたもの。49・50には細めの沈線による、楕円状や渦巻状の曲線文様があり、51・52にはクランク状や矩形の直線的な文様がみられる。53は磨消手法による弧状の文様が展開されたもの。

54はゆるやかにやや大きく外反する口縁部の破片で、口唇上や内面にも縄文がある。山形状に重ねられた沈線文をもち、平行沈線文に区画された頸部に無文帯がめぐるもので、IV群b類土器のうちウサクマイC式に類例が求められる。55は無文小型の、IV群土器の底部。

VI群土器 (図V-10: 56~87)

56は、内面に突瘤をつくる円形刺突文が、現存3個並ぶもので、縄文初期頭の土器。後北式ではないVI群土器の稀少な例である。17-13区に見出されたもの。

残るVI群土器の大部分が後北式に属する資料で、調査区の中央部14~18-13~15区にかけての一带に、分布の集中がみられた。

57~79は、爪形状の刻みを密に加えた、いわゆる擬縄貼付文と、横位主体の爪形状の刺突文列などによって基本的なモチーフが構成される土器群で、ほぼ後北B式の範疇に含まれるグループである。口縁部が小さく外反し、口唇部は細めにつくられ、裏面は平滑に調整されている。

57・58は刺突文列と横帯縄文に加えて、小波状の沈線文や直線状の沈線文がみられるもの。

59は頂部に溝の刻まれた2個一対の小突起がある口縁片で、口唇部にも刻みが並び、やや太めの2本の擬縄貼付文と都合5段の刺突文列、そして縦位の短い貼付文の付加がみられる。

60~62は、斜位の短刻線が並列されたもの。62~67には縦位や菱形に配された擬縄貼付文と、刺突文列に縁取られた横帯縄文がみられ、68~70の現存部には、貼付文はない。

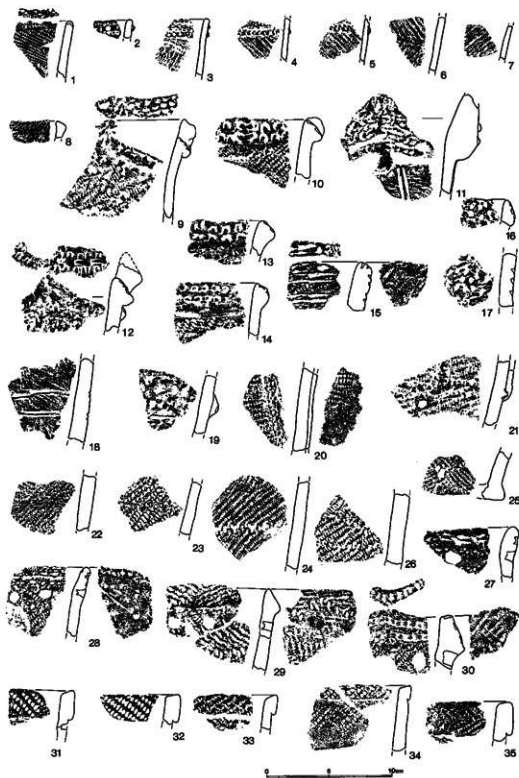
71~74は平行する数段の擬縄貼付文と、斜位の擬縄貼付文などがみられるもので、貼付文間はそれぞれ竹管状工具の外側によってなでられており、沈線文的な効果が認められる。

75~79は、体上半部一帯に、細めの擬縄貼付文を菱形に展開させ、無文の貼付文間に刺突文列を配するもの。75には、沈線も添えられている。79は壺形を呈するもので、最下段の刺突文列の爪形は、横向きに直線的に繋がれている。80の擬縄貼付文は、楕円状に重ねられている。

81・82は、微隆起線による弧線文のみられる後北C₁式土器。器形などは、これまでと大きな差はない。81の刺突文列は、横位の爪形を破線状に連続させている。

83~85は縦走する帯縄文があるもので、85の原体は無節。86・87は、搗底の底部片である。

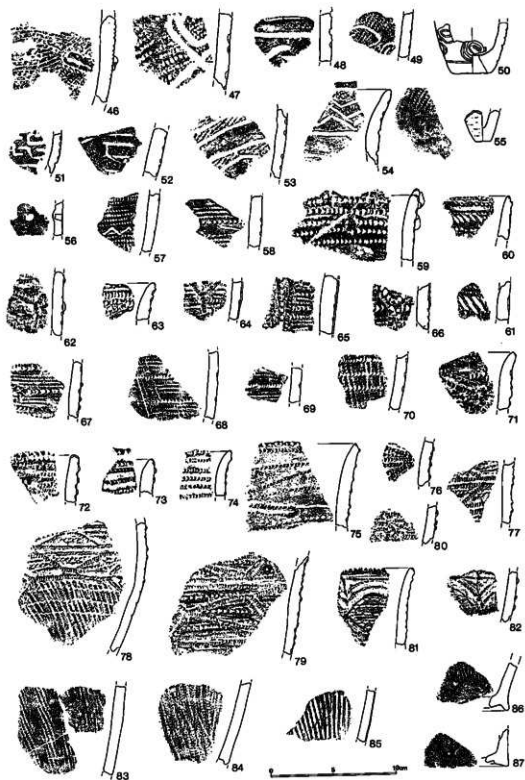
(高橋 和樹)



图V-8 土器(1)



图V-9 土器(2)



图V-10 土器(3)

(2) 石器

包含層からは、総数 500点の石器、剥片・石屑（フレイク・チップ）、礫等が出土した。このうち石器は 102点で、全体の24%である。器種別では、石鏃（9%）、やり先（8%）、スクレイパー（14%）、石斧（45%）、たたき石（3%）、砥石（15%）、石皿（4%）、台石（2%）が出土しており、石鏃、つまみ付ナイフ、すり石等は見られない。以下、各器種ごとに説明し、出土地点・規格・石質等を表V-3に掲げる。

石鏃（図V-11：1～7）

9点出土しており、7点図示した。全例黒曜石を素材とした有茎鏃であるが、基部が明瞭なもの（1～4）と不明瞭なもの（5～7）に分けられる。二次加工は、1～6が両面加工で、7のみ裏面に大きな素材面を残している。

やり先（図V-11：8～15）

全例図示した。いずれも石鏃より大型で、基部が太く、断面が肉厚である。逆刺部の状態から、張り出しの弱いもの（8～12）と強いもの（13～15）に分けられる。石質は、全例黒曜石。スクレイパー（図V-11：16～27）

14点出土したうち、12点を図示した。縦長で両面加工のもの（16）、片面加工のもの（17）、片面の側縁部のみ刃部が作出されているもの（18～24）と、刃角が大きくエンドスクレイパーと考えられるもの（25～27）とがある。石質は17・18が硬質頁岩、他は全て黒曜石である。

石斧（図V-12：13：28～38）

石斧片を含め46点出土したが、図示できたものは11点である。これらは、擦り切り痕を残すもの（28）、剝離調整と全面研磨が施されているもの（29～36）、未製品（37・38）に分けられる。28は擦り切り痕と剝離調整痕を残した全面磨製の石斧で、刃部は直刃である。29も刃部を一部欠損しているが、直刃で、基部は尖頭状になる。30～33・35は基部を欠損しているが、どれも剝離調整後に研磨されたもので、横断面は31・32が若干凸状となり肉厚であるが、他は扁平である。刃部は全て円刃である。34も剝離調整後に入念な研磨が施されたものだが、刃部は直刃で、横断面はカマボコ型である。36は、研磨後に剝離調整が施されているが、火バネの痕跡が見られることから再加工のものと考えられる。37・38は板状の自然礫の周辺を剝離調整したもので、研磨痕および刃部の作出が見られない。石質は、28～31・33・36～38が泥岩、32・34・35が片岩である。

たたき石（図V-13：39～41）

全例図示した。39は板状礫を素材とし、両面に敲打痕が見られる。40は棒状礫の一端に、41は両面に凹状の敲打痕を残している。石質は、全て安山岩である。

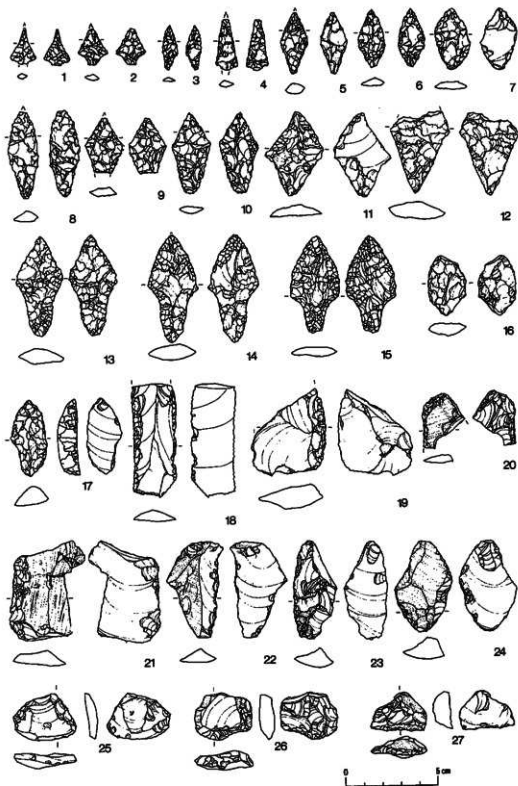
砥石（図V-13：42）

1点のみである。砥面は2ヵ所に見られるが、砂岩製で欠損面が多いため形状が不明瞭である。

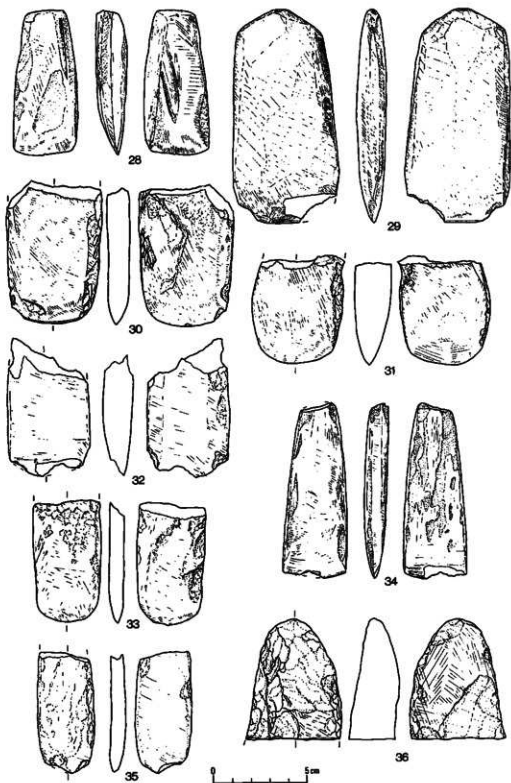
石皿（図V-13：43・44）

どちらも破損品であるが、自然礫の一面を使用している。

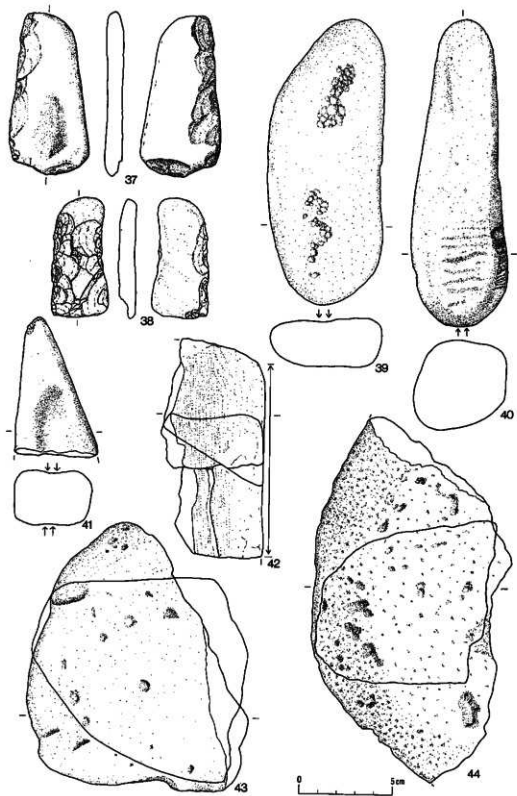
（森岡 健治）



圖V-11 石器(1)



圖V-12 石器(2)



圖V-13 石器(3)

図番号	グリッド	層位	名称	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	材質	備考
1	17-14	I	石 鏃	(2.0)	1.4	0.4	(0.6)	Obs.	基部欠損
2	表 採	-	石 鏃	(2.0)	1.5	0.4	(0.9)	Obs.	先端部、基部欠損
3	17-14	I	石 鏃	2.3	0.8	0.2	0.4	Obs.	
4	16-15	I	石 鏃	(2.7)	1.2	0.5	(1.1)	Obs.	先端部、基部欠損
5	16-15	I	石 鏃	3.3	1.5	0.5	2.2	Obs.	
6	17-13	II	石 鏃	3.0	1.4	0.5	1.9	Obs.	
7	10-14	II	石 鏃	3.2	1.9	0.4	2.3	Obs.	
8	16-14	I	やり先	(4.5)	1.6	0.8	4.3	Obs.	先端部欠損
9	15-14	I	やり先	(2.9)	2.0	0.7	(3.2)	Obs.	基部欠損
10	16-14	I	やり先	4.3	2.1	0.5	3.5	Obs.	
11	20-13	I	やり先	4.4	3.1	0.7	6.5	Obs.	
12	18-13	I	やり先	(4.3)	3.2	(1.0)	(10.4)	Obs.	先端部欠損
13	表 採	-	やり先	5.4	2.5	0.8	7.5	Obs.	
14	10-15	II	やり先	5.7	2.7	0.9	9.7	Obs.	
15	10-15	II	やり先	5.2	2.7	0.6	7.6	Obs.	
16	14-14	I	スチール	3.2	2.1	0.8	4.8	Obs.	
17	16-15	I	スチール	4.0	1.9	1.0	7.4	Ha-Sh.	
18	10-15	II	スチール	(6.0)	2.3	0.7	(11.3)	Ha-Sh.	上部欠損
19	17-13	I	スチール	(4.6)	(4.0)	1.2	(16.4)	Obs.	上部欠損
20	表 採	-	スチール	(3.0)	(2.3)	0.5	(2.8)	Obs.	側縁部、下部欠損
21	10-14	II	スチール	5.0	4.2	0.7	15.4	Obs.	
22	10-14	II	スチール	5.1	2.8	1.3	10.8	Obs.	
23	10-14	II	スチール	5.2	2.3	1.2	10.0	Obs.	
24	11-15	II	スチール	4.8	3.2	1.7	14.0	Obs.	
25	17-14	I	スチール	2.5	3.4	0.7	5.6	Obs.	
26	11-15	II	スチール	2.5	3.1	0.9	7.3	Obs.	
27	15-15	I	スチール	2.1	3.0	1.0	5.3	Obs.	
28	16-13	I	石 斧	8.6	3.4	1.6	66.4	Gr-Mud.	
29	表 採	-	石 斧	11.3	5.6	1.5	(148.2)	Bl-Mud.	刃部一部欠損
30	17-14	I	石 斧	(7.5)	5.1	1.1	(82.9)	Gr-Mud.	基部欠損
31	10-15	II	石 斧	(5.7)	4.8	1.8	(75.3)	Gr-Mud.	基部欠損
32	表 採	-	石 斧	(7.3)	4.3	1.5	(73.2)	Sch.	基部欠損
33	20-13	II	石 斧	(6.5)	3.6	0.8	(34.9)	Gr-Mud.	基部欠損
34	17-14	I	石 斧	9.2	3.4	1.2	64.5	Bl-Sch.	
35	10-15	II	石 斧	(6.5)	3.0	0.8	(31.2)	Sch.	基部欠損
36	17-14	I	石 斧	(6.5)	(5.1)	2.8	(117.7)	Gr-Mud.	先端部欠損
37	21-13	II	石 斧	8.4	4.2	0.9	55.8	Gr-Mud.	未製品
38	表 採	-	石 斧	6.4	3.1	0.8	24.4	Gr-Mud.	未製品
39	18-14	II	たたき石	15.2	6.0	3.3	422.8	And.	
40	表 採	-	たたき石	16.2	4.8	4.5	542.8	And.	
41	14-14	I	たたき石	(7.2)	(4.3)	2.9	(128.3)	And.	下半部欠損
42	20-13	I	砥 石	(11.3)	(6.4)	(3.3)	(212.7)	Sa.	破損品
43	表 採	-	石 皿	15.1	11.8	11.3	1960.0	And.	
44	20-13	II	石 皿	(19.7)	10.5	9.0	1690.0	And.	

表V-3 掲載石器一覧表

4. 小 括

西野幌13遺跡からは、竪穴住居跡1軒とピット3基が検出された。住居跡(H-1)は、I群b-2類コックロ式土器を伴う、縄文時代早期後半のものである。ピットの構築時期や性格については、不明な点が多い。

コックロ式土器のグループを伴出する竪穴住居跡は、千歳市美沢2遺跡(北海道教育委員会1987)や苫小牧市静川8遺跡(佐藤ほか1980)、静川14遺跡(渡辺ほか1984)などにみられるように、大規模な集落を形成する傾向がある。野幌丘陵においても、江別市大麻6遺跡の住居跡群は、調査区内で12軒をかぞえ(直井編1982、直井編1983)、規模の大きな部類に入れられよう。また、広島町富ヶ丘遺跡における集落跡(遠藤1978)も、近隣における、比較的規模の大きな例として、挙げられる。

一方、該期の集落跡には、札幌市S 256遺跡(上野ほか1975)や江別市大麻15遺跡(園部編1986)など、数軒単位の竪穴住居跡から成る、規模の小さな例がある。調査区が狭小で、全貌を掌握できないが、本遺跡の場合も、数軒を上限とする集落跡に含まれるものと推定される。H-1の内外から出土した、I群b-2類土器は、絡条体圧痕文の施文されたものが殆ど見当たらないなど、時間的な幅のごく限られたグループとして捉えられよう。西野幌13遺跡は、縄文早期においては、集落が次代に継承されない、一過的な拠点であったらしい。いずれにせよ、縄文時代を通じて、集落跡の検出に乏しい野幌丘陵下学田地区においては、特に貴重な資料である。

コックロ式を伴出する竪穴住居跡は、隅丸長方形や不整楕円形、不整円形といった平面形を有するものが多く、大きさは2×2m程度のごく小さなものから、長径が10mを超えるものまで、さまざまである。床面のほぼ中央に炉跡があり、皿状のピットやベンチ構造、周溝などをもつものがある。柱穴は、配列が明瞭に把握できる例は少ないようだ。これらの類例に照らしてみるならば、本遺跡のH-1は、やや規模が小さく、内部に炉や小ピットを有し、部分的にベンチ構造がみられる住居の部類に含まれる。

さて、第3節の土器の項でも触れたように、この縄文早期の住居跡が存在した16-14~15区を中心とする一帯は、その後、縄文中期後半のⅢ群b類、後期前葉のⅣ群a類、さらに続縄文期後北式のⅥ群土器の各時代にも、遺物の集中分布が認められており、先史時代の全般にわたって、人間が活動するのに、好適な立地条件に恵まれた所だったらしい。恐らく、飲用に適した、良質で、利用のしやすい湧水が、近くにあったものと思われる。草地造成による地形の改変のため、現地表面からは湧水的位置を特定できないが、19~20-13~14区にみられる小谷は、湧水からの小流が、長期間のうちに、丘陵の縁辺を削った痕跡であろう。

出土遺物は既述のとおり、土器、石器が主体で、土器では、特に縄文後期前葉の土器群や、後北B式段階の土器がまとも出土しており、これまで下学田地区では不足がちだった資料の補完が可能となった。石器は、ほぼまんべんなく各器種が揃っているが、石錐やつまみ付ナイフ、断面三角形の擦石など、縄文早期後半から前期にかけて普通にみられる器種が、見出されていない。

(高橋 和樹)



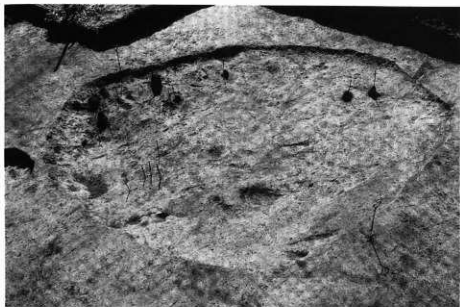
完掘（中央部）W→E



完掘（東側）E→W



調査風景



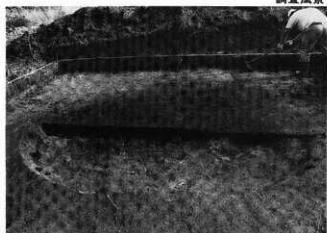
H-1



調査風景



PH-11



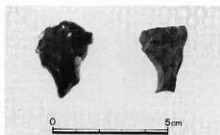
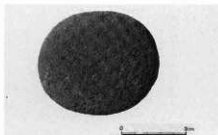
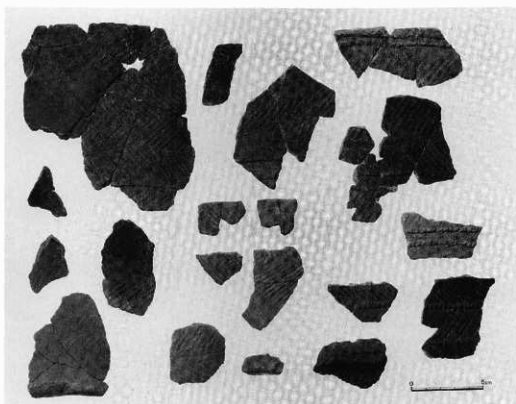
土層断面



PH-14



H-1 床面土器出土状況



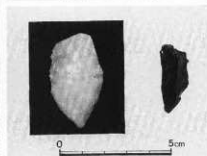
H-1 出土遺物



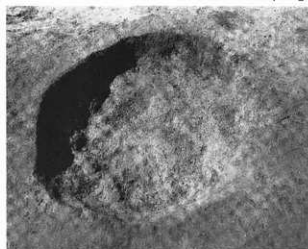
P-1



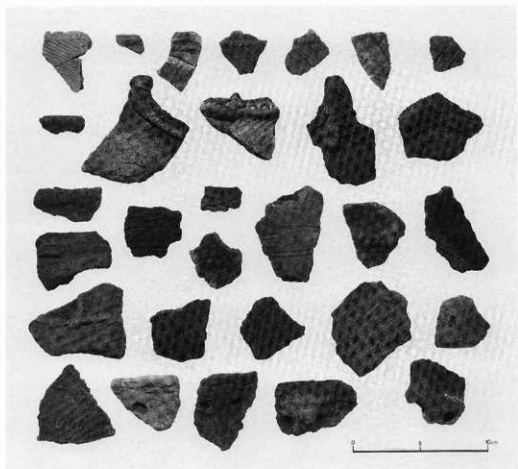
P-2



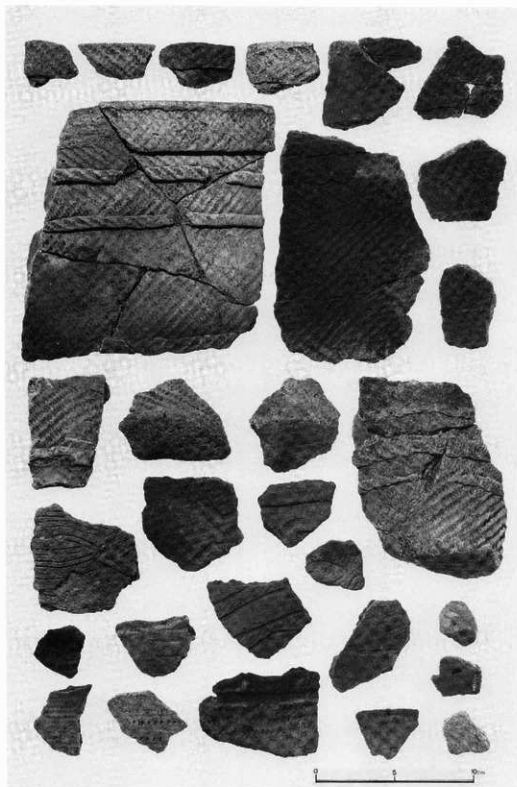
P-2の遺物



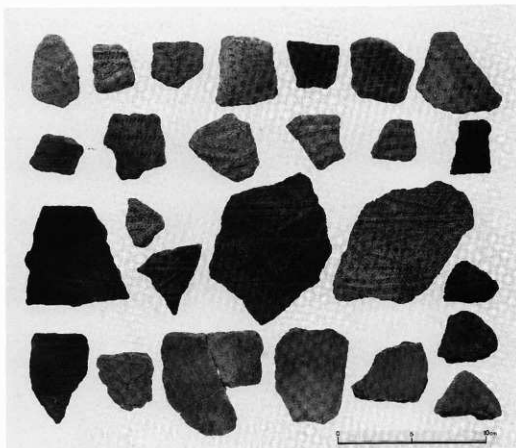
P-3



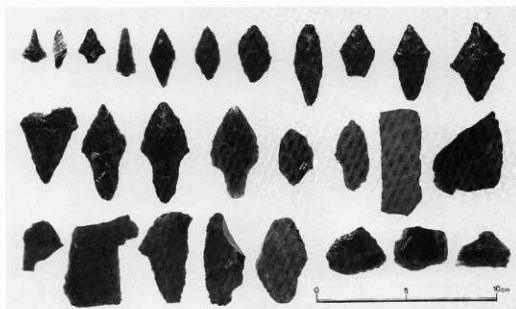
土器(1)



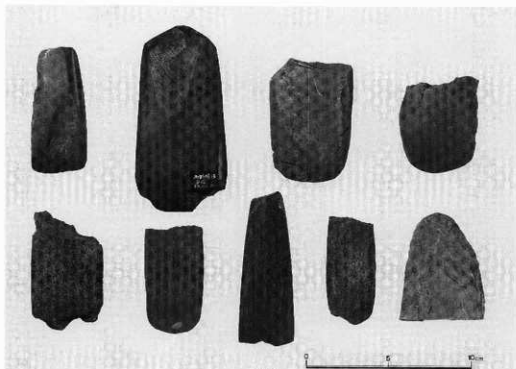
土器(2)



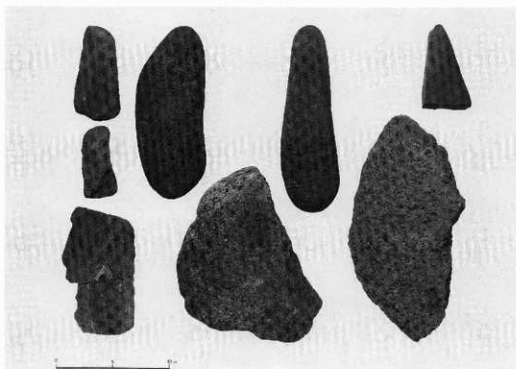
土器(3)



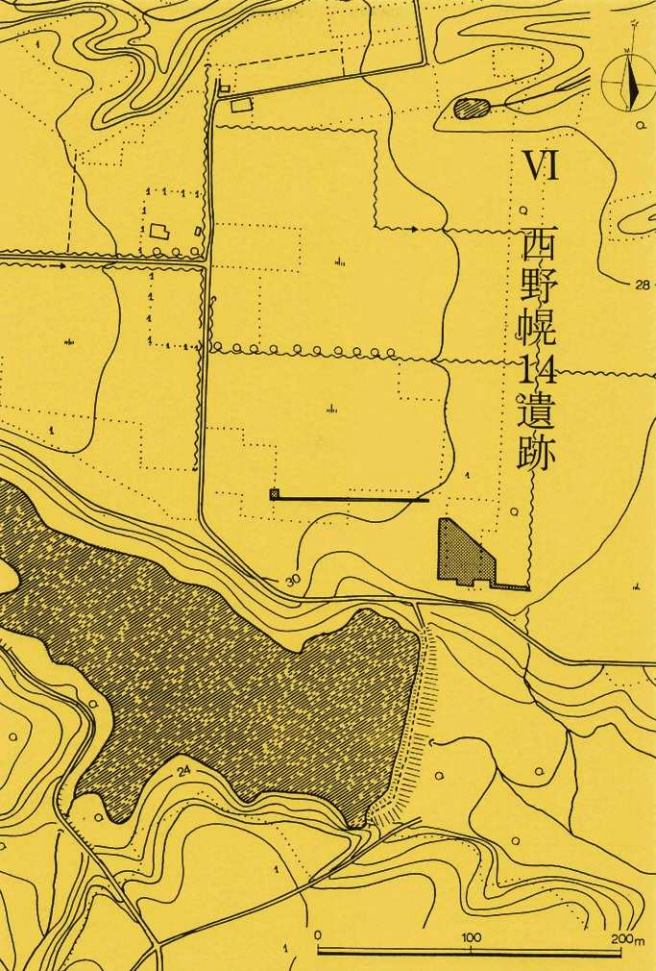
石器(1)



石器(2)



石器(3)



VI
西野幌14遺跡



28



30

2A

0

100

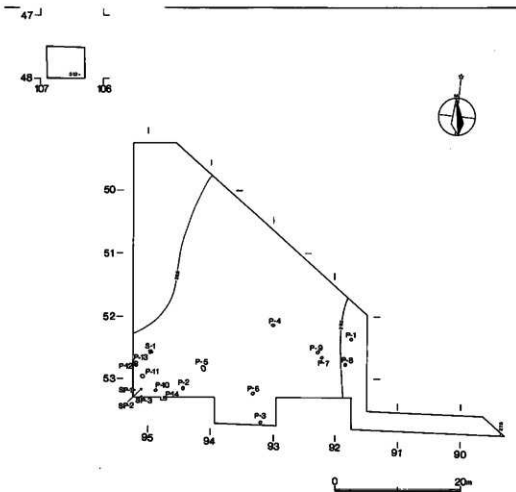
200m

VI 西野幌14遺跡

1 遺跡の概要

西野幌14遺跡は野幌運動公園用地内の西縁に位置する。地形は、北と南を浅い谷で区切られた、東に緩く傾斜する平坦面の南縁に立地する。本遺跡の南隣には東側に流れる小谷がある。現在は堰止められ（大沢第一貯水池）農業用水に供されている。

昭和59年度の調査は、ホッケー場の南東角の法面に当たる部分30m²の調査を行った。調査時は雑木林になっていたが、以前に耕作の行われた形跡がある。また、風倒木痕があり土層は攪乱されている。そのためI層（表土・耕作土）の下はIII層（漸移層）またはIV層（ローム）になる。遺構は検出されていない。出土遺物は縄文時代中期と後期・統縄文時代の土器片が29点、石器は石斧が2点と他に剥片・礫などが19点検出された。



図VI-1 遺構位置図

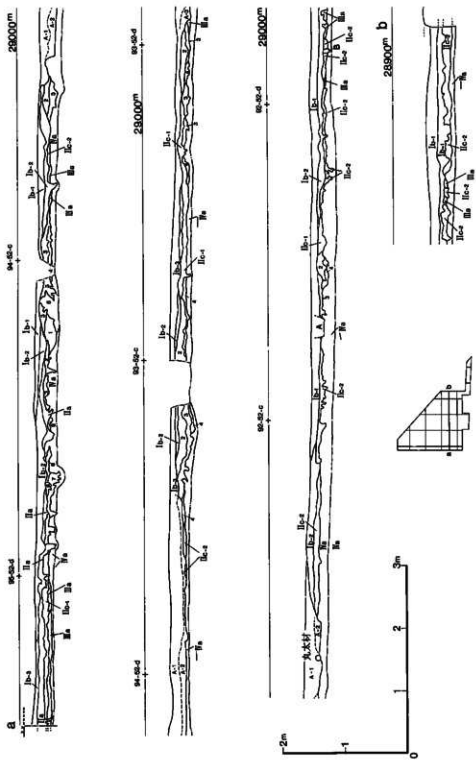
昭和62年度の調査は、駐車場敷地のうち 1,214㎡の調査を行った。調査区の東と西の縁辺は植林が行われ、その間は耕作されていた。しかし、運動公園の工事進捗にしたがい土置場に使われていた。また、至る所で風倒木痕がみられた。本来の遺物包含層であるⅡ層は僅かな範囲でのみ現存する。遺構は縄文時代晩期の所産と考えられる土壇13基・濼群1基・小ピット3基が検出された。出土遺物は縄文時代中期から晩期の土器片 4,879点、石器は剥片・礫などを含め 1,185点、他に土製品・石製品が3点と焼き粘土などが出土している。土器片のうち約97%がタンネットウL式土器に属するものである。

(谷島 由貴)

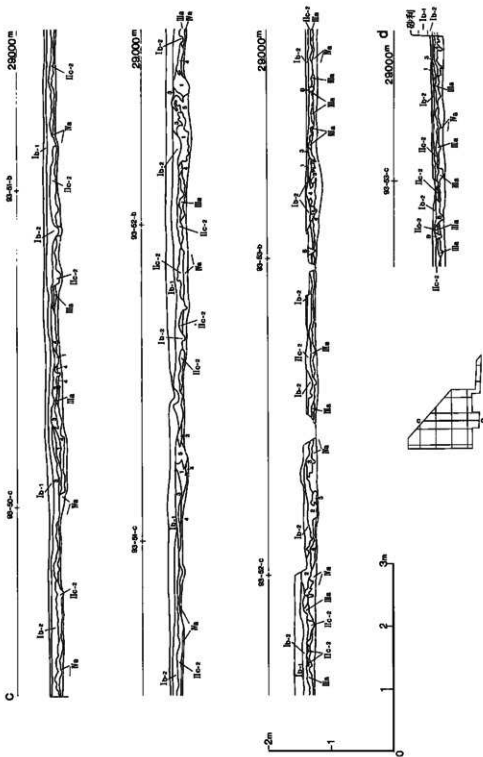
調査区内にみられた土層は、図VI—2・3に示す各層で、攪乱層が少なくない。A層はごく最近の人為的な攪乱を充填する土層で、B層は、木の根による攪乱。1～8層は、いわゆる風倒木痕に伴う攪乱層を細分したものである。

- I b—1層 暗褐色土。耕作土を主体とする盛土。粘性のやや強い汚れた土層。
- I b—2層 暗茶褐色土。湿った状態ではやや軟かな、細かく攪拌された旧耕作土。
- I b—3層 暗褐色土。もともと黒色土の薄い部分を黄褐色粘土まで耕起した旧耕作土。粘性に富み、乾くとかなり堅くしまる。
- Ⅱ a層 黒褐色土。黄褐色粘土の小ブロックを不整に混合する。やや粘性があり、湿った状態ではやや軟かい。
- Ⅱ c—1層 褐色粘質土。黒色土粒や黄褐色粘土粒を不整に混在させる、粘性が強く、かなり堅くしまっている。
- Ⅱ c—2層 暗黄褐色粘質土。黒色土粒などが不整に点在する。乾くと堅くしまる。
- Ⅲ a層 黄褐色粘質土。部分的に不整に汚れた漸移層。粘性に富み、乾くと堅くしまる。
- Ⅳ a層 基盤の粘土層で粘性に富み、乾くと堅くしまる。寒冷化に伴う擾乱や風倒木痕などのため、基盤の粘土層には不整なうねりがみられる。
- A—1層 笹根や木材片、ビニール片、黄褐色粘土ブロックなどを混在させる汚れた埋土。
- A—2層 粒の細かなベタッと粘性の強い汚れた黒褐色土が主体で、堅くしまっている。
- A—3層 暗黄褐色粘土がらの、不整に汚れた攪乱層で、堅くしまっている。
- B層 やや軟かく粘質のある黒褐色土が主体で、黄褐色粘土が若干混入している。
- 1層 真黒色土。部分的に黄褐色粘土ブロックを点在。粘性があり、堅くしまる。
- 2層 黒色粘質土。黄褐色粘土粒を若干混在させ、乾くと堅くしまる。
- 3層 黒褐色粘質土。黄褐色粘土粒の混合やや多い。粘性強く、堅くしまりがち。
- 4層 褐色粘質土。黄褐色粘土の混在が多い。粘性に富み、堅くしまっている。
- 5層 黄褐色粘土。マウンド状の盛りあがりを見せる。白灰色がちに明るい粘土層。
- 6層 暗灰褐色粘質土。全体に溶脱が進んだ感じの層で、やや軟かく、粘性がある。
- 7層 灰褐色粘質土。やはり溶脱された感の強い層で、やや堅くしまっている。
- 8層 淡灰褐色粘土。シミ状にぼやけた汚れが残る粘土層で、やや堅くしまっている。

(高橋 和樹)



圖VI-2 土層断面図(1)



图VI-3 土層断面图(2)

2 遺構

本遺跡からは、土壇14基、薬群1基、小ピット3基が検出された。これらは調査区の南半部に偏在している。

P-1

91-52-b。

平面形は円形。墳底は平坦で、急角度に壁が立ち上がる。

遺物 1の土器は三分割され重なった状態で墳底から検出された。無文で小型の浅鉢である。一個体の約2/3現存する。2は覆土から検出された胴部破片。ともに晩期の土器である。

P-2

94-53-a。

プランは北側約1/3が攪乱のために確認できなかったが、円形と推定される。墳底の断面形は丸く壁は緩やかに立ち上がる。

遺物 壁ぎわと中央部の覆土から土器片が検出された。1は斜行縄文、2は縦走する縄文を施した胴部破片。ともに晩期の土器片である。

P-3

93-53-d。

プランは南北にやや長い不整形。墳底の断面形は丸く壁は緩やかに立ち上がる。

遺物 1は覆土の上部から下部にかけて検出された。このうち、上部で検出されたものは耕作時に攪乱され元の状態を保っていない可能性が強い。口唇から口縁部に刻みがみられ、その下に4本の横走する平行沈線が施されている。1個体の約1/4が現存する。2は口唇部の内と外、交互に刻みがみられる。口縁部外側に円形刺突が加えられ、その下に沈線が施されている。3～6は地文に斜行縄文を施した胴部破片。すべて晩期の土器である。

P-4

92-52-b・93-52-a。調査区の中央部に位置しており他の土壇から離れている。

プランは不整形円形。墳底の断面形は丸く壁は緩やかに立ち上がる。

遺物 1は覆土から検出された晩期の胴部破片である。

P-5

94-52-d。

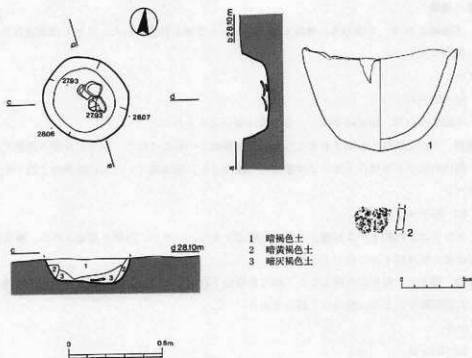
プランは楕円形。墳底はほぼ平坦で、緩やかに壁が立ち上がる。調査区内の他の土壇と異なり規模が大きい。またこのようにはっきりした楕円形の土壇は他に検出されなかった。覆土2層中で炭化物を検出した。遺物は検出していない。

P-6

93-53-a。

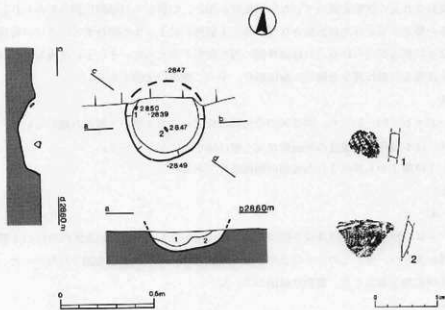
平面形は東側が木の根による攪乱を受けているが、円形と推定される。墳底の断面形は丸く、壁は緩やかに立ち上がる。

P-1



- 1 暗褐色土
- 2 暗黄褐色土
- 3 暗灰褐色土

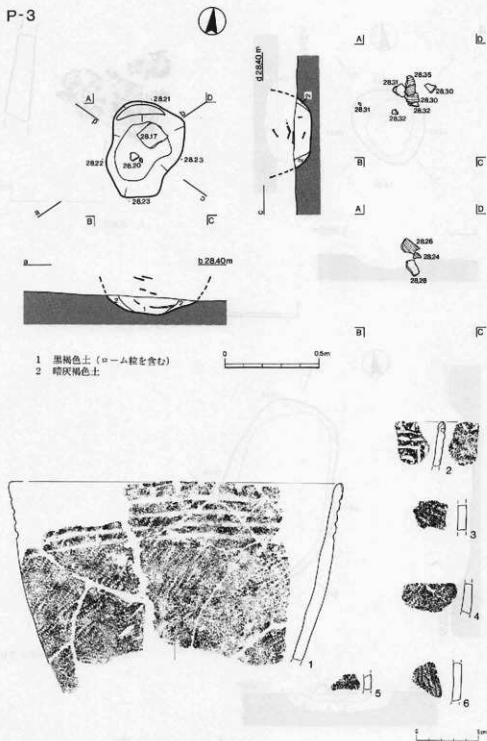
P-2



- 1 黒色土
- 2 暗褐色土 (ワーム粒を含む)

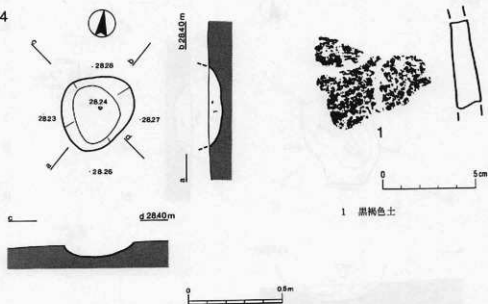
図VI-4 P-1・P-2

P-3



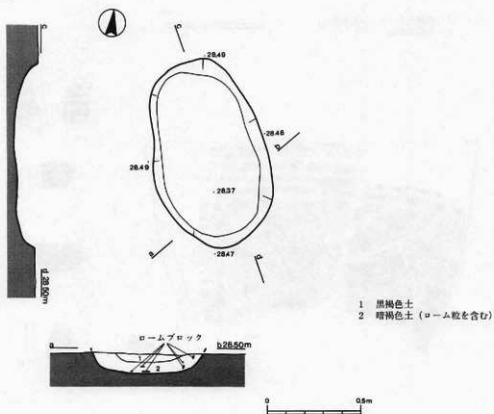
図VI-5 P-3

P-4



1 黒褐色土

P-5



1 黒褐色土
2 暗褐色土 (ローム粒を含む)

図VI-6 P-4・P-5

遺物 1は覆土から検出された。地文に縦走縄文の施された晩期の胴部破片。

P-7

92-52-d。P-9に隣接している。

ブランは円形。墳底の断面形は丸く、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物 1は覆土から検出された。口唇部に突起を有し地文と同じ斜行縄文を口唇に施している。晩期の鉢型土器である。

P-8

91-52-c。

ブランは円形。墳底はほぼ平坦で、緩やかに壁が立ち上がる。南東側に木の根による攪乱がみられる。

遺物 1は覆土から検出された黒曜石の焼けたフレイクチップ。使用痕はない。

P-9

92-52-d。P-7に隣接している。

ブランは円形。墳底はほぼ平坦で、緩やかに壁が立ち上がる。

遺物 1は覆土から検出された晩期の口縁部破片。

P-10

94-53-b。

ブランは円形。墳底の断面形は丸く、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物 1は覆土から検出された中期の胴部破片。周囲の包含層に中期の土器片が数点出土していることから、覆土に混入したものと推定される。他に黒曜石のフレイクチップが2点検出された。

P-11

95-52-d。

ブランは円形。墳底はほぼ平坦で緩やかに壁が立ち上がる。西側の風倒木痕から焼けた礫が検出されているが、土壌との関係は不明である。

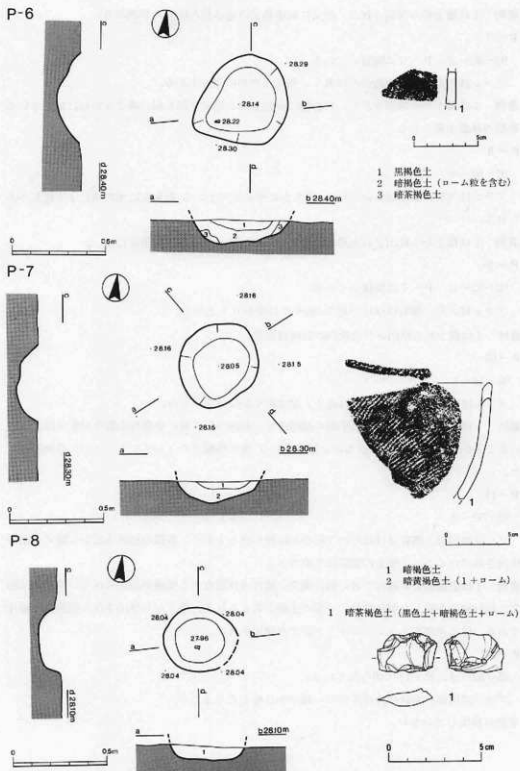
遺物 1は突起部分の破片で表に斜行縄文、裏はほぼ縦走する刻線が加えられている。2は地文に斜行縄文を施した胴部破片。小型の土器と考えられる。覆土から検出された晩期の土器片である。他に黒曜石のフレイクチップが2点検出された。

P-12

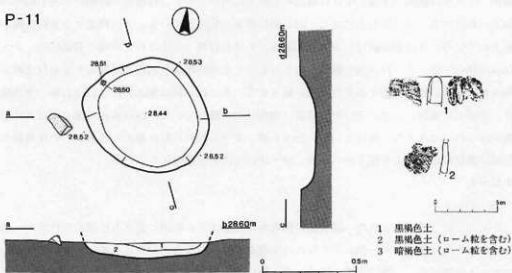
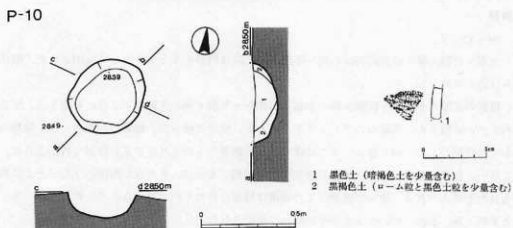
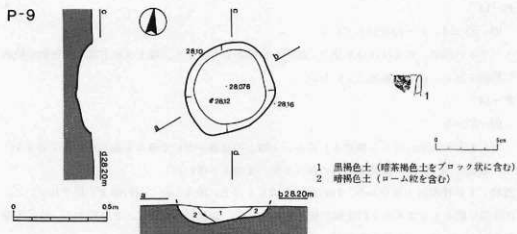
95-52-d。P-13に切られている。

ブランは円形。墳底はほぼ平坦で、緩やかに壁が立ち上がる。

遺物は検出していない。



図VI-7 P-6・P-7・P-8



図VI-8 P-9・P-10・P-11

P-13

95-52-d。P-12を切っている。

プランは円形。墳底はほぼ平坦で、緩やかに壁が立ち上がる。覆土3層上部に炭化物が粒状に検出された。遺物は検出していない。

P-14

94-53-b。

平面形は楕円形になると推定されるが、土壌との認識が遅れ正確な平面形が把握できなかった。墳底に凹凸があり確認面からの深さが他の土壌より浅い。

遺物 1は晩期の土器である。口唇部は内切しその上に地文と同じ斜行縄文が施されている。口縁部は横走する3本の平行沈線が加えられている。底部以外の約1/2現存する。他に黒曜石のフレイクチップが検出された。

礫群

94-52-c。

土器・石器・礫が直径約70cmの同一平面上に、ほぼ円形のまとまりとして検出された。掘込みは認められなかった。

Ⅲ群の土器片が1点・Ⅳ群a類の土器片が10点・Ⅴ群c類の土器片が7点、石槍1点、すり石1点、石錘1点、黒曜石のフレイクチップ1点、焼けた礫5点、礫8点が出土した。後期のものは晩期のものと同一面か、または礫の上など晩期のものよりやや高い位置で検出された。これら、後期前葉の土器片は礫群の構築された時期、または、その後周囲の土などと共に移されたと考えられる。従って晩期にこの遺構は構築されたものと考えられる。Ⅳ群a類(9)とⅤ群c類、石槍(19)各1点がやや離れて検出された。

遺物 1～5は晩期の土器。1は口唇部の突起上に刻みがあり、口縁部に内側から円形刺突が加えられている。2は口唇上に地文と同じ斜行縄文が施されている。3は横走する並行沈線が施されている。4は胴部破片。5は底部破片。6は斜行縄文の施された中期の胴部破片。7～16は後期の土器。7～11は同一個体と考えられる。乙字状沈線と斜行又は横走する並行沈線が施されている。12は横走する平行沈線が施されている。13～16は胴部破片。17は石槍の茎部破片。黒曜石を素材にしている。出土位置は南側にやや離れている。18は棒状の礫の端部に使用痕のみられるたき石。焼けている。19は石錘。半分に割れた割れ面の一角を、その反対側の端部は溝状に敲打により窪ませている。18・19は安山岩を素材にしている。

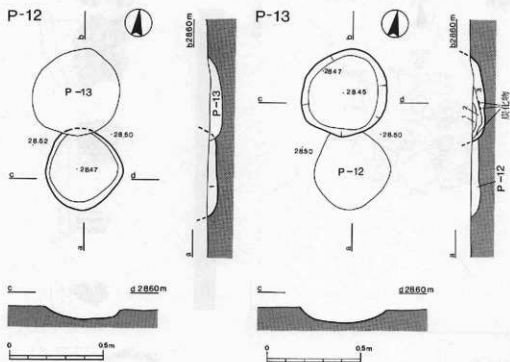
小ビット

95-53-a。

小ビットは3基検出された。調査区の南東角に位置する。周囲に掘込みは認められなかった。この小ビットは構造物の一部と考えられるが調査区外になるため全容は不明である。

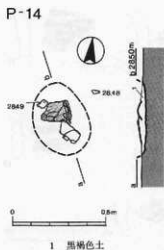
s P-1の確認面上に焼けた礫が出土した。他に出土遺物はない。

(谷島 由貴)

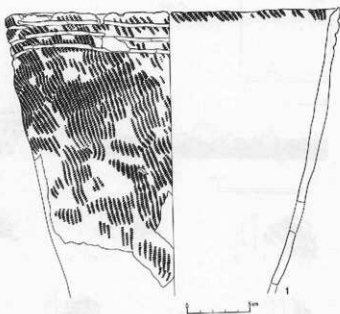


1 暗灰茶褐色土 (ローム粒と黒色土粒を含む)

1 黒褐色土
2 暗茶褐色土 (ローム粒を含む)

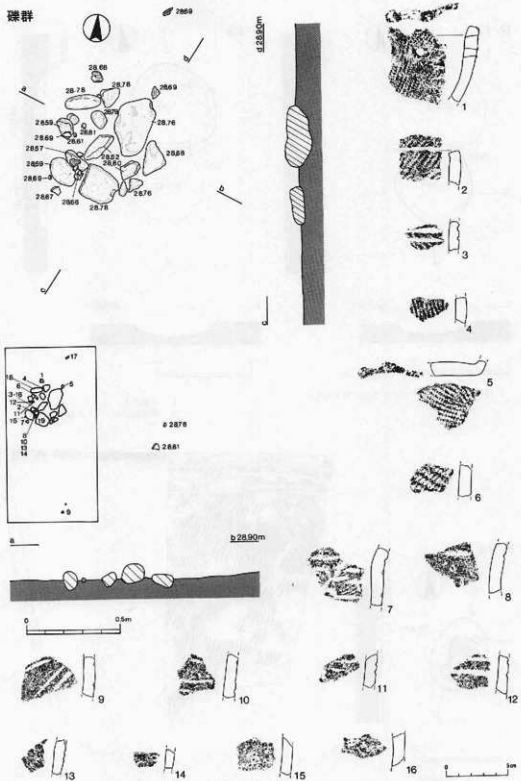


1 黒褐色土

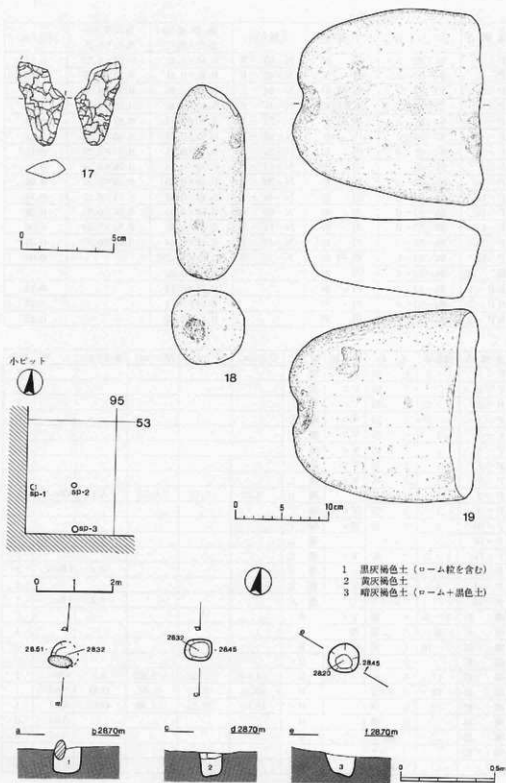


図VI-9 P-12・P-13・P-14

礫群



図VI-10 礫群



図VI-11 裸群の遺物と小ピット

VI 西野視14遺跡

遺構名	位置	平面形	長軸方向	確認面(m) 長径×短径	墳底部(m) 長径×短径	深さ(m)
P-1	91-52-b	円形	N-63°-W	0.46×0.42	0.34×0.32	0.14
P-2	94-53-a	円形	N-42°-E	0.42×0.41	0.35×0.35	0.12
P-3	93-53-d	不整形	N-44°-E	0.52×0.40	0.33×0.20	0.09
P-4	92-52-a 93-53-b	不整形	N-31°-E	0.40×0.37	0.25×0.27	0.08
P-5	94-52-d	楕円形	N-23°-E	1.00×0.61	0.89×0.52	0.13
P-6	93-53-a	円形	N-50°-E	0.55×0.47	0.40×0.34	0.13
P-7	92-52-d	円形	N-25°-E	0.47×0.41	0.33×0.27	0.11
P-8	91-52-c	円形	N-74°-E	0.39×0.34	0.26×0.24	0.08
P-9	92-52-d	円形	N-30°-E	0.48×0.45	0.38×0.37	0.09
P-10	94-53-b	円形	N-44°-E	0.43×0.37	0.34×0.27	0.14
P-11	95-52-d	円形	N-63°-W	0.68×0.60	0.56×0.53	0.08
P-12	95-52-d	円形	N-75°-E	0.40×0.40	0.35×0.34	0.06
P-13	95-52-d	円形	N-43°-E	0.47×0.44	0.41×0.37	0.07
P-14	94-53-b	楕円形	N-25°-W	(0.38)×(0.29)		0.05
礎群	94-52-c	円形		0.70×0.60		
SP-1	93-53-a	円形		0.15×0.14		0.14
SP-2	93-53-a	円形		0.14×0.11		0.13
SP-3	93-53-a	円形		0.17×0.12		0.12

遺構名	図番号	名称	分類	層位	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	数量
P-1	1・2	土器	Vc	墳底						2
P-1		土器	Vc	墳底						4
P-2	1・2	土器	Vc	覆土						2
P-3	1~6	土器	Vc	覆土						6
P-4	1	土器	Vc	覆土						4
P-4		土器	Vc	覆土						2
P-6	1	土器	Vc	覆土						1
P-7	1	土器	Vc	覆土						1
P-8	1	フレイク		覆土	3.22	2.12	0.73	5.1	Obs.	1
P-9	1	土器	Vc	覆土						1
P-10	1	土器	IIIa	覆土						1
P-10		フレイク		覆土				2.1	Obs.	2
P-11	1・2	土器	Vc	覆土						2
P-11		フレイク		覆土				0.4	Obs.	2
P-14	1	土器	Vc	覆土						1
P-14		フレイク		覆土				8.5	Obs.	1
礎群	1~5	土器	Vc	II						5
礎群	6	土器	III	II						1
礎群	7~16	土器	IVa	II						10
礎群		土器	Vc	II						2
礎群	17	石楯		II	(4.64)	(2.21)	(0.87)	(8.6)	Obs.	1
礎群	18	ナリ石		II	20.45	7.53	7.04	1790	And.	1
礎群	19	石鏝		II	19.65	20.25	7.98	4495	And.	1
礎群		焼礫		II					And.	5
礎群		礫		II					And.	8
礎群		フレイク		II				4.3	Obs.	1
SP-1		礎		II				1490	And.	1

表VI-1 遺構規模と出土遺物一覽表

2 遺物

1) 土器

昭和59年度の調査で24点、昭和62年度の調査で4,811点の土器が得られ、出土した土器には、年度による調査地区の違いは特に認められない。土器の時期では縄文時代中期(Ⅲ群)、後期(Ⅳ群)、晩期(Ⅴ群)のものが出土しており、そのうちの9割以上がⅤ群土器である。Ⅴ群土器は調査範囲南側から多く出土し、出土数の少ないⅢ・Ⅳ群もほぼ同様の傾向を示している(図VI-15)。土器の層位的な違いは認められず、Ⅱ層中でも、Ⅴ群土器の中にⅢ・Ⅳ群が混在する状況であった。なお分布図の数字は土器片の出土数である。

Ⅲ群a類(図VI-12-1・4・5)

図示した3点が本類と考えられるもので、いずれも表面は摩滅している。Ⅲ群b類-1との違いは明瞭ではないが、貼付の形状や刺突の位置から本類と判断した。1には、口縁肥厚部に紐状の貼付、4・5には貼付と刺突が認められる。

Ⅲ群b類(図VI-12-2・3・6~12)

a類同様、摩滅したものが多く、比較的特徴の明瞭なものを図示した。2の口縁肥厚部には縦の沈線、3のそれにはへら状工具による押引文がある。6は、貼付帯上に半截竹管による沈線が加えられている。8には羽状縄文、10には綾絡文に似た円弧状の圧痕がある。文様や胎土からは6・8・11がⅢ群b類-1、2・3・7・9・10がⅢ群b類-3と判断される。12は本類に珍しい薄手の底部で、胎土からここに含めた。文様は摩滅している。図版173頁は粘土の上塗りが行われたと考えられるもので、上塗りされた粘土上にも下地の粘土面にも縄文が認められる。

Ⅳ群a類(図VI-12-13)

沈線文の施された土器である。表面は摩滅していて、縄文の有無はわからない。包含層出土の本類はこれ1点のみで、胎土や器厚が磯群出土の土器(図VI-10)に似ている。

Ⅳ群b類(図VI-12-14)

昭和59年度調査地区で採集された。いくぶん摩滅しているが、無文と思われる。厚手、硬質な土器である。

Ⅴ群c類(図VI-12-15~14-110)

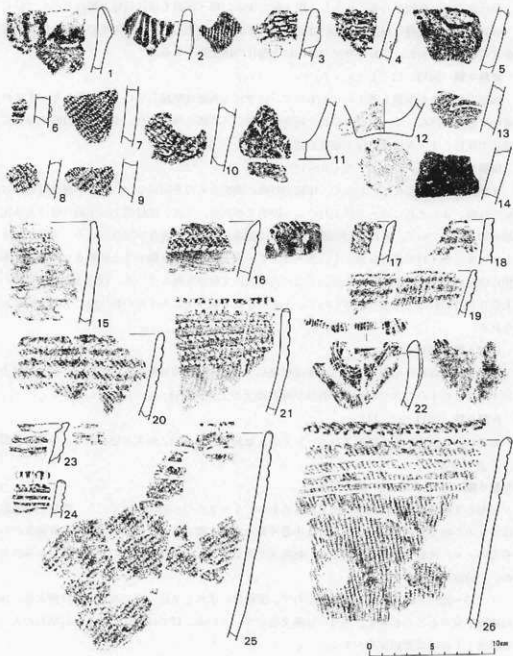
器形や文様要素、施文部位が他と異なるものを1~2点づつ選んで図示した。数量的な内容はまとめの項で記述する。これらは、土器外面の主な文様によって便宜的に、イ)縄線文のあるもの、ロ)沈線文のあるもの、ハ)刺突文のあるもの、ニ)無文のもの、ホ)縄文のみもの、に分けて配列した。

イ(15~22):縄線文の施されたもので、原体はいずれも2段の縄である。15は無文地、16は縄線下位のところが無文、あるいは無文帯になっている。17では縦に、22ではU字形の太い貼付帯上と口唇に捻紐圧痕がある。

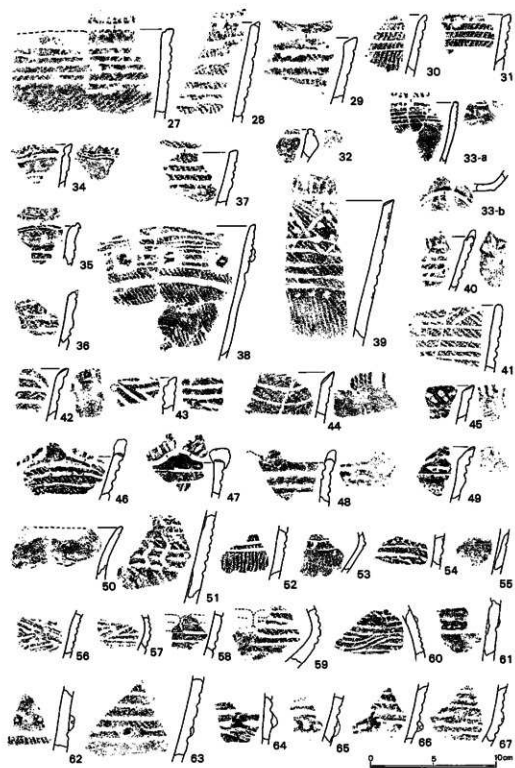
ロ(23~67):沈線文の施されたもので、23~50が口縁部、51~67が胴部破片である。描か

れる沈線には、平行沈線のみもの(23~38・40・48・50・52~55・61~67)と曲線、あるいは斜線の認められるもの(39・41~45・49・51・56~60)とがあり、加えられる文様には、貼付(38・61~67)や刺突(39・40・54)などがある。

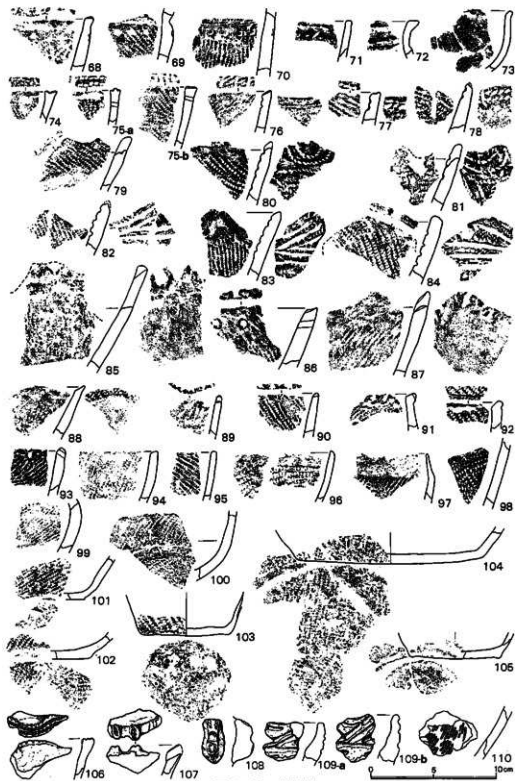
23は硬質、緻密な胎土で、亀ヶ岡系の土器と考えられる。口縁内面に明瞭な段がついている。27にも口唇の内面側をヘラ状工具でつぶした段がある。口縁の刻みはその後に施されている。



図VI-12 土器[1]



圖VI-13 土器(2)



圖VI-14 土器(3)

31には補修孔がある。32は肥厚部のある土器で、内外面に1本の沈線がめぐっている。ヒビが多く不明瞭であるが、無文地に思われる。33・49・55も無文地のものである。34～37は無文帯の認められたものである。34にはナデによって形成されたへこみがなく、部分的に縄文が失われているだけかもしれない。38には無文帯様の幅広い沈線がある。その上位には5～7本の沈線と貼付とがあり、沈線は貼付後に施文されている。39では文様帯内とその下位に、40では口縁部直下に刺突文がある。どちらも竹管様工具をほぼ垂直についた円形の刺突痕である。39の口唇には捻紐押圧、40の口縁内側にはハの字状の刻線がある。43の左側破れ口には貫通孔と思われる跡がある。44の口唇刻みは、細いものが捻紐押圧、太いものが棒状工具を軽く回転させながら押圧したものである。45には斜の刻線様の沈線がある。口唇部の圧痕は捻紐押圧と思われる。46～49は突起をもつもので、その形状は、46が棒状、47・49が山形、48はB状突起様のものと思われる。46・47では口唇に、49では突起頂部内側に刻みがある。50には2本の沈線がある。浅いことから、文様ではなくへら状工具による掻き跡の可能性もある。下部の破れ口に沿って貼付剥落跡と思われる部分があり、その上位には縄文が残っている。51は蛇行沈線（種市 1983、工藤 1985）のものである。54では沈線にそった竹管様工具による刺突痕が並んでいる。58・59は平行沈線の1部が弧状にとじられたものである。60～66は貼付のある土器で、いずれも沈線施文前に貼付けられている。61の紐状貼付の上には、下方から刺突された半月形の刺突痕がある。内面には沈線によるかすかな段がある。62では沈線上位の無文地部分に刺突のある瘤状貼付を2個並べている。63～66は沈線の間に貼付けられるもので、貼付には2個のもの（63）、1個のもの（64）、刻みの入るもの（65）、短沈線の引かれるもの（66）などの種類がある。

ハ（68～70）：刺突文の施されたもので、68が口縁部、69・70が胴部である。

68は摩耗していて文様が不鮮明である。口唇直下に指でなでつけたような軽いくびれがあり、その下位に刺突痕と思われるくぼみが認められる。69は棒状の、70は竹管様の工具で右方向から刺突している。

ニ（71～73・105）：無文のものである。71は鉢型、72は壺型、73は碗状を呈する土器と思われる。

ホ（74～104）：内面や口唇部の文様を除いて、地文の縄文のみの認められるものである。

74～97が口縁部、98～100が胴部、100～104が底部である。

74～81には口唇、あるいは内面に縄線文がある。縄線の原体は、不明瞭な74・75を除いて、1段の縄である。76の口唇には縄文施文後に刻みが、78の内面には捻紐押圧後に短沈線が加えられている。82～84は内面に沈線の施されたものである。84は王冠状の突起部と思われ、口唇には棒状工具を押圧した部分がある。75・86・93には焼成後にあけられた貫通孔がある。91の口縁は折り返し風の肥厚部となっており、刻みがつけられている。96は横走ぎみの縄文、97・98は羽状縄文のものである。97の無文帯と縄文部分との境には、器体に屈曲がある。99・100は壺形土器、または底部近くの破片と思われる。底部では103を除いて、底面にも縄文が認め

られる。103にはアバタ状の凸凹が認められるが文様とは思えない。

この他、拓影では表現の困難な土器を実測図、および写真で掲載した(図VI-14-106~110 図版172頁最下列)。106は口唇に縄線文のある他は無文である。内面には指で押したと思われるへこみがある。107は小突起の2個併列されている例、108は貼付刺落部、109はA状突起である。110のスクリーン部分には赤色顔料が付着している。図版173頁右上は付着物のある土器で、付着物の表面は軽石のように荒く、ざらついている。砂質に富んだ土壌が付着したまま、乾燥あるいは焼けたものと思われるが、詳細は不明である。付着物をとった右半の面には縄文と無文帯とが確認されている。

図番号	分類	発掘区	層	図番号	分類	発掘区	層	図番号	分類	発掘区	層
1	Ⅲ a	93-53-a	Ⅱ	38	V c	94-53-b	Ⅱ	75 a	V c	94-53-b	Ⅱ
2	Ⅲ b	91-53-b	I	39	V c	94-53-a	I	75 b	V c	94-53-b	I
3	Ⅲ b	91-53-d	I	40	V c	91-53-d	I	76	V c	94-50-c	I
4	Ⅲ a	95-52-a	Ⅱ	41	V c	95-51-d	I	77	V c	92-53-b	Ⅱ
5	Ⅲ a	94-53-b	I	42	V c	94-53-b	I	78	V c	93-52-d	I
6	Ⅲ b	94-53-a	I	43	V c	93-53-c	I	79	V c	93-53-a	Ⅱ
7	Ⅲ b	90-53-c	I	44	V c	94-53-a	I	80	V c	94-53-a	I
8	Ⅲ b	93-53-d	I	45	V c	93-53-a	Ⅱ	81	V c	91-53-c	Ⅱ
9	Ⅲ b	93-53-a	I	46	V c	94-53-b	I	82	V c	95-52-d	Ⅱ
10	Ⅲ b	93-52-b	I	47	V c	94-52-c	Ⅱ	83	V c	94-52-c	I
11	Ⅲ b	93-52-d	I	48	V c	94-52-b	I	84	V c	94-53-b	I
12	Ⅲ b	93-52-a	I	49	V c	94-53-b	I	85	V c	94-53-b	I
13	Ⅳ a	95-52-d	Ⅱ	50	V c	94-53-a	I	86	V c	94-53-b	Ⅱ
14	Ⅳ b	106-47	I	51	V c	94-51-d	Ⅱ	87	V c	94-52-d	I
15	V c	90-53-d	Ⅱ	52	V c	94-53-a	I	88	V c	94-53-b	I
16	V c	93-53-d	I	53	V c	94-53-a	I	89	V c	93-53-c	I
17	V c	94-51-a	I	54	V c	91-53-b	Ⅱ	90	V c	91-53-b	Ⅱ
18	V c	94-52-c	Ⅱ	55	V c	93-52-d	I	91	V c	94-53-b	Ⅱ
19	V c	90-53-c	Ⅱ	56	V c	93-52-b	I	92	V c	94-51-b	Ⅱ
20	V c	94-53-b	I	57	V c	94-52-b	I	93	V c	93-53-b	I
21	V c	94-52-c	I	58	V c	92-53-c	I	94	V c	94-52-d	I
22	V c	94-52-c	Ⅱ	59	V c	93-53-d	Ⅱ	95	V c	94-53-b	Ⅱ
23	V c	93-53-c	I	60	V c	95-52-d	I	96	V c	94-52-a	Ⅱ
24	V c	94-53-b	I	61	V c	93-53-c	I	97	V c	94-53-b	I
25	V c	90-53-c	Ⅱ	62	V c	93-53-d	Ⅱ	98	V c	91-53-d	Ⅱ
26	V c	95-53-a	Ⅱ	63	V c	93-53-c	I	99	V c	94-53-a	I
27	V c	94-53-a	I	64	V c	93-53-d	Ⅱ	100	V c	94-52-d	Ⅱ
28	V c	93-51-d	I	65	V c	93-53-d	I	101	V c	91-53-d	Ⅱ
29	V c	94-53-a	I	66	V c	93-53-c	I	102	V c	94-53-b	Ⅱ
30	V c	94-53-b	Ⅱ	67	V c	95-52-d	Ⅱ	103	V c	95-53-a	Ⅱ
31	V c	94-52-c	Ⅱ	68	V c	91-52-c	I	104	V c	94-53-b	Ⅱ
32	V c	93-53-b	I	69	V c	94-53-b	I	105	V c	94-53-b	Ⅱ
33	V c	94-53-b	Ⅱ	70	V c	94-53-b	Ⅱ	106	V c	94-51-c	攪乱
34	V c	94-53-b	Ⅱ	71	V c	94-53-b	Ⅱ	107	V c	92-52-c	I
35	V c	94-51-d	I	72	V c	95-52-d	Ⅱ	108	V c	94-53-b	Ⅱ
36	V c	94-51-b	I	73	V c	94-53-b	Ⅱ	109	V c	93-52-d	I
37	V c	94-53-a	Ⅱ	74	V c	95-53-a	I	110	V c	91-52-c	I

表VI-2 掲載土器一覧表

V群c類土器のまとめ

ここでは、V群c類土器の数量的な内容や全体的な傾向をまとめてみる事にする。なお、文様の比率は数量の多く得られた62年・I・II層出土遺物をもとにしているが、その傾向に遺構出土のものとの大きな違いはみられない。本群土器の数量は、出土点数が4,753点、接合作業終了時点では4,019点であった。後者は接合したもの、同一個体と思われるものを1点として数えているが、胴部破片の個体識別は充分に行っていない。部位では口縁部233点(6%)、胴部3,723点(93%)、底部63点(1%)である。

器形：遺構出土のものを除き、器形がわかる状態に接合・復原されたものはない。破片から窺える器種には、大小の鉢と壺とがある。深鉢が最も多いように思われ、この器種によく見られる文様は、平行沈線である。曲率から中～小型の鉢や浅鉢と思われるもの(79～87)には、内面に施文される例が多い。破片に内傾するところがみられ、壺と思われるもの(57・59・60・72など)も中～小型のようで、曲線的な、又は鋸歯状の沈線文が目立つ。

口縁では水平口縁の他、突起をもつ例や波状(大きな山形)を呈するものもある。深鉢や小型の碗状を呈すると思われるものには突起が少ない。口唇の断面形状には①：内傾するもの、②：外傾するもの、③：山形、あるいは平形のものがある。①・②・③の比率は88点(45%)：15点(8%)：90点(47%)である。

文様：今回出土した土器には、文様の充分に識別されない摩滅片や小片が8割近くある。そのため、文様の把握は残り2割(826点)のもので行っている。縄線文(22点-3%)、沈線文(202点-24%)、刺突文(19点-2%)、縄文(583点-71%)が認められ、縄文のみの破片が過半数を占める。口縁部破片では、それぞれ12点(7%)、77点(45%)、3点(2%)、78点(46%)である。前3つの文様は、その文様が認められれば、それぞれに1点として数え、縄文は縄文のみのものを1点としている。無文としたものは20点程あるが、摩滅片と識別しがたいものや部分的である可能性の高いものがあり、不確実な事から数量的な把握は行わなかった。器形の確かな資料に乏しく、器種による文様の比率は不明確である。縄文と沈線文とが半々に認められる口縁部破片からの傾向としては、浅鉢では縄文が、深鉢では沈線文がより高い率を示すものと思われる。

縄線文と沈線文とでは、その点数に差はあるが、どちらも平行して器体をめぐめるものが多い。ただし、内面に施される例を含めると、縄線文は曲線的、沈線文では直線的モチーフのものが目立つ。縄線文の原体はRL(12点)・LR(8点)・L(2点)の燃紐で、地の縄文と同じ燃りのものが多い。口唇部の燃紐押圧にはRと思われるものも認められたが、押圧される燃紐の使用頻度は、高いほうからRL-LR-L-Rの順である。

沈線文では、平行沈線のみのもものが159点(79%)ある。この他には、弧線状や鋸歯状のものなどがある。また、配列を充分に読みとれない小片が19点(10%)ある。平行沈線の本数は、3～5本ものものが多くようであるが、欠損品の多い事から判然としない。沈線の施文方法は(加藤 1976)^{註1}、施文具を下方から斜めに押圧したものとほぼ垂直に押圧したものとが半々、あ

るいは後者がいくぶん多くみられる。

刺突文は少なく、口縁部破片に3点、胴部破片に19点認められる。このうちの9点は、沈線にそって施され、2点は貼付上に施文されている。残りは刺突のみ認められるものである。施文具には、竹管状工具と棒状工具とがあり、沈線間にそうものは主に前者を、貼付帯上につけられるものは後者を使用している。

貼付には沈線間に瘤状に貼付られるものと紐状に器体をめぐめるものがあり、把手状の刺落片(108)もある。紐状の例は、壺形と考えられる土器の肥厚帯を除けば、1例(61)のみである。沈線とともに施される例の多い事から、貼付のみの土器は存在しないか、ごく少ないと考えられる。把手状の刺落片は、舟型土器の存在を予想させる。

縄文の原体はLR 125点(17%) RL 303点(42%)、判定不能 291点(41%)で、複節や無節の原体は見出せなかった。原体の回転方向は、横方向がほとんどで、確実に縦回転と判断されたものはなかった。羽状縄文を呈するものは、図示した2点(47・48)がある。縄文が浅く、異なる原体のものか、同一原体の回転方向を変えたものかは判然としない。

口縁部破片の中で、内面に文様の施されているものは22点(10%)で、その文様には沈線(17点)と縄線(5点)とがある。突起を除き、口唇にも文様の認められたものは103点(46%)ある。撻紐や棒による刻みが61点(59%) 縄文のものが42点(41%)である。突起部は32点(14%)に認められた。突起には、小山状のものやいわゆるA状突起、B状突起に通ずるものなどがある。

時期：V群c類土器は苫小牧・千歳市などの遺跡で樽前C降下軽石層(以下、T a - Cとする)の上下から出土している。今回得られた資料は、平行沈線文が主体である事(財)北海道埋蔵文化財センター^{註2} 1983)、沈線間の貼瘤が認められる事(加藤 前掲書)からT a - C上位の遺物に対比される。T a - C上位の遺物は、ママチ遺跡(北埋文 1983, 1987)の報告でⅢ・Ⅳ・V群、あるいは3・4類に分類されている。これにあてはめると、3類(=Ⅲ群)の特徴も認められるが、弧線文と壺と思われる土器の存在などから4類(=Ⅳ・V群)に近いものと考えられる。縄線文はT a - C下層の1類(=Ⅰ群)に特徴的な文様とされるが、地域差が想定される。上川地方では、報文でみる限り、突起部に指紋状の撻紐押圧の認められる沢田の沢遺跡(斉藤 1981)や永山4丁目遺跡(斉藤 1985)からも、その認められない幌倉沼遺跡(佐藤 1966)やメム川遺跡(野村他 1972)からも縄線文の土器が出土している。伴出関係が確実とはいえないが、地域によってはママチ2類(=Ⅱ群)以降も縄線文の存在していた可能性が高い。

最後に、あまり類例を見出せなかったものやママチの3・4類段階に認められないように思われるものを挙げておきたい。22はU字形の貼付帯のあるもの、68は刺突列と地文のみのもの^{註7}で、古い様相の窺われる資料である。47は口縁の内屈した土器で、器形的には江別太遺跡(高橋他 1979)に類例がある。61は貼付帯に刺突文の加えられたもので、深鉢には珍しい文様と思われる。焼きや胎土からも他の資料とはやや異質な感を受けるが、他群とするほどの積極的

な理由はない。62は沈線間ではなく、その上位に貼瘤のつけられたもので、貼付の位置は後期末の瘤付土器（安孫子 1969）に類似する。厚味のある土器で、胎土に軽石粒が目立つなど、本遺跡のV群c類にはあまりみられない特徴をもっている。しかし、同じような胎土・厚さの土器に41と同様の文様をもつものがあった事から、V群c類とした。このような類例に乏しい資料や古手と思われる資料はあるものの、今回得られたV群c類土器は、千歳・苫小牧地方のT a-C上位の遺物に対比される、比較的まとまりのある資料と思われる。（葛西 智義）

註

- 1) 文獻5・60ページ25行目
- 2) 文獻19・301ページ
- 3) 文獻19・横市によるもの
- 4) 文獻20・中田によるもの
- 5) この文様については、加藤（文獻5-60ページと66ページの福年表）や横市（文獻19・203・301ページ）、赤石（文獻1-74・76ページ）などの指摘があり、T a-C下位に多く認められる特徴と思われる。
- 6) 文獻19（図128-1の5）や文獻9（第29図の36）、文獻6（第209図の3）などに類例がみられる。
- 7) タンネト遺跡（野村 1977）出土資料に多くみられる。加藤（文獻5）によれば、他の文様要素からT a-C上位の遺物と対比されているが、ママチ遺跡やタプコプ遺跡（佐藤他 1984）、柏原24遺跡（佐藤他 1986）など、T a-C下位の黒土層からの出土例が多い。

引用・参考文献

1. 赤石慎三 1985 「遺失部における縄文晩期後半の土器群について」、『縄土の研究』5
2. 安孫子昭二 1969 「東北地方における縄文後期末の土器様式」、『石器時代』9
3. 石川 徹・金山哲夫 1970 「縄文文化晩期後半の住居址—千歳市駒形遺跡の概要」、『北海道考古学』6
4. 加藤邦雄・上野芳一・高橋和樹・土田原佐子 1976 「T 210遺跡」、『札幌市文化財調査報告書』
5. 加藤邦雄・内山真澄・羽賀憲二 1977 「N 199遺跡」、『札幌市文化財調査報告書』XⅦ
6. 金盛典夫・村田良介・松田美砂子・葛西智義 1983 「尾河台地遺跡発掘調査報告書」、『斜里町文化財調査報告書』Ⅱ
7. 工藤義衛 1985 「蛇行沈線文について」、『文京台考古』3・4合併号
8. 斉藤 傑 1981 『東神楽町沢田の沢遺跡発掘報告』
9. 斉藤 傑・瀧川拓郎・和田朋子・風見谷節子 1985 「永山4遺跡」、『旭川市縄文文化財発掘報告』8
10. 佐藤一夫・宮夫晴夫 1984 『タプコプ』
11. 佐藤一夫・宮夫晴夫・長谷川 徹 1986 『柏原24遺跡』
12. 佐藤忠雄 1966 『観音山の墳墓』
13. 高橋正勝・底井孝一・関部真幸 1979 「江別太遺跡」、『江別市文化財調査報告書』XⅤ
14. 高橋正勝 1971 『柏木川』
15. 野村 崇・高橋純一 1972 『缺背牛町ム川遺跡』
16. 野村 崇 1977 『長沼町幌内タンネト遺跡の発掘調査』
17. 北海道教育委員会 1977 『美沢川流域の遺跡群Ⅰ』
18. 北海道縄文文化財センター 1980 『大森1遺跡・西野幌1遺跡・西野幌3遺跡・東野幌3遺跡』
19. " 1983 「ママチ遺跡」、『北海道縄文文化財センター調査報告書』第9集
20. " 1987 「ママチ遺跡Ⅱ」、『北海道縄文文化財センター調査報告書』第36集
21. 山内清男 1930 「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」、『日本考古学選集』

西野幌14遺跡出土の土器の胎土分析

1. はじめに

土器胎土の特徴を明らかにするために、胎土の一次鉱物組成を調べた。一次鉱物組成上の特徴は、胎土物質の原産地推定や土器の伝播を考える際に、重要な情報を提供すると思われる。

今回、分析した資料は、すべて縄文時代晩期のV群c類土器である。拓本で図示した資料と同一個体と思われる破片を分析に使用した。1点しか出土していない拓本23・52は、図・写真を作成した後、ほぼ半分を分析用に砕いた(写真図版)。

本遺跡のV群c類土器には、在地系とされるもの(拓本26・30・36・51・70・96)と亀ヶ岡系とされるもの(拓本23)、両者の中間的な状態のもの(拓本52・58)などがある。在地系と考えられる土器は、表面がカサカサして粉っぽい印象を受け、いくぶん硬質なものでは内・外面に細かなヒビのはいるものが目立つ。色調は茶～黄褐色を呈する。亀ヶ岡系と思われるものは、焼きしめられたといった表現があてはまり、暗灰～灰褐色の色調を呈する。中間的なものには、暗灰色の土器であるが、23に比べ内面調整の雑なもの(拓本52)、砂粒の多い胎土で、文様に亀ヶ岡系土器との関連の窺われるもの(拓本58)などがある。表1に外見上の特徴を示す。

土器の胎土分析にあたっては、東京都埋蔵文化財センターの上條朝宏氏に、実験方法と文献、及び胎土中の海綿骨針について直接御教示頂いた。深く感謝する次第である。

表1 供試土器の表面観察

試料*	文様	部位	厚さmm	色		組成 及 び保存状態	表面観察
				外 面	内 面		
No. 23	沈線文	口縁	5.0~6.5	7.5Y R4/2	7.5Y R4/2	良	粗粒砂大のangularな重鉱物多、断面割部、海綿骨針をまれに含む。断面は多孔質、径0.2mm以上の孔多。強く割れ片あり。
No. 26	縄文	胴	5.0~5.5	7.5Y R7/4	7.5Y R6/3	良	粗粒砂大の石英・長石・重鉱物を含む。内・外・断面に植物圧痕あり。断面に径0.2mm以上の孔。内面に炭化物附層。
No. 30	沈線文 縄文	胴	6.0~7.5	2.5Y 4/4	5Y R5/6	良	粗粒砂大のangularな長石・石英多。細粒大のsub-roundedなチャートを含む。断面に径0.2mm以上の孔。断面に炭化物附層。
No. 36	沈線文 縄文	胴	6.0~8.0	2.5Y R6/6 と7.5Y R8/4 との複合	10Y R7/4	良	中粒砂大のangularな石英・長石多。外面に植物圧痕あり。断面に径0.2mm以上の孔。
No. 51	沈線文	胴	7.5~10.0	7.5Y R5/3	7.5Y R7/4	良	細一中粒砂大の重鉱物・石英・岩片を含む。細粒大の凝灰岩(?)他を岩片を含む。外面に植物圧痕あり。断面に径0.3mm以上の孔。
No. 52	沈線文 縄文	胴	6.5~7.0	7.5Y R5/1	N 1.5/0	良	細一中粒砂。特にsub-angularな石英・チャート多。粗粒砂大の凝灰岩(?)の岩片を含む。断面に径0.1mm以上の孔。
No. 58	沈線文	胴	5.5~6.0	10Y R3/3	10Y R3/3	外面:良 内部:やや良	中粒砂大の長石・火山ガラス(?)を多く含む。細粒大の石英・凝灰岩(?)他を含む。断面に径0.2mm以上の孔多。
No. 70	刻突文 縄文	胴	5.5~8.0	7.5Y R7/4	7.5Y R6/4	良	粗粒砂大のangularな長石多。断面大の凝灰岩(?)岩片を含む。外・内面に植物圧痕あり。断面に径0.2mm以上の孔。
No. 96	縄文	胴	5.0~6.0	7.5Y R7/4	7.5Y R6/4	良	粗粒砂大の石英・重鉱物多。断面大の凝灰岩(?)岩片を含む。断面には、径0.5mm以上の孔。強い片層あり。
P-11	沈線文	口縁 突起部	9.0~11.0	7.5Y R7/4	7.5Y R6/4	良 (やや良に近い)	細一中粒砂大のangularな石英・長石多。断面大のsub-angularな重鉱物を含む。内・外面に植物圧痕あり。断面は多孔質。

*拓本図No.に同じ。■水洗・風乾後の色調、標準土色表による。■■■上條(1983)による。■■■■ Powers (1953)による。

2. 試料の処理

試料の処理方法は上條 (1983) に準じた。処理の手順は次の通りである。

土器片の採取→写真・拓本等による記録→肉眼や実体顕微鏡による土器表面の観察→乾燥→10gを鉄製乳鉢にて粉碎→1NのHCl中で超音波洗浄→クエン酸法による脱鉄処理→乾燥→篩分け→極細粒砂分(粒径 $1/8-1/16$ mm)についてカナダバルサムを封入剤としてプレパラート作成→偏光顕微鏡下でカバーガラス全域を検鏡→雲母類を除いた検鏡数に対する各鉱物・生物起源粒の粒数%を算出。雲母類については、その粒数が全鉱物粒数の1%>のとき「まれ」と表現した。各プレパラートにおいて、風化粒・粘土粒・雲母類を除いた総検鏡粒数は、700-1,100である。

火山ガラスについては、形態分類を行い、各型の量比を粒数%で表わした。形態は、主に、粒子全体の形状、気泡の形状と大きさによって以下のように分類した。

B型：漿果状。軽石様。

F型：扁平で、気泡が繊維状に細長く平行に伸びているもの。

L-C型：気泡が破砕し、泡壁がridgeをなして直線～曲線状に走るもの。

M型：気泡と泡壁がつくる模様は網目状にみえるもの。

N型：扁平～塊状で、針状の気泡・条線があるもの。微小の針状結晶を含むことが多い。

P型：薄い平板状。

UT：未分類。

3. 結果

胎土の一次鉱物組成を図1に示す。

Na 23は、重鉱物が多く約50%に達する。重鉱物量は、角閃石>不透明鉱物(鉄鉱物)>斜方輝石>単斜輝石。単斜輝石比(単斜輝石量/全輝石量)0.27。角閃石はほとんど緑色種から成る。植物珪酸体と海綿骨針をまれに含む。

Na 26は、主に斜長石から成り、比較的多くの火山ガラスを含んでいる。重鉱物量は、斜方輝石>角閃石>単斜輝石≡不透明鉱物。単斜輝石比0.25。角閃石は、緑色種と褐色種とがほぼ等量である。火山ガラスは主にL-C型から成る。雲母類と植物珪酸体をまれに含む。

Na 30は、主に斜長石と火山ガラスから成る。重鉱物量は、斜方輝石≡角閃石≡不透明鉱物>単斜輝石。単斜輝石比0.13。角閃石はほとんど緑色種から成る。火山ガラスは主にL-C型から成る。雲母類・植物珪酸体・珪藻をまれに含む。石英をまれに含む。

Na 36は、主に斜長石から成り、比較的多くの火山ガラスを含んでいる。重鉱物量は少なく、角閃石>斜方輝石≡不透明鉱物。角閃石は緑色種が多い。火山ガラスは主にB型から成る。少量の植物珪酸体を含む。炭化植物片と石英をまれに含む。

Na 51は、主に斜長石と火山ガラスから成る。重鉱物量は、角閃石>斜方輝石>単斜輝石>不透明鉱物。単斜輝石比0.23。角閃石はほとんど緑色種から成る。火山ガラスは主にL-C型か

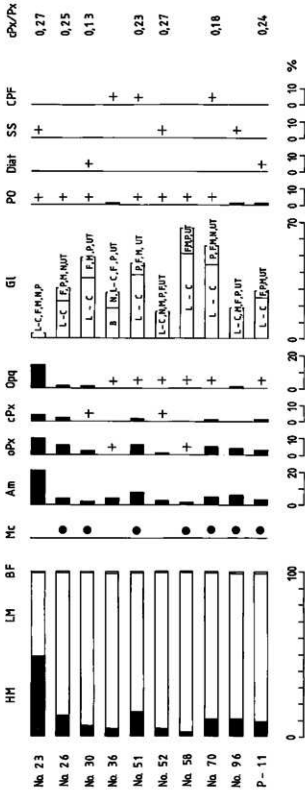


図1 土器胎土の一次鉱物組成

ら成る。雲母類・植物珪酸体・炭化植物片をまれに含む。

№ 52は、主に斜長石から成る。重鉱物量は少なく、角閃石>斜方輝石≒不透明鉱物>単斜輝石。単斜輝石比0.27。角閃石は緑色種のみである。火山ガラスは、L-C型様のUTが多く、次いでL-C型が多い。植物珪酸体・海綿骨針・石英をまれに含む。

№ 58は、主に火山ガラスから成る。重鉱物量は非常に少なく、角閃石>斜方輝石≒不透明鉱物。角閃石は緑色種のみである。火山ガラスは新鮮で、主にL-C型から成る。雲母類と植物珪酸体をまれに含む。

№ 70は、主に火山ガラスと斜長石から成る。重鉱物量は、角閃石=斜方輝石>単斜輝石>不透明鉱物。単斜輝石比0.18。角閃石はほとんど緑色種から成る。火山ガラスは主にL-C型から成る。雲母類・植物珪酸体・炭化植物片をまれに含む。

№ 96は、主に斜長石から成る。重鉱物量は、角閃石>斜方輝石>不透明鉱物。角閃石は緑色種のみである。火山ガラスは、L-C型様のUTが多く、次いでL-C型が多い。少量の植物珪酸体を含む。雲母類・海綿骨針・石英をまれに含む。

P-11は、主に斜長石から成る。重鉱物量は、角閃石=斜方輝石>単斜輝石≒不透明鉱物。単斜輝石比0.24。角閃石は、緑色種と褐色種とがほぼ等量である。火山ガラスは比較的多く、主にL-C型から成る。少量の植物珪酸体を含む。雲母類と珪藻をまれに含む。

4. まとめ

極細粒砂分の鉱物組成上の特徴から、供試土器を以下のように分類した。

A：重鉱物が多い試料 (№ 23)。

B：角閃石の緑色種と褐色種との比がほぼ等しい試料 (№ 26・P-11)。

C：L-C型の火山ガラスが多く、単斜輝石比が小さく、角閃石は緑色種がほとんどの試料 (№ 30・51・70)。

D：火山ガラスの形態が、主にB型から成る試料 (№ 36)。

E：火山ガラスのうち、L-C型様のUTガラスが多い試料 (№ 52・96)。

F：新鮮な火山ガラスが非常に多く、結晶鉱物、特に重鉱物が少ない試料 (№ 58)。

以上の各類型内では、土器表面の岩相も類似し、同一の胎土といえるであろう。№ 23は亀ヶ岡系とされるもので、外見的にも鉱物組成からも、他の試料とは著しく異なる。在地系や中間的と考えられるものでは、同じ系内でも鉱物組成は必ずしも一致しない。鉱物組成と文様・部位との相関は認められない。

(花園正光・葛西智義)

引用文献

上條朝宏 (1983)：胎土分析 I。加藤晋平・小林達雄・藤本 強編「縄文文化の研究 5」, 270 pp, 雄山閣出版：pp. 47-67。

小山正忠・竹原秀雄 (1976)：新版標準土色帳 (5版)。日本色研事業。

Powers, M. C. (1963)：A new roundness scale for sedimentary particles. *Jour. Sedimentary Petrology*, 23, pp. 117-119。

2) 石器

石器等は58年度調査区から21点、62年度調査区から1,190点得られた。礫とフリイクを除いた石器(273点)のうち、石鏃の比率が44%(123点)と他の同時期とみられる遺跡に比べ出土数が多い。そのなかに石鏃の未製品8点を含む。石鈎3点、植刃1点、石槍またはナイフ10点、石錐3点、ラウンドスクレイパー4点、スクレイパー57点、石のみ1点、石斧14点、石斧の未製品1点、たつき石8点、すり石3点、砥石7点、石錐1点、石核・原石7点、使用痕・加工痕のある剥片32点、土製品2点、石製品1点である。このように礫石器の比率は15%と少ない。全石器中フリイクが47%(555点)、礫が30%(362点)をしめる。

石鏃(図VI-16・17:1~119)

石鏃は123点出土した。これらは、無茎のものと有茎のものに分けられる。そのうち、無茎のものは、三角形を呈するもの、木葉形または菱形を呈するものに細分される。

石材は19・35・36・55・59が頁岩製で、他は黒曜石製である。

(1~17)は三角形を呈するもの。1・10・13は横刺ぎ剥片を素材にしている。5・11は平基で、他は凹基である。9・10・16・17は凹基の両端を突起状に作り出している。

(18~36)は木葉形または菱形を呈するもの。21・23・24・27・30・32は横刺ぎ剥片を素材にしている。28~29は円基、30~33は尖基である。20・25は背面の稜線を残し主に腹面の加工をおこなっている。34は両側縁に挟りがみられる。26・30は熱を受けていると考えられる。

(37~105)は有茎のもの。37~76は長さに対し幅の広いもの。37~60は基部の挟りが小さい。77~110は尖頭部が狭長なもの。37・74・76は再加工によるものと考えられる。69・71・95・104は横刺ぎ剥片を素材にしている。72の尖頭部は背面の稜線を残し主に腹面の加工をおこなっている。

(106~110)は石鏃の破片である。

(111~118)は石鏃の未製品と考えられる。115・116は尖頭部が加工途中のもの。117・118は尖頭部の加工途中に側縁部が破損したと考えられる。

石鈎・植刃・石槍またはナイフ(図VI-18:119~128)

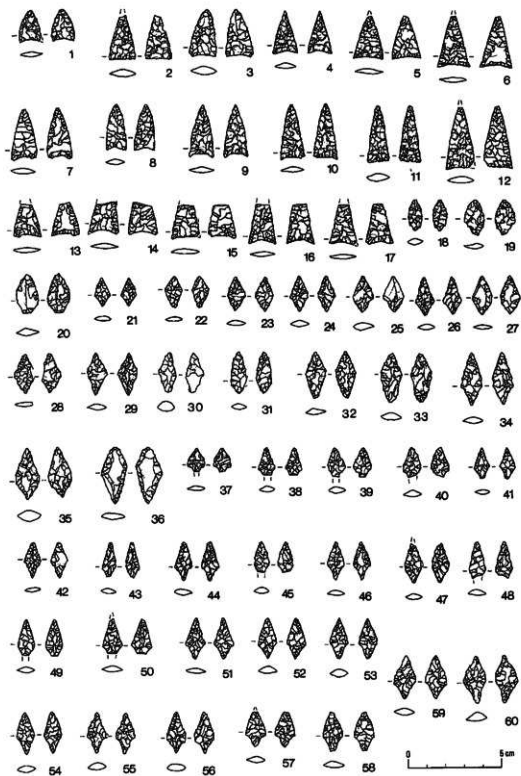
121は頁岩、他は黒曜石を素材にしている。

(119~121)は石鈎である。119・120は有茎のもの。121は無茎で薄く両面に入念な加工がみられる。

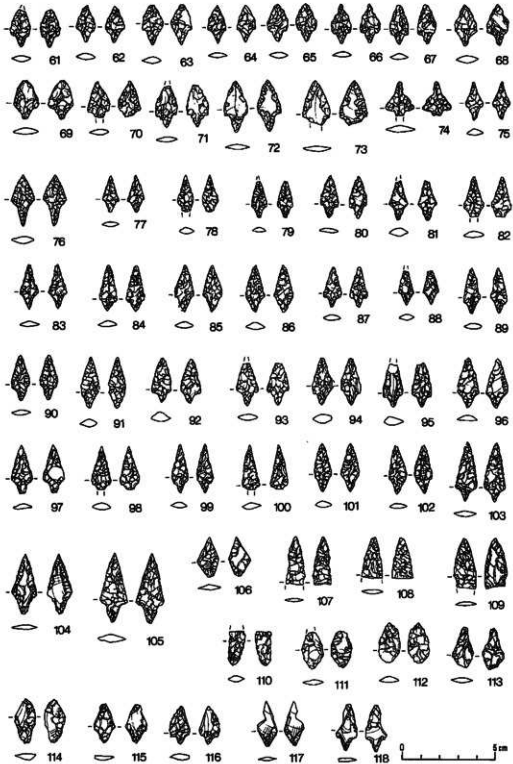
(122)は植刃と考えられる。両面に入念な加工がみられ、側面に細かい階段状の刺離痕がみられる。

(123~128)は石槍またはナイフ。123は無茎のもの。124~127は有茎のもの。125は熱を受けているが、一方の破損した逆刺しの割れ口には艶が残っている。126は一方の逆刺しが破損したのち再生した痕がみられる。124・127は尖頭部が破損している。128は破損した石槍の基部と考えられる。

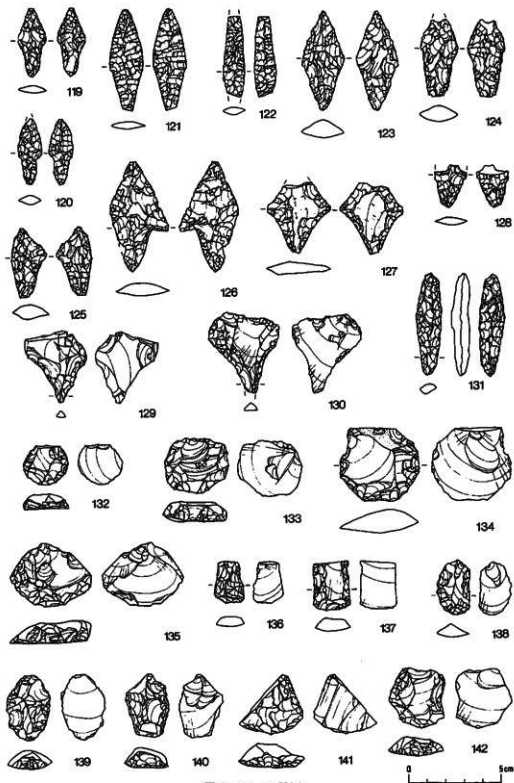
石錐(図VI-18:129~131)



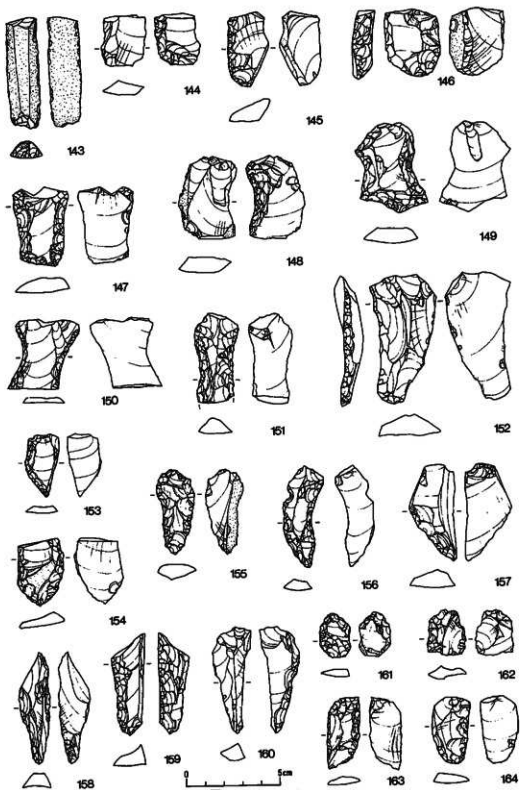
圖VI-16 石器(1)



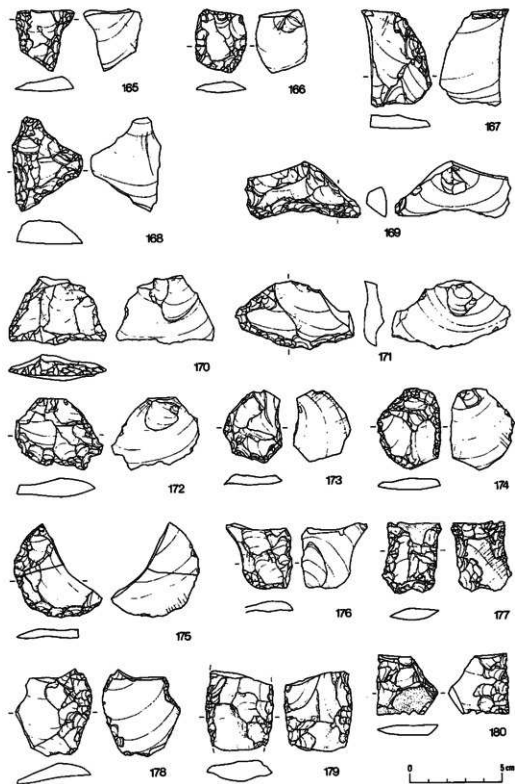
圖VI-17 石器(2)



圖VI-18 石器(3)



圖VI-19 石器(4)



圖VI-20 石器(5)

129・130は剥片の一端に鋒部を作り出している。黒曜石を素材にしている。131は全面に二次加工が施され棒状を呈している。メノウを素材にしている。

スクレイパー類 (図VI-18~20:132~180)

171は硬質頁岩、179は頁岩、他は黒曜石を素材にしている。

(132~135)はラウンドスクレイパー。

136~167は縦長剥片を用いたもの。168~180は横長剥片を用いたもの。136~152・168~176は搔器で、そのうち136~143・169~171は下端に144~152は側縁に刃部が作り出されている。168は三角形の各辺に刃部が作り出されている。149は棒状原石を素材にしている。147~152・168・169の刃部は内湾する。153~160は尖頭部をもつもの。161~167・173・180は削器である。そのうち177・179・180は両面に加工がみられる。

石斧類 (図VI-21・22:181~196)

181は緑色片岩、182・186・188・191・194・196は緑色泥岩、183・185は泥岩、184・193は頁岩、187は蛇紋岩、192・195は片岩を素材にしている。

(181)は石のみと称される小型石斧。側辺と刃部に磨きが施されている。

(183~191)は石斧。大半は打ち欠いて形を整えた後、磨きを施し刃部を作り出している。187は全面に磨きが施されている。188は側面にベッキングによる整形がみられ、磨きが施されている。191・192の現存部分は磨きが施されている。(196)は石斧の未製品と考えられる。

たき石 (図VI-23:197~200)

197は側面に磨きが施されており、両端部に使用痕がみられる。石斧を再利用したと考えられる。蛇紋岩を素材にしている。198はくぼみ石で側面にも使用痕がみられる。199は棒状礫の端部に使用痕がみられる。200はやや扁平な円礫の一端を使用している。

すり石 (図VI-23:201)

扁平な礫の一端をすっている。

砥石 (図VI-23:202~204)

202は両面を使用している。203・204は欠損品。砥面は弓状に湾曲している。

石核 (図VI-24:205~207)

一部に原石面が残り、黒曜石の小型角礫を用いたと考えられる。

U・Rフレイク (図VI-24:208)

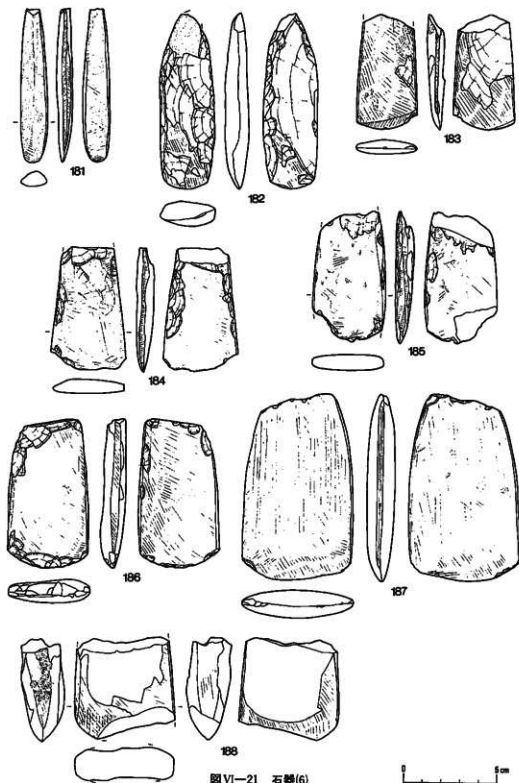
原石面の残る縦長剥片の一边に使用痕がみられる。

土製品 (図VI-24:209~212)

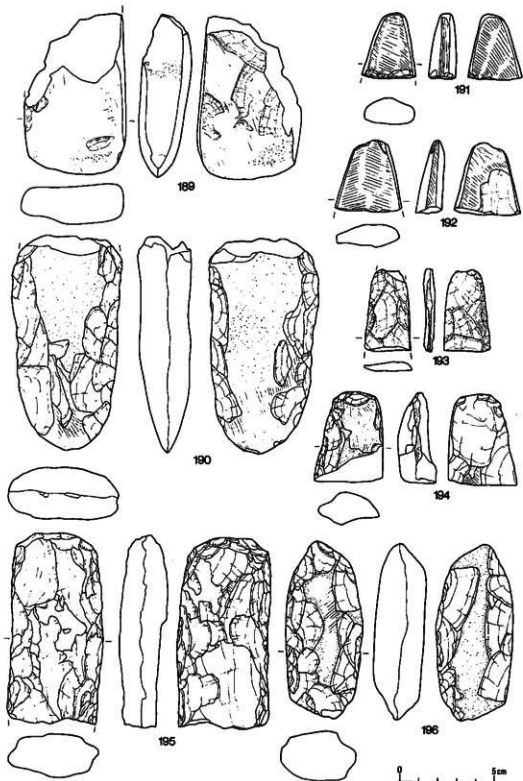
209~211は土製品というより粘土紐などを焼いたものと考えられる。209は玉状にしている。212は土製の垂飾。貫通部には擦れた痕がみられない。

石製品 (図VI-24:213)

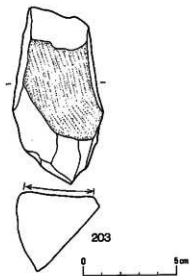
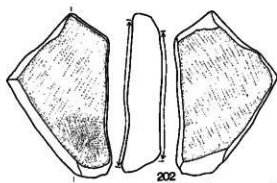
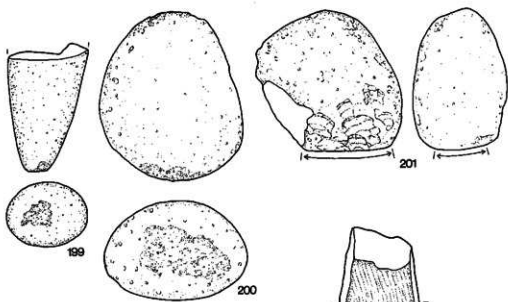
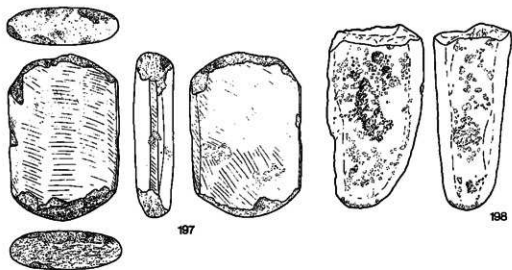
石製の垂飾。内湾部に擦り痕がみられる。貫通部は楕円形を呈し左上部が擦れ薄くなっている。カンラン岩を素材にしている。



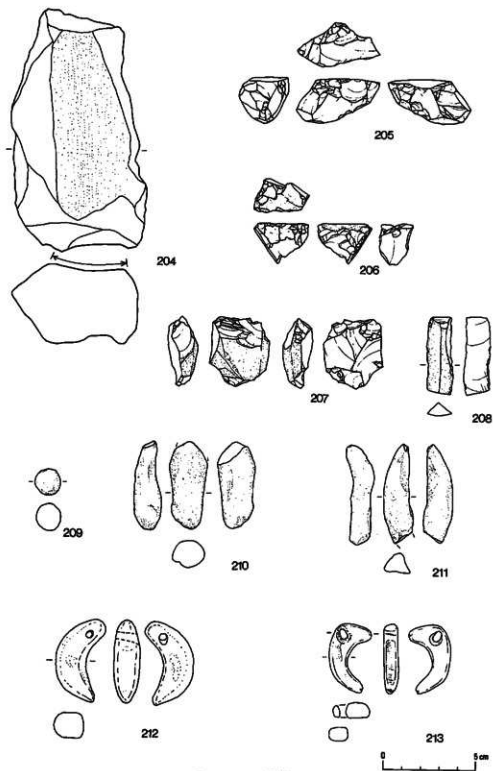
圖VI-21 石器(6)



圖VI—22 石器(7)



圖VI—23 石器(8)



圖VI-24 石器等

図番号	グリッド	名称	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	高さ(m)	石質
1	94-53-b	石鏡	1.61	1.22	0.25	0.4	Obs.
2	94-52-c	石鏡	(2.27)	1.52	0.29	(0.8)	Obs.
3	94-52-d	石鏡	2.47	1.45	0.49	1.4	Obs.
4	94-49-d	石鏡	2.24	1.29	0.26	0.6	Obs.
5	93-53-b	石鏡	(2.22)	1.41	0.34	(0.8)	Obs.
6	91-53-d	石鏡	(2.69)	1.58	0.22	(0.8)	Obs.
7	95-52-d	石鏡	2.59	1.35	0.25	0.8	Obs.
8	94-53-b	石鏡	2.23	1.11	0.28	0.7	Obs.
9	95-52-d	石鏡	2.74	1.29	0.29	0.8	Obs.
10	94-52-c	石鏡	2.91	1.26	0.29	0.9	Obs.
11	93-52-d	石鏡	2.95	1.13	0.37	1.0	Obs.
12	94-52-c	石鏡	(3.21)	1.41	0.30	(1.2)	Obs.
13	94-52-b	石鏡	(1.67)	1.46	0.25	(0.6)	Obs.
14	92-53-a	石鏡	(1.70)	1.52	0.32	(0.9)	Obs.
15	91-53-b	石鏡	(1.68)	1.45	0.27	(0.7)	Obs.
16	93-53-c	石鏡	(2.06)	1.42	0.30	(0.8)	Obs.
17	93-53-d	石鏡	(2.08)	1.40	0.27	(0.7)	Obs.
18	93-52-b	石鏡	1.60	0.76	0.31	0.4	Sh.
19	90-53-d	石鏡	1.84	1.08	0.26	0.5	Obs.
20	91-53-b	石鏡	(2.04)	1.21	0.36	(0.7)	Obs.
21	93-52-d	石鏡	1.46	0.86	0.25	0.2	Obs.
22	94-52-d	石鏡	1.61	0.90	0.25	0.3	Obs.
23	93-53-b	石鏡	1.78	0.95	0.27	0.4	Obs.
24	94-53-b	石鏡	1.80	1.02	0.29	0.3	Obs.
25	92-52-d	石鏡	1.84	1.08	0.35	0.5	Obs.
26	94-52-c	石鏡	1.97	1.00	0.27	0.4	Obs.
27	94-53-b	石鏡	2.00	1.05	0.27	0.4	Obs.
28	93-51-c	石鏡	2.01	(1.08)	0.23	(0.4)	Obs.
29	92-53-a	石鏡	2.19	1.13	0.32	0.5	Obs.
30	94-53-b	石鏡	2.19	0.97	0.53	0.8	Obs.
31	93-53-a	石鏡	2.19	0.87	0.30	0.5	Obs.
32	91-52-c	石鏡	2.44	1.07	0.30	0.6	Obs.
33	92-53-b	石鏡	2.58	1.12	0.44	1.0	Obs.
34	94-52-b	石鏡	2.78	1.11	0.41	0.8	Obs.
35	92-52-b	石鏡	2.88	1.33	0.59	1.7	Sh.
36	94-53-a	石鏡	2.94	1.43	0.44	1.6	Sh.
37	93-53-a	石鏡	(1.24)	0.91	0.23	(0.2)	Obs.
38	91-52-c	石鏡	(1.44)	0.87	0.29	(0.2)	Obs.
39	95-52-d	石鏡	(1.55)	0.97	0.32	(0.4)	Obs.
40	93-52-d	石鏡	1.59	0.97	0.33	0.4	Obs.
41	92-52-d	石鏡	1.58	0.83	0.22	0.2	Obs.
42	94-52-b	石鏡	1.83	0.99	0.22	0.2	Obs.
43	93-53-a	石鏡	1.80	0.75	0.25	0.3	Obs.
44	94-53-b	石鏡	1.79	0.84	0.31	0.3	Obs.
45	93-53-d	石鏡	(1.61)	0.86	0.29	(0.3)	Obs.
46	92-52-b	石鏡	1.94	0.94	0.27	0.3	Obs.
47	92-52-c	石鏡	(2.06)	0.93	0.32	(0.6)	Obs.
48	93-53-a	石鏡	(1.89)	0.90	0.31	(0.4)	Obs.
49	93-53-b	石鏡	(1.89)	0.91	0.28	(0.4)	Obs.
50	93-53-a	石鏡	(1.82)	1.03	0.27	(0.4)	Obs.
51	93-53-b	石鏡	2.15	1.08	0.28	0.4	Obs.
52	95-52-d	石鏡	2.16	1.04	0.35	0.5	Obs.
53	91-52-c	石鏡	2.14	0.99	0.39	0.5	Obs.
54	94-53-a	石鏡	2.15	0.99	0.31	0.5	Obs.
55	95-52-d	石鏡	2.10	0.85	0.40	0.5	Obs.
56	93-53-b	石鏡	2.20	1.07	0.35	0.6	Obs.
57	94-53-b	石鏡	(1.85)	1.04	0.29	0.4	Obs.
58	94-52-d	石鏡	2.04	1.11	0.37	0.6	Obs.
59	92-53-b	石鏡	2.32	1.19	0.37	0.7	Obs.
60	95-52-d	石鏡	2.47	1.21	0.40	0.9	Obs.
61	94-53-b	石鏡	(1.92)	1.19	0.30	(0.5)	Obs.
62	93-52-d	石鏡	1.91	1.06	0.34	0.5	Obs.
63	91-52-c	石鏡	2.07	1.13	0.30	0.5	Obs.
64	91-53-b	石鏡	(1.93)	1.00	0.25	(0.4)	Obs.
65	93-50-c	石鏡	1.93	1.12	0.29	0.5	Obs.
66	94-52-a	石鏡	(2.05)	1.07	0.34	(0.5)	Obs.
67	93-53-b	石鏡	2.01	1.00	0.29	0.5	Obs.
68	93-52-c	石鏡	2.09	1.14	0.38	0.6	Obs.
69	92-51-c	石鏡	2.03	1.36	0.30	0.7	Obs.
70	93-53-a	石鏡	(1.86)	1.20	0.34	(0.6)	Obs.
71	93-52-c	石鏡	(2.18)	1.19	0.27	(0.5)	Obs.
72	93-53-a	石鏡	2.70	1.25	0.25	0.7	Obs.
73	95-52-d	石鏡	(2.38)	1.49	0.26	(0.8)	Obs.
74	93-53-b	石鏡	(1.79)	1.54	0.34	(0.5)	Obs.
75	91-52-c	石鏡	2.02	0.98	0.29	0.4	Obs.
76	94-51-d	石鏡	2.71	1.30	0.43	0.8	Obs.
77	93-53-d	石鏡	1.91	0.94	0.26	0.3	Obs.
78	94-52-a	石鏡	(1.94)	0.87	0.31	(0.4)	Obs.
79	93-53-b	石鏡	(1.88)	0.81	0.26	(0.3)	Obs.
80	93-53-b	石鏡	2.17	0.97	0.25	0.4	Obs.
81	91-52-c	石鏡	(2.05)	1.03	0.34	(0.5)	Obs.
82	93-52-a	石鏡	(2.07)	1.06	0.28	(0.5)	Obs.
83	91-52-c	石鏡	2.30	0.99	0.27	0.4	Obs.
84	93-53-d	石鏡	2.37	0.93	0.28	0.5	Obs.
85	93-52-c	石鏡	2.39	1.09	0.34	0.6	Obs.
86	93-53-c	石鏡	2.42	1.05	0.38	0.6	Obs.
87	93-53-c	石鏡	2.08	0.95	0.30	0.4	Obs.
88	92-52-b	石鏡	(1.98)	0.93	0.27	(0.3)	Obs.
89	92-53-b	石鏡	2.32	0.91	0.25	0.4	Obs.
90	92-53-b	石鏡	2.35	1.00	0.28	0.5	Obs.
91	94-51-d	石鏡	2.66	1.00	0.40	0.8	Obs.
92	92-53-a	石鏡	2.29	1.05	0.50	0.8	Obs.
93	94-51-c	石鏡	(2.22)	1.20	0.30	(0.6)	Obs.
94	91-53-d	石鏡	2.47	1.08	0.48	1.0	Obs.
95	94-52-a	石鏡	(2.27)	1.07	0.42	(0.7)	Obs.
96	93-52-b	石鏡	2.59	1.15	0.32	0.6	Obs.
97	93-52-b	石鏡	2.52	1.18	0.30	0.6	Obs.
98	93-53-c	石鏡	(2.31)	1.06	0.35	(0.6)	Obs.
99	93-52-c	石鏡	2.50	0.90	0.35	0.5	Obs.
100	93-53-c	石鏡	(2.31)	0.92	0.35	(0.6)	Obs.
101	93-53-b	石鏡	2.51	0.99	0.32	0.6	Obs.
102	94-52-d	石鏡	2.52	0.95	0.30	0.5	Obs.
103	93-53-b	石鏡	3.07	1.16	0.21	0.6	Obs.
104	94-53-b	石鏡	3.15	1.26	0.25	0.7	Obs.
105	94-52-d	石鏡	3.66	1.51	0.37	1.4	Obs.
106	94-52-c	石鏡	(2.10)	(1.18)	0.27	(0.5)	Obs.
107	94-52-c	石鏡	(2.54)	0.99	0.21	(0.5)	Obs.
108	93-53-d	石鏡	(2.17)	1.13	0.23	(0.5)	Obs.
109	93-53-c	石鏡	(2.65)	1.14	0.21	(0.7)	Obs.
110	93-52-b	石鏡	(1.78)	0.88	0.32	(0.4)	Obs.

表VI-3 掲載石器一覧表

図番号	グリット	名称	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	高さ(m)	石質	図番号	グリット	名称	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	高さ(m)	石質
111	91-52-c	石製水製品	1.90	1.12	0.31	0.6	Obs.	166	93-52-d	スレイン	3.30	2.76	0.73	7.6	Obs.
112	94-52-c	石製水製品	2.10	1.14	0.30	0.6	Obs.	167	93-53-b	スレイン	5.11	3.32	0.73	14.2	Obs.
113	93-52-c	石製水製品	2.19	1.12	0.29	0.6	Obs.	168	91-52-c	スレイン	4.27	4.15	1.27	20.2	Obs.
114	94-53-b	石製水製品	2.37	1.15	0.36	0.6	Obs.	169	92-52-c	スレイン	6.10	3.40	0.86	18.9	Obs.
115	94-52-c	石製水製品	2.04	1.14	0.22	0.4	Obs.	170	94-53-a	スレイン	3.61	5.18	1.10	20.4	Obs.
116	93-53-b	石製水製品	1.98	1.14	0.30	0.6	Obs.	171	93-53-a	スレイン	6.21	3.52	0.80	20.1	Sh.
117	91-53-d	石製水製品	2.39	1.04	0.20	0.4	Obs.	172	94-50-c	スレイン	3.69	4.80	1.02	14.8	Obs.
118	93-53-d	石製水製品	2.43	1.08	0.30	0.5	Obs.	173	93-53-a	スレイン	3.82	3.03	0.59	6.9	Obs.
119	93-52-a	石 鉋 先	3.42	1.37	0.51	1.7	Obs.	174	93-53-c	スレイン	4.26	3.35	0.62	8.8	Obs.
120	93-53-a	石 鉋 先	(3.53)	1.54	0.43	(1.8)	Obs.	175	94-53-b	スレイン	5.22	4.70	0.53	6.9	Obs.
121	91-53-d	石 鉋 先	5.29	1.78	0.37	3.1	Obs.	176	95-52-d	スレイン	3.42	3.52	0.53	7.3	Obs.
122	92-51-c	鎌 刃	4.19	1.15	0.44	2.2	Obs.	177	94-52-d	スレイン	3.70	2.89	0.64	8.6	Obs.
123	95-52-d	石 槍	5.19	5.18	0.83	7.0	Obs.	178	95-52-a	スレイン	4.48	4.02	0.79	16.1	Obs.
124	93-53-b	石 槍	(4.04)	2.07	0.83	(5.6)	Obs.	179	95-52-a	スレイン	4.07	3.62	0.64	22.6	Agg-Sh.
125	93-52-c	石 槍	3.61	1.92	0.75	4.1	Obs.	180	94-52-a	スレイン	3.16	3.29	0.54	7.5	Obs.
126	91-53-b	石 槍	5.81	3.25	0.72	8.1	Obs.	181	93-52-a	石のみ	8.10	1.52	0.86	15.3	Gr-Sch.
127	93-53-a	石 槍	(3.75)	3.36	0.62	(5.8)	Obs.	182	94-52-c	石 斧	9.22	2.98	1.28	51.3	Gr-Mud.
128	94-52-d	石 槍	(2.24)	(1.17)	(0.41)	(1.1)	Obs.	183	91-53-d	石 斧	(6.06)	3.25	(0.66)	(21.7)	Mud.
129	91-52-c	石 槍	3.61	3.38	0.79	7.6	Obs.	184	93-53-b	石 斧	(6.51)	4.02	0.89	(33.1)	Sh.
130	93-53-c	石 槍	(4.45)	3.76	0.75	(9.0)	Obs.	185	106-47	石 斧	(6.83)	3.80	0.88	(40.8)	Mud.
131	93-52-d	石 槍	5.42	1.45	0.97	7.8	Agg.	186	94-53-a	石 斧	7.79	4.29	1.14	75.5	Gr-Mud.
132	93-53-c	ラウンド・S	2.09	2.35	0.79	4.6	Obs.	187	表 鏡	石 斧	9.73	5.87	1.48	132.0	Ser.
133	94-50-c	ラウンド・S	2.97	3.37	0.95	11.1	Obs.	188	95-52-d	石 斧	(5.43)	5.31	(1.91)	(88.6)	Gr-Mud.
134	92-52-a	ラウンド・S	3.83	4.42	1.17	19.0	Obs.	189	95-51-a	石 斧	(8.71)	(5.44)	2.64	(172.5)	Gr-Mud.
135	93-53-b	ラウンド・S	3.38	4.30	1.03	14.3	Obs.	190	95-51-a	石 斧	(1.26)	5.85	2.68	(260.2)	Gr-Mud.
136	94-52-d	スレイン	2.22	1.58	0.60	2.2	Obs.	191	92-52-a	石 斧	(3.50)	2.85	1.34	(19.7)	Gr-Mud.
137	91-53-b	スレイン	2.53	2.72	0.77	4.1	Obs.	192	93-52-a	石 斧	(3.96)	3.46	1.29	(21.1)	Sch.
138	93-53-d	スレイン	2.85	1.75	0.61	2.8	Obs.	193	94-53-b	石 斧	(4.32)	2.56	0.61	(8.2)	Sh.
139	94-50-d	スレイン	3.48	2.33	0.98	7.1	Obs.	194	91-52-c	石 斧	(4.97)	(3.80)	(1.77)	(37.0)	Gr-Mud.
140	93-53-c	スレイン	3.36	2.44	1.09	8.6	Obs.	195	106-47	石 斧	(10.02)	4.84	2.50	(180.5)	Sch.
141	94-52-b	スレイン	3.60	3.43	1.21	10.0	Obs.	196	93-52-d	石製水製品	9.51	4.23	2.56	158.6	Gr-Mud.
142	92-53-b	スレイン	3.25	3.05	0.83	8.2	Obs.	197	91-52-b	たたき石	8.80	6.96	1.88	193.3	Ser.
143	92-52-c	スレイン	5.80	1.72	0.73	10.8	Obs.	198	93-54-d	くばみ石	99.30	52.25	40.45	293.0	And.
144	92-52-c	スレイン	2.71	2.29	0.71	5.9	Obs.	199	95-49-a	たたき石	(6.71)	(4.41)	(3.38)	(115.7)	Tu.
145	表 探	スレイン	4.02	2.42	1.11	9.8	Obs.	200	91-53-b	たたき石	9.11	7.40	5.30	481.6	And.
146	92-53-b	スレイン	3.56	2.94	0.94	14.1	Obs.	201	95-53-a	ナリ石	7.43	7.34	5.89	360.6	And.
147	92-52-c	スレイン	4.13	2.99	0.71	9.6	Obs.	202	93-53-c	砥石	8.80	5.40	2.42	102.6	Sa.
148	92-52-a	スレイン	4.47	3.10	0.94	14.9	Obs.	203	92-52-c	砥石	9.65	5.58	3.56	172.0	Sa.
149	94-52-c	スレイン	4.81	3.59	0.80	15.1	Obs.	204	92-52-d	砥石	12.99	7.44	4.21	423.6	Sa.
150	93-53-d	スレイン	3.70	3.30	0.36	5.4	Obs.	205	93-53-d	石 槌	2.31	4.43	2.29	23.8	Obs.
151	94-53-b	スレイン	4.74	2.35	0.95	11.0	Obs.	206	94-50-c	石 槌	2.40	2.91	1.55	8.6	Obs.
152	95-51-a	スレイン	6.94	3.52	1.00	21.0	Obs.	207	95-53-a	石 槌	3.74	3.22	1.48	17.7	Obs.
153	93-53-b	スレイン	3.39	1.71	0.48	3.5	Obs.	208	92-51-c	石製水製品	4.06	1.34	0.65	4.6	Obs.
154	93-53-a	スレイン	3.54	2.46	0.78	7.8	Obs.	209	93-52-d	土製品	1.41	1.34	1.44	1.8	
155	93-52-c	スレイン	4.41	1.98	0.94	6.4	Obs.	210	95-53-a	土製品	(4.55)	1.85	1.35	(10.0)	
156	93-53-c	スレイン	5.34	1.52	0.63	5.7	Obs.	211	93-53-d	土製品	(5.15)	1.58	1.12	(7.7)	
157	93-52-a	スレイン	5.25	2.33	1.00	11.2	Obs.	212	94-52-d	土製品	4.42	1.69	1.36	9.4	
158	93-52-c	スレイン	5.93	1.67	0.83	6.9	Obs.	213	表 鏡	石製品	3.82	2.05	0.73	7.6	Per.
159	94-53-b	スレイン	5.47	1.76	0.79	6.7	Obs.								
160	95-52-a	スレイン	5.53	1.97	0.81	7.7	Obs.								
161	93-53-b	スレイン	2.39	1.69	0.44	2.1	Obs.								
162	92-52-c	スレイン	2.45	2.03	0.77	3.4	Obs.								
163	93-52-d	スレイン	3.88	1.25	0.58	3.9	Obs.								
164	93-53-a	スレイン	3.61	2.00	0.70	4.9	Obs.								
165	94-52-a	スレイン	3.35	3.05	0.64	6.0	Obs.								

表VI-4 掲載石器一覧表

今回の調査で得られた石器資料は前述のとおり石鏃の多いが目立つ。その分布は遺構の位置とほぼ重なり、調査区の南半部に多く出土する。フリクチップを除いた他の石器もほぼ同じような分布傾向を示す。特に石鏃については遺構の集まる南半部の東側・中央部・西側の3カ所に多く出土する。黒曜石のフリクチップの出土分布は南東角に最も多く、南側の中央部と中央からやや北側よりの地区で多く出土する。これらは後の耕作による影響もあろうが、まとまって検出されたものではない。他に、石槍・石鏃・砥石などは52と53の中間線より南側のみ検出された。

石鏃は有茎のものが69点と約半数をしめる。図VI-26は長さ甚至比幅の狭いものほど上に位置し、重さに比べ厚さの薄いものほど右側に位置する。したがって三角形の石鏃は他の石鏃の右下に並ぶ。図VI-17(76)の石鏃は茎が長く、また側辺に使用痕のみられることから石鏃としても使用したと考えられる。

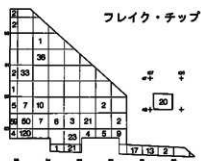
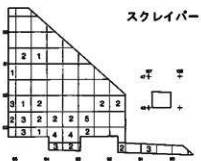
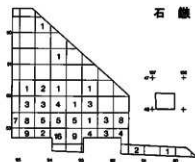
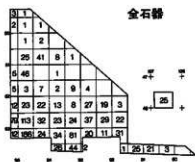
植刃とした図VI-18(122)は縄文時代晩期に伴うものと考えられる。木または骨などの軸に嵌めもしくは挿入されたものであろう。これは、細石刃と同様な用いられ方と考えられる。また、北九州地方の縄文時代晩期に伴う遺物として石鋸(多くは黒曜石を素材とし、長さ1~4cm両面から丹念な剝離が施され、長軸の側辺に鋸歯状もしくは歯列をもたないサイド・ブレイド(Composite-tool)があり、極めて類似性の高いものである。北海道においても函館市の目名沢遺跡で植刃が出土しているとの事であるが、実見の機会を得ていない。また、長沼町梶内タンネトウ遺跡(野村 1977)に於て細長い石鏃としたものにサイド・ブレイドの機能を持つ可能性が指摘されている。

スクレイパー類のなかで図VI-19(153)・(157)~(160)は厚みのある剝片の側辺を折り割ったように細長く造られ下端部は刺突器状の機能を持つと考えられる。

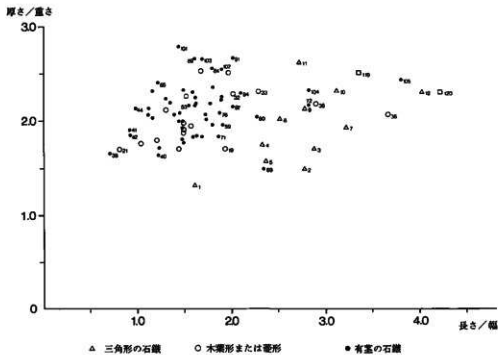
図VI-21(187)の石斧は表採資料として扱ったが、本遺跡調査前の現状は運動公園用地内の他地区の土を盛り土してあり、他の地点から運ばれた可能性が考えられる。

濼群から検出された石鏃 図VI-11(19)は大型のものである。富良野市無頭川遺跡の報告(杉浦 1988)による鏃石のC型に相当する。

(谷島 由貴)



図VI-25 石器分布図



図VI-26 石鏃の指数グラフ

4. 小括

昭和62年度の発掘調査区は事前調査で確認された、西野視14遺跡の範囲の東端にあたる。台地縁辺部の沢に面しており、この沢は現在、農業用水の貯水池になっているが、古くから水量の豊かな沢であったと考えられる。

調査区内の遺構は95-53の3基の小ピット付近を中心として南半部の東側・中央部・西側に3重の弧状を呈するように検出されている。

これらは遺構内の出土遺物、及び周囲の出土遺物（土器片の大半は縄文時代晩期のもの）などから縄文時代晩期に構築されたものと考えられる。

形態は平面形がほぼ円形のもの10基と多い。他に不整円形のもの（P-3、P-4）、楕円形のもの（P-5、P-14）がある。規模は直径（長径）が41~55cm程のものが9基で大半を占める。それより小さい直径（長径）が40cm以下のもの（P-4、P-8、P-14）の3基、直径（長径）が60cm台のもの（P-11）が1基、長径が1m程の楕円形のもの（P-5）が1基である。断面形は坡底の丸いものと平坦なものが半々である。確認面（Ⅲ層の上面）からの深さは約5~14cmと浅くⅢ層（漸移層）からⅣ層（ローム層）を僅か掘り込む程度である。構築時の推定される掘込みも、さほど深くなかった（30~50cm程度）と考えられる。

土壌内出土遺物は、P-1・P-3・P-14で土器が一括出土した。P-1の土器は小型の浅鉢で坡底から検出された。P-3・P-14の土器は口径が約26.5cm、横走沈線の施されたもので出土状況も覆土からと類似する。これらの一括土器は復元されたが2/3が現存するもの、またはそれ以下である。他の土壌では土器片が1点から数点であり、石器が土壌内に検出されたものは無い。黒曜石のフリイクチップが4基の土壌（P-8、P-10、P-11、P-14）と礫群に出土したのみである。

包含層で出土した土器のうち大半を占めるV群c類のうち、多く出土した分布範囲は、遺構の検出位置とその周囲に重なる。また、石器も同様な傾向を示す。これらの土器はママチ遺跡でT a-c上位から出土したV群c類のものに対比される。土器は中~小型の壺・鉢・深鉢型が出土している。石器はママチ遺跡Ⅰ黒層出土の器種別割合と比較して石鏃・スクレイパーの比率が逆転するだけで大型の礫石器が少ないなど、同様な傾向を示すと考えられる。

このように、本遺跡では、小さな土壌や礫群がみられる程度で土器も比較的小さなものが多く、石器も狩猟に関する器種が大半を占めるなど、キャンプサイトとしての性格が強いものと思われる。

（谷島 由貴）



調査前 E→W



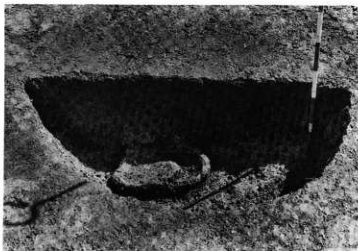
調査風景 N→S



完掘S→N



完掘N→S



P-1 土層断面



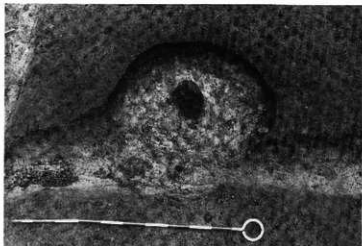
P-1の土器



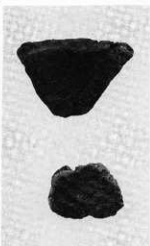
P-1



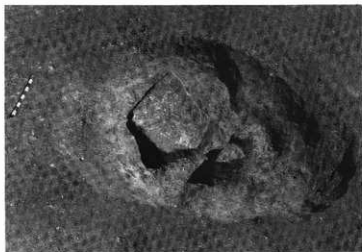
P-1の土器



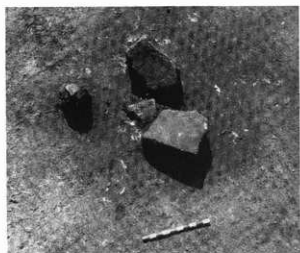
P-2



P-2の土器



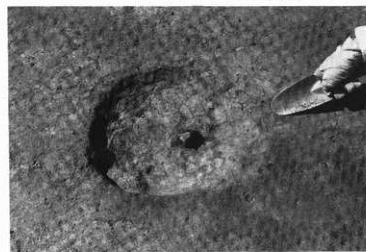
P-3



P-3 確認



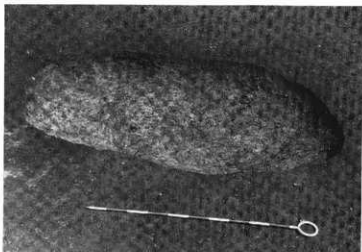
P-3の土器



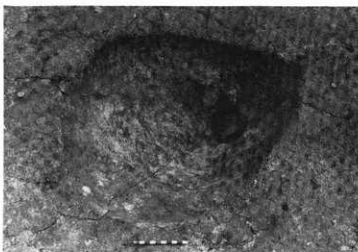
P-4



P-4の土器



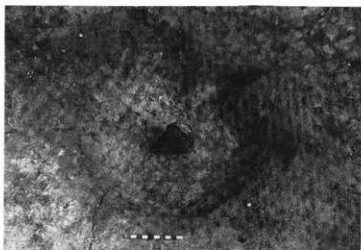
P-5



P-6



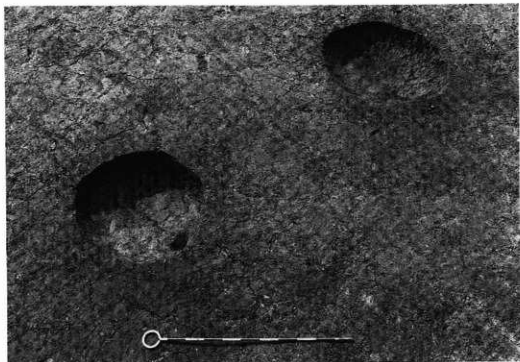
P-6の土器



P-8

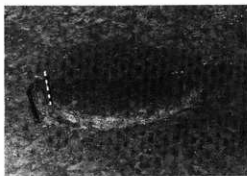


P-8の石片

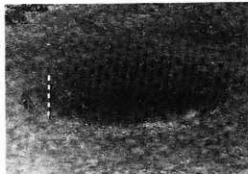


P-7

P-9



P-7 土層断面



P-9 土層断面



P-7 の土器



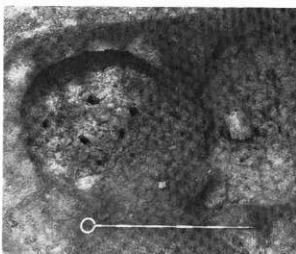
P-9 の土器



P-10



P-10の土器



P-11

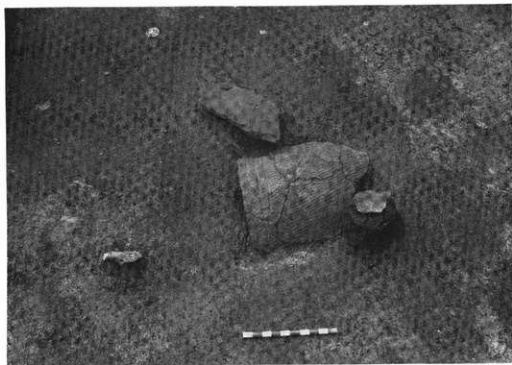


P-11の土器



P-12

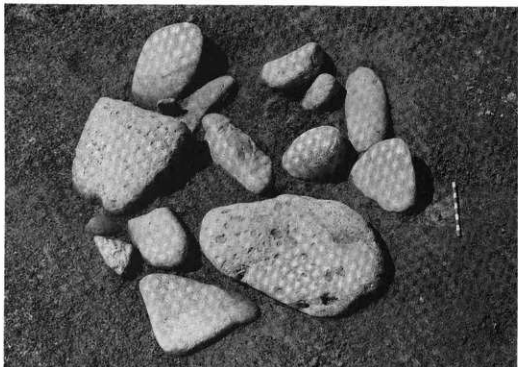
P-13



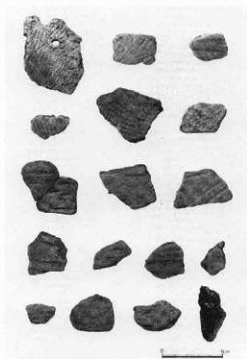
P-14確認



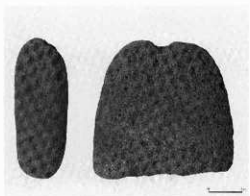
P-14の土器



礫群



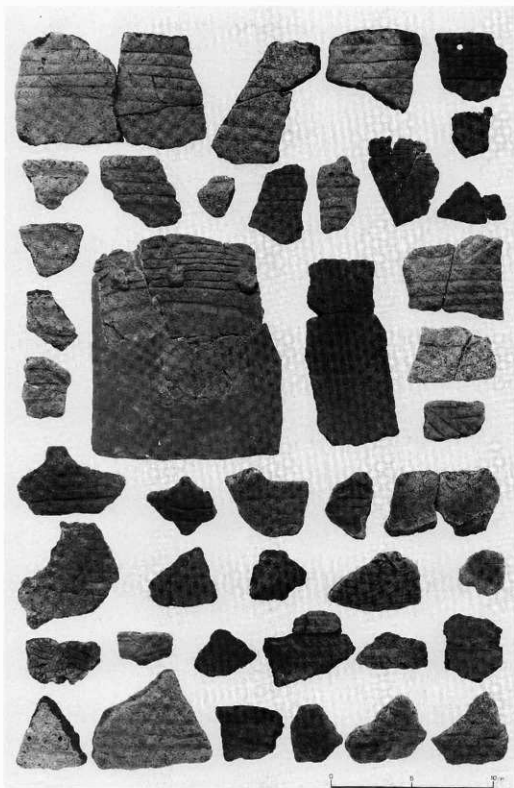
礫群の土器・石楯



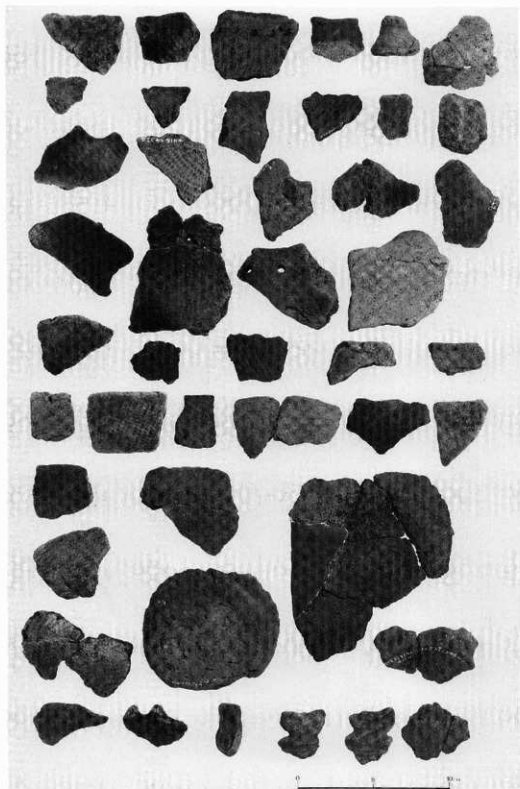
礫群の礫石器



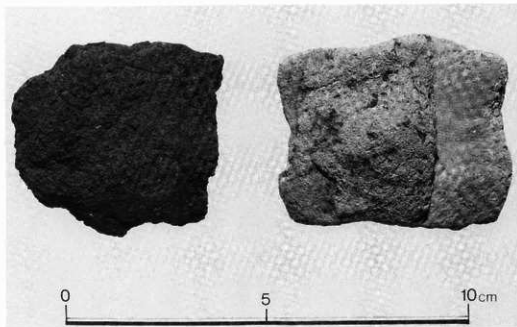
土器(1)



土器(2)

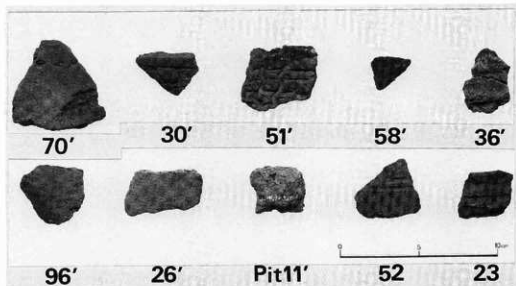


土器(3)



1. 施文後に粘土の重ね塗りが行われたと思われるⅢ群土器(131ページ参照)。

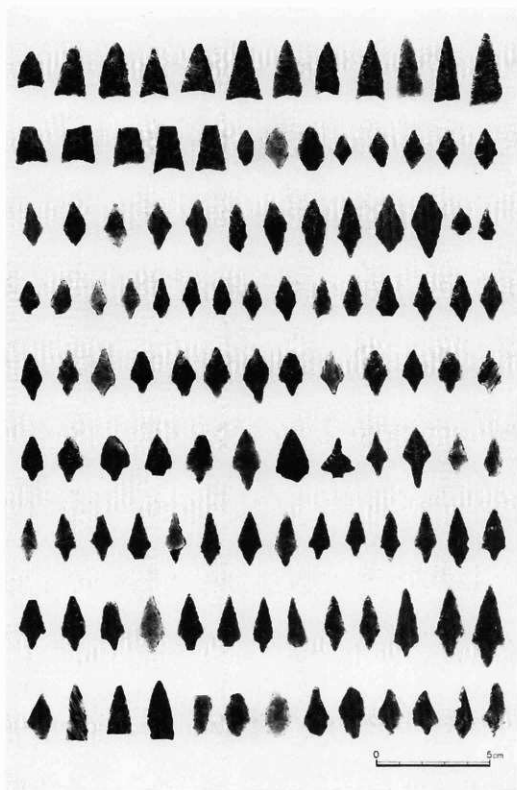
2. 付着物のあるⅤ群土器。付着物は土器外面全体に認められたが、右側は削りおとしている(136ページ参照)。



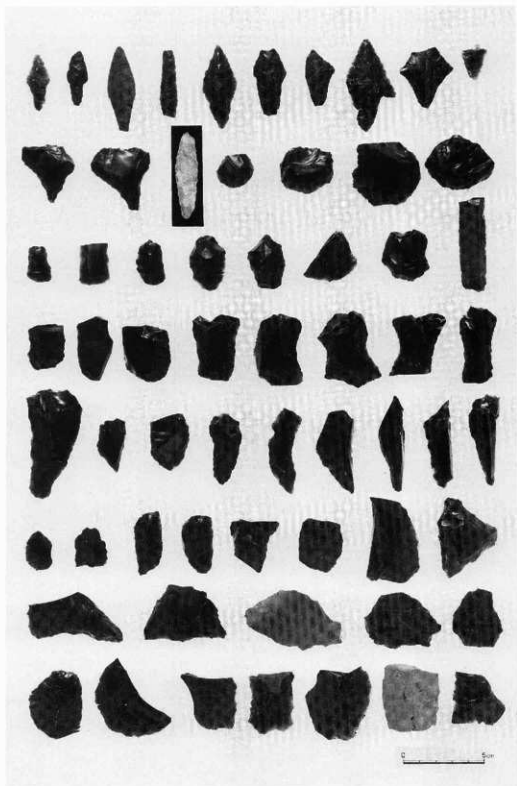
胎土分析に使用した土器

数字は拓影図の番号と対応する。ダッシュをつけたものは同一個体と考えられる土器。

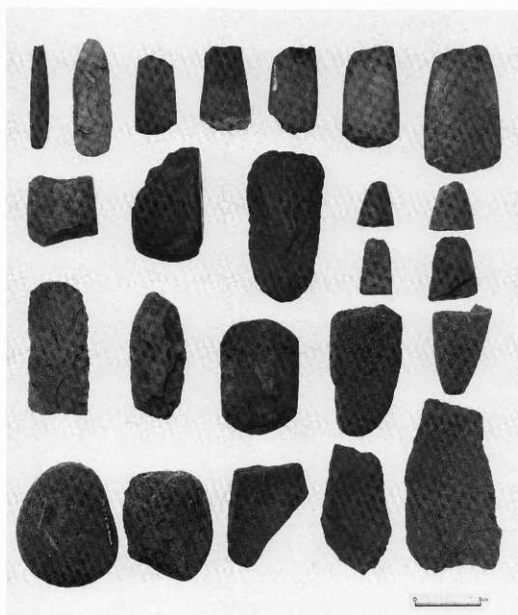
pit11'はピット11の1と同一個体。



石器(1)



石器(3)



石器(4)



石器等



VII

下学田遺跡

0 100 200

VII 下学田遺跡

1. 遺跡の概要

野幌丘陵の東側は、下学田から、広島町北の里付近にかけて、多くの小沢が入り込むが、標高20～30mの間には平坦部が連続してある。下学田遺跡は、桜沢に注ぐ小沢に面した標高27～30mの平坦部に位置する。

遺跡は、かつて耕作地として利用されていたが、現在では雑草地となっている。遺跡北側の低地は、ハンノキ、ヤチダモなどの雑木林、東側は植林によるマツ林がある。

層序は、全面に耕作による攪乱がみられ、一部の漸移層を除いて、ローム層まで攪乱されている。またローム層を掘り込んで暗渠がつくられている。地表面から約1.2mの深さで南北にのびており、径約10cmの土管が埋設されている。

調査の結果、遺物が総計で22点出土したが時期を判別できるものはない。遺構は検出されなかった。

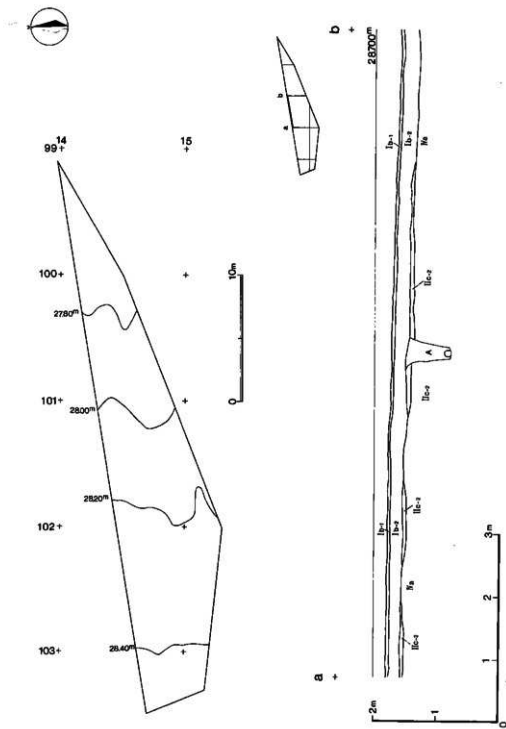
周辺の遺跡は、南へ約350mに縄文時代晩期後葉のタンネットウL式土器を出土する西野幌14遺跡がある。南東700mには、縄文時代中期の北筒式土器、これに伴うと考えられる石器・統縄文時代の土壌を主体とした西野幌12遺跡がある。

(佐藤 和雄)

調査区内の土層について、図VII-1に中央部北壁における断面実測図を掲げ、堆積のみられた各層を以下に説明する。

- I b-1層 表土。草の根が密生する耕作土の上部。
- I b-2層 耕作土。黄褐色粘土粒を混在させる黒色土。
- II c-2層 暗茶褐色粘質土。径3mm程のスコリアを多く含む。
- IV a層 黄褐色粘土。堅くしまっているが、水分を含むとドロドロにぬかる。
- A層 暗渠排水のため掘られた溝を埋める土層。排水管を埋設したのちに、掘りあげた黄褐色粘土や暗茶褐色粘質土などを埋め戻している。

(高橋 和樹)



図Ⅶ—1 調査区と土層断面図

2. 遺物

今回の調査によって出土した土器片・石器類の総計は22点である。

土器は3点出土。いずれも小破片で、摩耗しているため、文様の観察に耐えないものである。したがって時期の判別は不可能である。

石器類19点出土。このうち製品は石鏃・石斧の2点のみで、残りは全て黒曜石の剝片である。

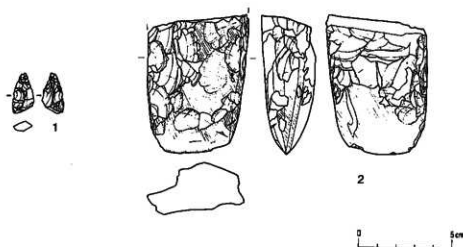
石鏃 (図VII-2: 1)

黒曜石製で、基部を欠損している。

石斧 (図VII-2: 2)

泥岩製。側縁部の打欠きによる調整の後、全面研磨されている。

(佐藤 和雄)



図VII-2 出土遺物

3. 小括

今回の調査では遺跡の一部を発掘したにすぎず、また包含層は全面に耕作による擾乱がみられた。遺物は総計で22点出土したのみで、遺構は検出されない。遺物から縄文時代に属する遺跡であるという以外は本遺跡の性格・時期を知る資料は得られなかった。

今回調査した場所は沢に面した先端部分の一部であることから、南側へ続く平坦部が遺跡の主体である可能性が高い。

(佐藤 和雄)



調査風景



調査風景



出土遺物

引用・参考文献

- 石川 徹：1967 『札幌平野砂山出土の土器について』 『北海道考古学3』
- 石田正夫・青藤勉典：1980 20万分の1地質図幅「札幌」北海道立地下資料調査所
- 石原喜三男・佐藤誠哉ほか：1981 『東野帳4』江別市文化財調査報告書XII-1
- 石本省三：1986 『七飯本町1・2遺跡』七飯町教育委員会
- 上野秀一・羽賀憲二・高橋和樹：1975 『S256遺跡 S257遺跡 S253遺跡』札幌市文化財調査報告書X I
- 遺跡帳：1978 『宮ヶ岡遺跡』広島町教育委員会
- 大島宣行編：1979 『知内川流域の縄文時代遺跡』知内町教育委員会
- 大橋利夫・石川 徹：1956 『手帳遺跡』手帳町教育委員会
- 大沼忠孝：1982 『後北式土器』『縄文土器大成 5 総論』講談社
- 大沼忠孝：1986 『道南の縄文前期土器群の周年について(II)』 『北海道考古学22』
- 加藤邦雄・上野秀一ほか：1984 『T464遺跡 T465遺跡 T466遺跡』札幌市文化財調査報告書XVI
- 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・田部 洋・田村美智子：1983 『T161遺跡』札幌市文化財調査報告書XVII
- 加藤邦雄・上野秀一・高橋和樹・土田直佐子：1976 『T210遺跡』札幌市文化財調査報告書XIII
- 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二：1987 『N296遺跡』札幌市文化財調査報告書XXII
- 加藤邦雄：1987 『S270遺跡』札幌市文化財調査報告書XXI
- 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・田部 洋：1982 『S354遺跡』札幌市文化財調査報告書XXV
- 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二・田村美智子：1982 『S153遺跡』札幌市文化財調査報告書XIV
- 加藤邦雄・上野秀一・羽賀憲二：1982 『S458遺跡 S320遺跡 S456遺跡』札幌市文化財調査報告書XXIII
- 北海道開拓記念館：1981 『野幌丘陵とその周辺の自然と歴史』北海道開拓記念館研究報告 第6号
- 北川芳男・中村 審ほか：1974 『野幌丘陵周辺の第四紀に関する諸問題』北海道開拓記念館研究年報 第3号
- 北川芳男・大野秋夫ほか：1975 『野幌丘陵の地質と古生物』北海道開拓記念館調査報告 第9号
- 網谷賢一：1976 『西野幌遺跡』江別市第47、48、49号遺跡。江別市文化財調査報告書V
- 久保 泰・石本省三・松谷 太・斎藤 久：1985。『札幌』松前町教育委員会
- 後藤寿一：1936 『石狩国江別町の壺穴住居址について』 『考古学雑誌』25-2
- 斎藤 傑ほか：1981 『東神楽町沢田の沢遺跡発掘報告』東神楽町教育委員会
- 斎藤 傑・氏江誠文：1974 『松前町大塚遺跡発掘報告書』松前町教育委員会
- 西道宗徳・田村俊之：1979 『ウチタマイ遺跡群とその周辺における考古学的調査』千歳市歴史文化財調査報告書IV
- 佐藤一夫・工藤 肇・宮本晴夫：1976 『樺島貝塚』苫小牧市教育委員会
- 佐藤一夫・工藤 肇ほか：1980 『苫小牧東部工業地帯 歴史文化財発掘調査概報報告書IV』苫小牧市教育委員会
- 佐藤隆広：1980 『ホロナイ遺跡』枝幸町教育委員会
- 杉浦重信：1988 『北海道の礫石について』 『熊川遺跡』富良野市教育委員会
- 加藤マチ子：1974 (1947) 『野幌部歴史(復刊)』国書刊行会
- 平沢長介：1965 『縄文時代の研究をめぐる諸問題 周辺文化との関連』 『日本の考古学II 縄文時代』西谷啓勝社
- 園部真幸・中村謙吉：1986 『大森15遺跡』江別市文化財調査報告書XII
- 園部真幸：1987 『高砂遺跡』江別市文化財調査報告書25
- 高橋正勝・直井幸一・園部真幸・土田直佐子：1979 『江別太道跡』北海道史学協会
- 高橋正勝・直井幸一ほか：1981 『元江別道跡群』江別市文化財調査報告書XIII
- 高橋正勝・直井幸一・園部真幸・佐藤誠哉ほか：1982 『沢ヶ岡遺跡』江別市文化財調査報告書XV
- 高橋正勝・園部真幸：1984 『旧豊平町跡 七日沢?』江別市文化財調査報告書XVIII
- 高橋正勝・園部真幸：1985 『旧豊平町跡』江別市文化財調査報告書XIX
- 高橋正勝・園部真幸：1986 『大森3遺跡』江別市文化財調査報告書XX
- 高橋正勝・園部真幸・中村謙吉：1986 『高砂遺跡』江別市文化財調査報告書XXI
- 高橋正勝・園部真幸：1986 『旧豊平町跡V』江別市文化財調査報告書23
- 高橋正勝・園部真幸：1987 『大森21遺跡』江別市文化財調査報告書24
- 田部 洋・田村ヲコ・今田雅恵：1987 『T361遺跡』札幌市文化財調査報告書XXIX
- 直井幸一編：1982 『大森6』江別市文化財調査報告書XIV
- 直井幸一編：1983 『大森6』江別市文化財調査報告書XVI
- 中村 審・伊藤 伊彦：1970 『江別市大森第V遺跡発掘調査報告書』江別市教育委員会
- 中村 審・松下 互：1975 『小島の沢遺跡』江別市教育委員会

- 中村 喜・梶谷賢一：1975 『高砂遺跡 江別市第12号遺跡』江別市文化財調査報告書IV
- 中村 喜：1978 『北海道江別市 埋蔵文化財分布調査報告書』江別市教育委員会
- 中村 喜：1980 『大森1遺跡』江別市文化財調査報告書X
- 野村 徹：1977 『長沼町境内タンネトウ遺跡の発掘調査』空知地方史研究協議会
- 八戸芳夫：1979 『ドヤンコ』H T B ままのほん
- 北海道教育委員会：1978 『美沢川流域の遺跡群II』
- 北海道教育委員会：1984 『江別地区遺跡分布特別調査報告書』
- (財)北海道埋蔵文化財センター：1980 『東野幌3』、『大森1遺跡・西野幌1・西野幌3・東野幌3』
- (財)北海道埋蔵文化財センター：1981 『大森1遺跡』北埋調報2
- (財)北海道埋蔵文化財センター：1981 『東山5遺跡』北埋調報4
- (財)北海道埋蔵文化財センター：1982 『吉井の沢の遺跡』北埋調報5
- (財)北海道埋蔵文化財センター：1982 『ママチ遺跡』北埋調報9
- (財)北海道埋蔵文化財センター：1984 『美沢川流域の遺跡群III』北埋調報14
- (財)北海道埋蔵文化財センター：1986 『美沢川流域の遺跡群IX』北埋調報24
- (財)北海道埋蔵文化財センター：1985 『西野幌11遺跡』北埋調報25
- (財)北海道埋蔵文化財センター：1987 『ママチ遺跡群』北埋調報36
- (財)北海道埋蔵文化財センター：1986 『西野幌3遺跡』北埋調報39
- 松下游秀：1971 5万分の1地質図幅「江別」および説明書(札幌第一第22号)北海道地下資源調査所
- 森田知忠：1981 「北海道」『縄文土器大成 3 後期』講談社
- 矢野牧夫・山田徳郎：1982 「北海道野幌丘陵に分布する最終氷期地質物の粘土層」北海道開拓記念館研究年報 第10号
- 山田徳郎・北川芳男：1982 「吉井の沢1遺跡の於ける古儀性の変化と種積谷について」『吉井の沢の遺跡』北埋調報5
- 山田徳郎：1982 「萩ヶ岡遺跡の古儀性について」『萩ヶ岡遺跡』江別市文化調査報告書XV
- 山田勇三：1984 『北海道の地名』北海道新聞社
- 渡辺俊一・佐藤一夫・工藤 聡ほか：1984 『苫小牧東部工業地帯 埋蔵文化財発掘調査概要報告書IV』苫小牧市教育委員会

財団法人 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第48集

西野幌 11 遺跡

西野幌 13 遺跡

西野幌 14 遺跡

下学田 遺跡

— 道立野幌総合運動公園用地内埋蔵文化財発掘調査報告書 —

昭和63年3月31日 発行

編集・発行 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

〒064 札幌市中央区南26条西11丁目

TEL (011)561-3131

印刷 中西印刷株式会社

〒065 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号

TEL (011)781-7501

この報告書は、北海道住宅都市部のご了解を得て増刷したものです。